仙台市文化財調査報告書第146集

宮城県仙台市

郡山遺跡XI

―― 平成2年度発掘調査概報 ――

1991. 3

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第146集

宮城県仙台市

郡山遺跡XI

―― 平成2年度発掘調査概報 ――

1991. 3

仙台市教育委員会

第86次調査区西半全景（北より）

序　　文

郡山遺跡の範囲確認調査も本年度は11年目を迎え、毎年数々の成果を積みあげ、東北の古代史解明に一石を投じておりますことは、古代史・考古学等の識者のみならず市民の皆様方にも御承知のことと存じます。

幻の城柵としての一端を現した昭和54年以来、継続的に進められてきた発掘調査により古代の文献に記録のない“幻の城柵”はまさに“甦る城柵”として私たちの前にその姿を現したのです。辺境とされてきた当地方の歴史観を一変した我が国最古の地方官衙跡・郡山遺跡の発見は日本の考古学・古代史学界に大きな反響を巻き起こしたものと確信しております。

本年度の調査ではⅠ期官衙の倉庫群や鍛冶工房の跡などが発見され、特に鍛冶工房については官衙内の工人たちの在り方を知る貴重な資料となり、不明な点の多い七世紀の官衙の実態が次第に解明されつつあります。ここに調査の記録を余すところなく報告、公開するものであります。

市街化への動きが著しい郡山地区にあって、文化財の保存につきましてもより一層緊密な調整を必要とする状況にありますが、そのような中にあって、継続的な調査を実施できますことは、ひとえに土地所有者の方々、地元町内会の皆様方の多くの御協力とご支援の賜物と感謝申し上げる次第であります。

先人の残した貴重な文化遺産をつぎの世代に継承していくことは、行政によってのみ成し得るものでなく、市民一人一人の先人への深い理解と子孫への広い展望なくしては成し得ないものであります。

これからも文化財保護への深いご理解と御協力をお願いするとともに、本書が文化財愛護精神高揚の一助となりますことを願って止みません。

平成３年３月

仙台市教育委員会
教育長　東海林　恒　英

例　　言

1．本書は郡山遺跡の平成2年度範囲確認調査の概報である。

2．本調査は国庫補助事業である。

3．本概報は調査の速報を目的とし、作成にあたり次のとおり分担した。

本文執筆	木村浩二	Ⅰ．Ⅱ．Ⅲ1・4．Ⅶ
	斎野裕彦	Ⅳ．Ⅴ．Ⅵ．
	前田裕志	Ⅲ2・3
遺構トレース	泉美恵子．伊藤房江．菅家婦美子．小林史子．桜井幸子	
遺物実測	青山博樹．片根義幸．在川宏志	
遺物トレース	青山．片根．在川	
遺構写真撮影	木村．斎野．前田	
遺物写真撮影	斎野	
遺物補修復元	赤井沢千代子．黒川光代	

編集は木村・斎野・前田がこれにあたった。

4．遺構図の平面位置図は相対座標で、座標原点は任意に設置したNo.1原点(X＝0、Y＝0)とし、高さは標高値で記した。

5．文中で記した方位角は真北線を基準としている。

6．遺構略号は次のとおりで、全遺構に通し番号を付した。

ＳＡ　柱列跡他塀跡	ＳＥ　井　戸　跡	ＳＸ　その他の遺構
ＳＢ　建　物　跡	ＳＩ　竪穴住居跡・竪穴遺構	Ｐ　ピット・小柱穴
ＳＤ　溝　　跡	ＳＫ　土　　坑	

7．遺物略号は次のとおりで、各々種別毎に番号を付した。

Ａ　縄　文　土　器	Ｄ　土師器（ロクロ使用）	Ｇ　平　瓦・軒平瓦
Ｂ　弥　生　土　器	Ｅ　須　恵　器	Ｈ　その他の瓦
Ｃ　土師器（ロクロ不使用）	Ｆ　丸瓦・軒丸瓦	Ｎ　金　属　製　品

8．遺物実測図の中心線は、個体の残存率がほぼ50％以上は実線、ほぼ25～50％で一点鎖線、これ以下は破線とし、網スクリーントーン貼り込みは黒色処理を示している。

9．本概報の土色については「新版標準土色帳」（小山・佐藤：1970）を使用した。

10．プラントオパール分析については古環境研究所に委託した。

11．陶器・磁器の鑑定は当課佐藤洋が行なった。

目　　次

序　　文
例　　言
I　はじめに……1
II　調査計画と実績……2
III　第86次発掘調査……7
1．調査経過……7
2．発見遺構……8
3．出土遺物……16
4．まとめ……22
IV　第87次発掘調査……27
1．調査経過……27
2．基本層序……27
3．発見遺構・出土遺物……28
4．まとめ……35
V　第88次発掘調査……37
1．調査経過……37
2．基本層序……37
3．発見遺構・出土遺物……37
4．まとめ……40
VI　第89次発掘調査……41
1．調査経過……41
2．基本層序……41
3．発見遺構・出土遺物……4
4．まとめ……50
仙台市郡山遺跡第89次調査区におけるプラント・オパール分析〔古環境研究所〕……51
VII　総　　括……55
調査成果の普及と関連活動……60
写真図版……61

Ⅰ　はじめに

平成２年度は郡山遺跡範囲確認調査第３次５ケ年計画１年次にあたり、下記の体制で臨んだ。

調査主体　　仙台市教育委員会

調査担当　　仙台市教育委員会文化財課

文化財課　　課長　早坂春一

管理係　　係長　鴇田義幸

主事　白幡靖子、佐藤良文、高橋三也、庄司　厚

調査係　　係長　佐藤　隆

主任　木村浩二

主事　斎野裕彦

発掘調査、整理を適正に実施するため調査指導委員会を設置し、委員を委嘱した。

委員長　佐藤　巧（東北工業大学教授　建築史）

副委員長　工藤雅樹（福島大学教授　考古学）

委　　員　岡田茂弘（国立歴史民俗博物館教授　考古学）

佐々木茂楨（宮城県多賀城跡調査研究所長兼東北歴史資料館副館長　考古学）

須藤　隆（東北大学文学部教授　考古学）

今泉隆雄（東北大学文学部助教授　歴史学）

発掘調査に際して、下記の方々諸機関から適切な御教示をいただいた。記して感謝したい。

文化庁記念物課　主任調査官　　河原純之

宮城県教育庁文化財保護課　　真山　悟、岩見和泰

宮城県多賀城跡調査研究所　　丹羽　茂

東北歴史資料館　　加藤道男

斎藤報恩会自然史博物館　　志間泰治

㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団　木戸春夫、田中広明

発掘調査および遺物整理にあたり、次の方々の御協力をいただいた。記して感謝したい。

地　権　者　赤井沢久治、斎藤助治、庄子　孝

調査参加者　前田裕志、青山博樹、赤井沢きすい、赤井沢サダ子、赤井沢千代子、安斎直子
泉美恵子、伊藤房江、大友鶴雄、尾形陽子、片根義幸、菅家婦美子、黒川光代
工藤ゑなよ、小林てる、小林史子、在川宏志、斎藤紀子、桜井幸子、武田知之
田中さと子、寺田ユウ子、畑中ゆかり、針生ゑなよ、福山幸子、峯岸安好
吉田アキヨ

整理参加者　前田裕志、青山博樹、赤井沢千代子、泉美恵子、伊藤房江、片根義幸
菅家婦美子、黒川光代、小林史子、在川宏志、桜井幸子、畑中ゆかり

II　調査計画と実績

平成２年度の発掘調査は昭和60年度から開始された「郡山遺跡範囲確認調査」第２次５ケ年計画の終了に伴い、引き続き平成２年度から平成６年度までの「第３次５ケ年計画案」が策定され、これが郡山遺跡調査指導委員会の了解を得たことから、第３次５ケ年計画初年次として実施した。第３次５ケ年計画（案）は次のとおりである。

表１　第３次５ケ年計画（案）

調査年次	調　査　地　区	調査予定面積
平成２年度	Ⅰ期官衙推定中枢地区	７００m²
〃　３年度	Ⅱ期官衙南西部	７００m²
〃　４年度	Ⅱ期官衙南東部	７００m²
〃　５年度	郡山廃寺中枢伽藍東部	７００m²
〃　６年度	〃　　〃	７００m²
計	５　地　区	３，５００m²

本年度の発掘調査については国庫補助金額の内示（総経費1500万円、国庫補助金額750万円、県費補助金額375万円）を得たことから、次のような実施計画（案）を立案した。

表２　発掘調査計画表

調査次数	調　査　地　区	調査予定面積	調査予定期間
第86次	Ⅱ期官衙中央北地区	400 m²	７月～９月
第87次	〃	300 m²	７月～９月
第88次	〃	100m²	７月
計	３　地　区	800 m²	７月～９月

また、この他に関連遺跡の遺構確認調査として、仙台市北部の窯跡群の調査と、仙台市西部の農村基盤総合整備事業にかかる条里遺構の発掘調査を併せて計画立案した。

計画策定後、事業の開始にあたり、緊急に調査を行う必要が生じ、最終時には第89次までの発掘調査を実施した。また、窯跡群については分布調査の結果、遺構群分布域は当該年度の開発計画区域に含まれていないことが確認されたことから、今年度は調査を行わないこととした。

第86次調査は方四町II期官衙の中央北地区にて行った。昨年度実施した第83次調査北区、および昭和57年度に実施した第24次調査区に隣接している。これまでの調査結果によれば、I期官衙の遺構群が集中して発見されており、塀によって区画された官衙ブロックの様子が明らかになりつつある。この調査区内でも板塀・材木列等の存在が想定された。現況は畑地であり、60～80 cmの天地返しによる撹乱が全域にわたっていた。遺構は撹乱層直下の黄褐色粘土質シルト層上面で検出した。調査の結果、材木列・板塀等の区画施設、掘立柱建物跡、鍛冶工房とみられる竪穴建物跡、溝跡、土坑、ピット等が発見され、I期官衙内部施設の在り方が次第に明らかになってきた。

第87次調査は方四町II期官衙の中央北寄りの地区にて行った。外郭北辺より150 m程南に位置し、昭和57年度に実施した第24次調査区に隣接している。この地区で住宅建築に伴う発掘届が提出されたことから、緊急調査を実施した。これまでの調査によれば、この地区にはI期官衙の倉庫群が立ち並び、本調査区内にも倉庫建物跡の存在が想定された。現況は畑地であり、60～80 cmの天地返しによる撹乱がほぼ全域にわたっていた。遺構は耕作土下のIII層上面で検出した。調査の結果、I期官衙段階の掘立柱建物跡、I期もしくはI期以前の竪穴居跡、溝跡、土坑、ピット等を発見した。

第88次調査は方四町II期官衙の中央北よりの地区にておこなった。前述した第87次調査区の東側に隣接している。この地区でアパート建築に伴う発掘届が提出されたことから、緊急調査を実施した。旧状は畑地と宅地であったが、90 cm程の盛土がなされており、旧耕作土下のII層上面で遺構を検出した。調査の結果、I期官衙内部の区画施設と見られる一本柱列跡の他、土坑・ピット等を発見した。

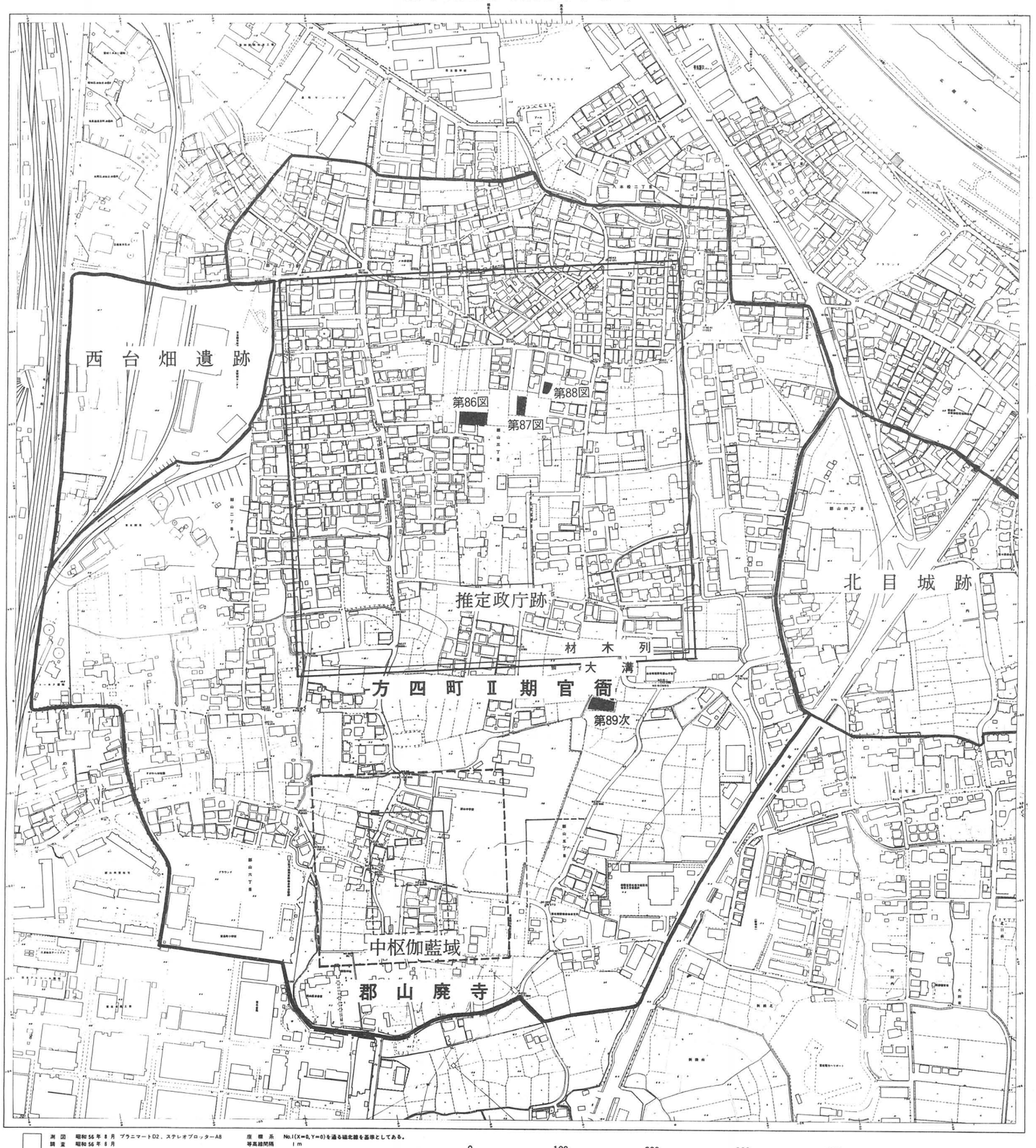
その後、第65次調査の北側で遺構確認調査を緊急に実施する必要が生じたことから、計画を一部変更し、国庫補助金の追加（総経費200万、国庫補助金100万、県補助金額50万）が決定したことから、第89次調査を実施した。

第89次調査は方四町II期官衙の外郭南辺外地区にて行った。この地区は郡山中学校校舎建設に伴って実施している第65次調査地区に隣接し、これまでの調査では官衙・寺院域外から多くの掘立柱建物跡が発見されており、本調査ではこれら遺構群の北方への広がりを確認することを目的とした。現況は水田である。調査の結果、III層上面で中世から近世の水田跡、IV層上面で溝跡、小溝状遺構群等を検出したが、官衙を構成する遺構群は発見されなかった。

表３　発掘調査実績表

調査次数	調　査　地　区	調査面積	調　査　期　間
第86次	II期官衙中央北地区	473 m²	７月10日～10月23日
第87次	II期官衙中央北地区	275 m²	７月10日～10月23日
第88次	II期官衙中央北地区	80 m²	７月10日～８月８日
第89次	II期官衙外郭南外地区	429 m²	10月23日～12月11日
計	４　地　区	1,257 m²	７月10日～12月11日

郡山遺跡現況平面図



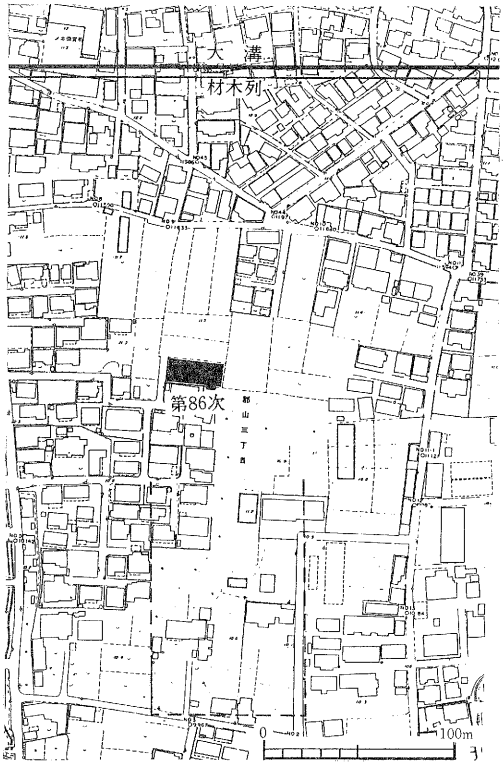
第1図　郡山遺跡全体図

Ⅲ　第86次発掘調査

1．調　査　経　過

第86次調査区は方四町Ⅱ期官衙の中央北寄りの地区にあたり、昭和57年度に実施した第24次調査Ａ区の南、平成元年度に実施した第83次調査北区の北西に隣接している。

これまでの周辺地区での調査により、本地区にはⅠ期官衙の遺構群が数多く発見されており、本調査区の北側には材木列・一本柱列等の塀によって方形に区画された官衙ブロックのあることがわかっている他、東側一帯には材木列を介して倉庫群が広がっている。また、北から続く材木列と東から続く板塀が本調査区の中で交差するものと推定される。



第２図　第86次調査区位置図

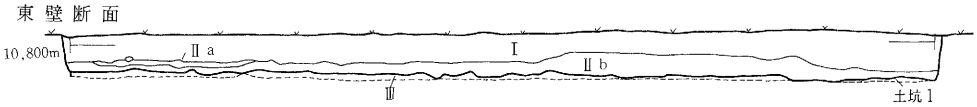
今次調査はそのようなこれまでの調査所見に基づいて、本地区における官衙建物の配置状況の確認並びにその性格を明らかにすることを目的として実施された。現況は畑地となっており、深さ60～80 cm 程の天地返しによる撹乱が全域に及んでいることが、事前に実施したテストピット調査により確認されたことから、重機によって表土・耕作土の排土作業を行った。

７月10日から調査を開始した。調査区は東西 30 m×南北 14 m とし、第24次調査Ａ区の南側に接して設定した。表土排除の結果、耕作土撹乱の下層でⅢ層黄褐色粘土質シルト層を検出、このⅢ層上面で遺構検出作業を行った。撹乱層の深さは60～80 cm で、東半部が特に深い。

調査区の北側で、第24次調査との関係を確認するため13×１m、南側で、第83次調査との関係を確認するため2×２m の調査区拡張を行った。

９月６日、第65次（郡山中学校建設事前調査）・第87次と併せ、調査成果について報道関係に発表し、９月８日、一般に公開して現地で説明会を開催し、150名以上の一般市民が見学した。その後、鍛冶工房跡の土壌サンプリング・図面作成などを行い、記録の点検・追加、補足調査を実施した。10月８日より埋め戻し作業と並行してサンプリング土壌の洗浄作業を行い、10月

23日全ての調査を終了した。



層位	土色	土性	備考
基本層位			
Ⅰ	10YR3/3暗褐色	シルト	
Ⅱa	10YR3/2黒褐色	シルト	10YR5/4褐色シルトを島状に含む
Ⅱb	10YR3/3黒褐色	シルト	10YR5/4にぶい黄褐色シルトを小ブロック状に含む
Ⅲ	10YR5/6黄褐色	粘土質シルト	10YR5/4褐色シルトを小ブロック状に含む（遺構検出面）
土坑			
1	10YR3/2黒褐色	シルト	10YR5/6黄褐色シルトを粒状に含む

第3図　第86次調査区土層断面図　0　5m

2．発見遺構

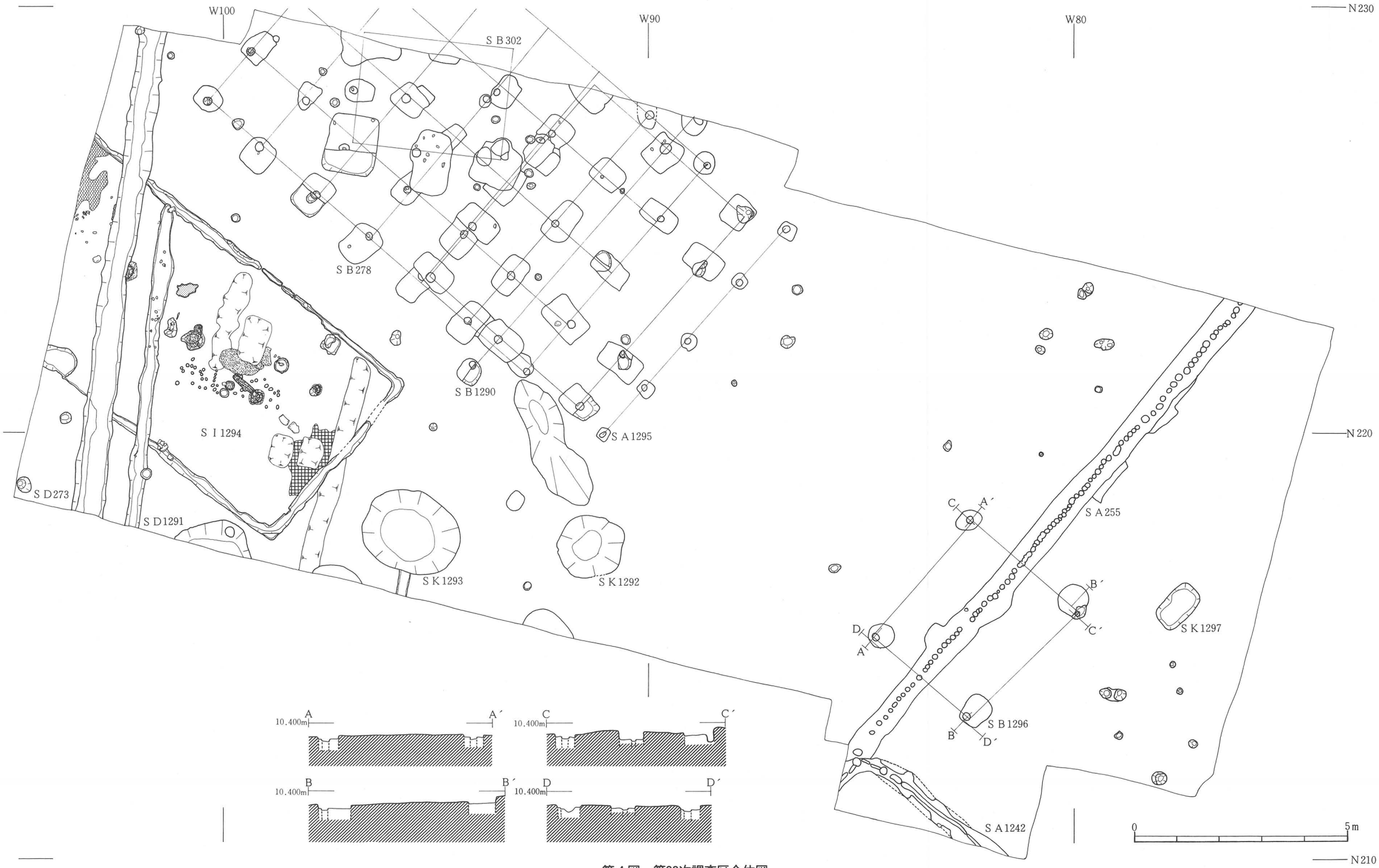
今回の調査で発見された遺構は、一本柱列2条、材木列1条、板塀跡1条、掘立柱建物跡4棟、竪穴建物跡1軒、溝跡2条、土坑3基、小柱穴・ピット43などである。これらの遺構は耕作土下層の黄褐色粘土質シルト（Ⅳ層）上面で検出したものであるが、本来はこの上層で検出される遺構である。しかし、耕作による撹乱のためⅣ層上層はほとんど残っていない。これらの遺構を大別すれば重複関係や基準方向の違いにより3つの階段に分けられ、これまでの段階区分の第3段階（Ⅰ期官衙）、第4段階（Ⅱ期官衙・寺院）、第5段階（平安以降）に相当する（註1）。特に第3段階のⅠ期官衙の遺構が主体をしめる。

SA255 材木列　南北に延びる材木列で、調査区の北、南へと更に続き、方向はN-35°-Sである。長さ14.4m、上幅50～65cmで布堀りのほぼ中央に直径8～12cmの柱痕跡が見られる。埋土は褐色・黒褐色・暗褐色シルトで須恵器片、土師器片が出土している。24次調査及び61次調査で検出されたSA800からの総長は93mである。SA1242に切られている。

SA1242 板塀跡　東西方向に延びる板塀であるが、SA255とぶつかるところで南に直角に曲がりさらに南に延びる。方向は東西方向がE-33°-S、南北方向がN-33°-Eである。長さは東西方向に3.5m、南北方向に0.9m、上幅22～73cmで布堀りのほぼ中央に幅6～8cmの板痕跡が見られる。77次調査（昭和63年度）において検出されたSA1204、SA1212、SA1220が東西ラインで同一直線上に並んでおり、このことからこの板塀の総長は東西方向に119mであるとみられる。土師器片が出土している。

SA1245 一本柱列　東西方向に延びる一本柱列で、調査区の南東に更に続く。柱穴は2.4m以上×0.7m以上の隅丸長方形である。SA1242と同位置にあり、これに切られている。83次調査での検出分も含め総長35.8m以上である。

SA1295 一本柱列　南北方向に延びる一本柱列で、方向はN-32°-Eである。柱間は南北4間



第４図　第86次調査区全体図

で総長は 6.5 m である。柱間寸法は150～ 180 cm、柱穴は一辺30～ 45 cm の隅丸正方形で柱痕跡は直径12～ 14 cm である。

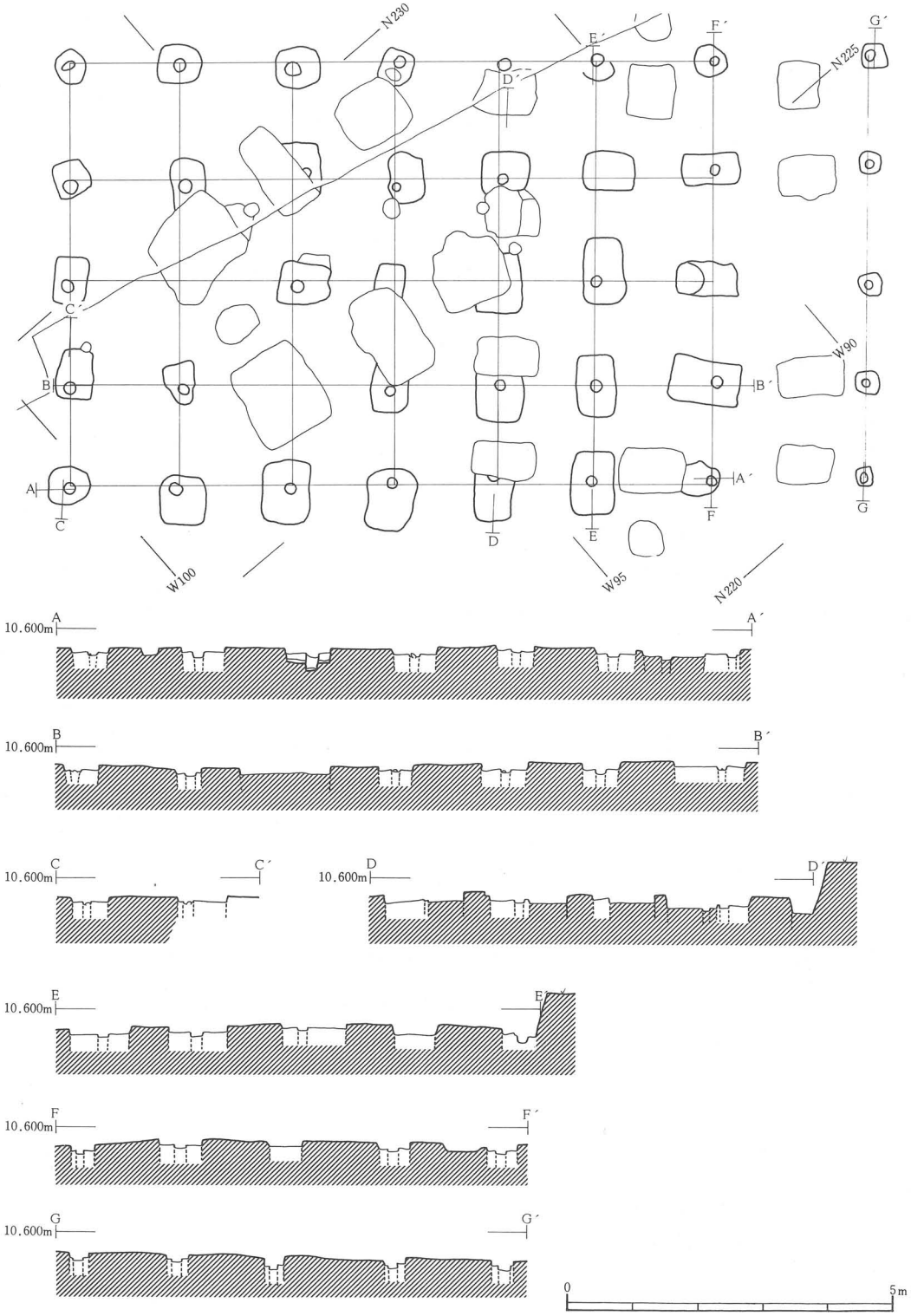
SB278 建物跡　24次調査（昭和57年度）で検出された建物跡の南側部分である。24次調査の成果を併せれば、東西 6 間、総長 9.9 m(柱間寸法150～ 180 cm、平均 165 cm)、南北 4 間、総長 6.6 m（柱間寸法150～ 180 cm、平均 165 cm）の東西棟の総柱建物跡で、東西柱列の方向は E-33°-S である。柱穴は50～ 70 cm×50～ 100 cm の隅丸長方形で、柱痕跡は直径が18～ 20 cm である。南 1 東 5 柱穴では深さは 50 cm で埋土は暗褐色・灰黄褐色・にぶい黄褐色・褐色シルトで土師器片、須恵器片、鉄滓が出土している。

SB302 建物跡　24次調査で検出された建物の南側部分である。24次調査の成果を併せれば、東西 2 間、総長 3.8 m（柱間寸法150～ 190 cm、平均 170 cm）、南北 1 間、総長 2.7 m（柱間寸法2.7～ 2.8 m、平均 2.75 m）の東西棟の建物跡で、東西の方向は E-0°-W である。柱穴は68～ 130 cm×92～ 140 cm の隅丸長方形で、柱痕跡の直径が約 20 cm である。南 1 西 1 柱穴では深さは 58 cm で埋土は褐色・暗褐色・黄褐色粘土質シルトで土師器片が出土している。

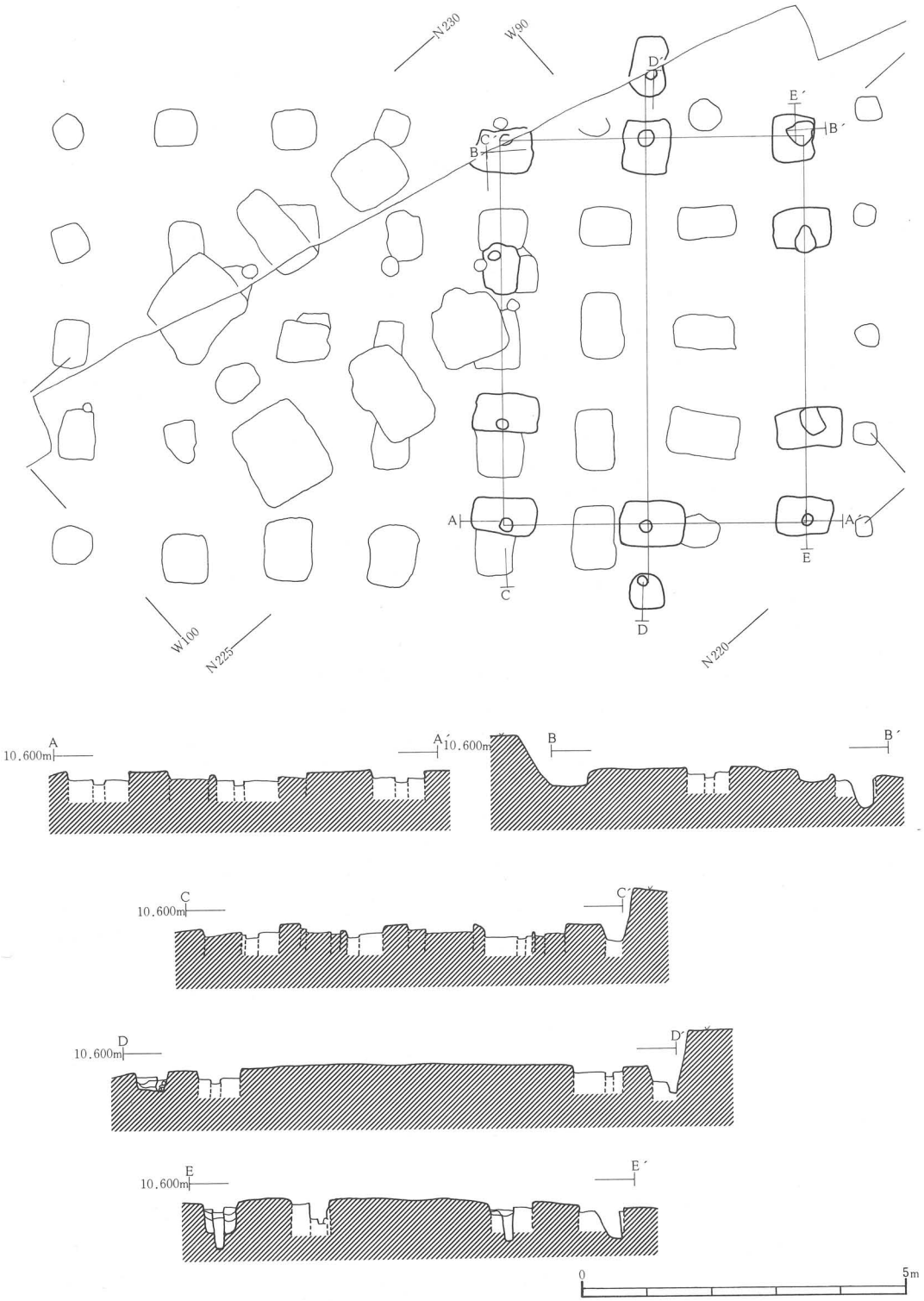
SB1290 建物跡　南北 3 間、総長 6 m（1・3 間目の柱間寸法150～ 170 cm、 2 間目の柱間寸法260～ 300 cm）、東西 2 間（柱間寸法230～ 240 cm、平均 235 cm）の南北棟の建物跡で、棟持柱を持つ。南北の方向は N-33°-E である。柱穴は側柱が56～ 70 cm×80～ 100 cm の隅丸長方形で、柱痕跡の直径は18～ 26 cm である。棟持柱の柱穴は52～ 54 cm×60～ 94 cm の隅丸長方形で、柱痕跡の直径は 20 cm である。南 1 東 1 柱穴では深さは 70 cm で、埋土は暗褐色・褐色粘土質シルト、暗褐色・褐色・黄褐色シルトで土師器片、須恵器片が出土している。

SB1296 建物跡　南北 1 間、柱間寸法及び総長 3.6 m、東西 1 間、柱間寸法及び総長 3.4 m の南北棟で SA255 をまたいで建てられた櫓状建物跡である。柱穴は52～ 62 cm×54～ 72 cm の円形または隅丸長方形で、柱痕跡の直径は15～ 18 cm である。

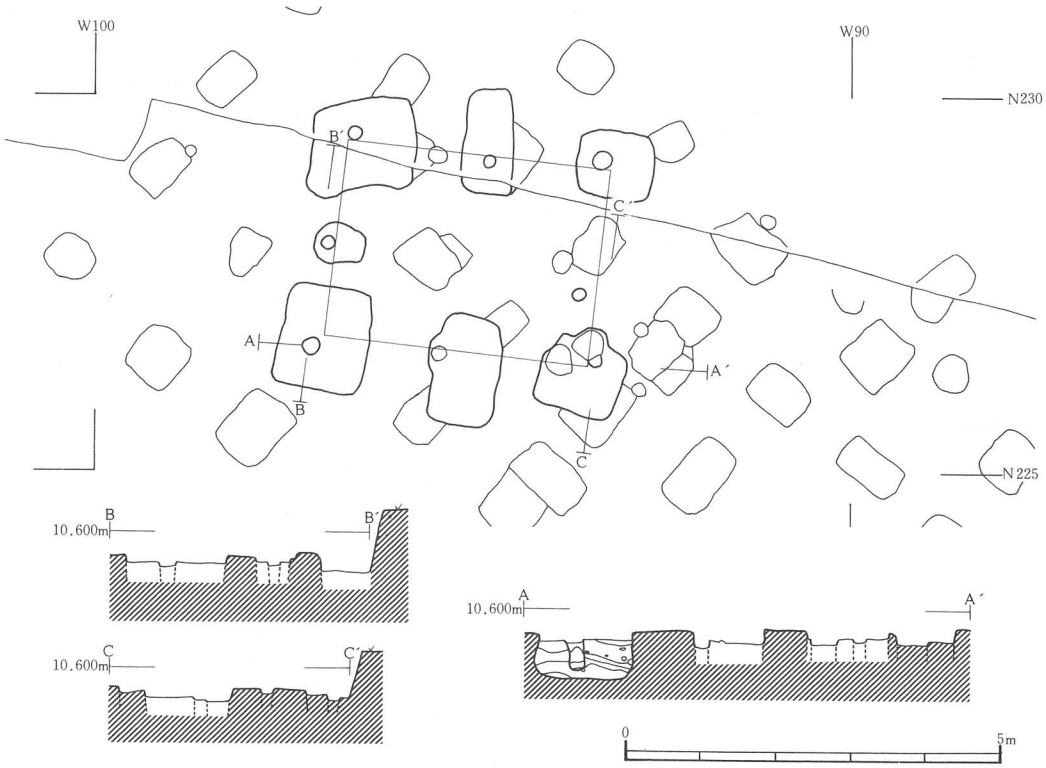
SI1294 竪穴建物跡　東西 9.4 m 以上、南北 4.8 m の東西に長い長方形の鍛冶工房跡で東西軸方向は E-33°-S である。壁際には上幅10～ 30 cm、深さ17～ 19 cm の周溝がみられる。床面までの深さ 16 cm 以上で、堆積土は暗褐色・黒褐色・褐色・黄褐色シルトで多量の鉄滓が付着した土師器甕を含む土師器片、須恵器片、鉄製品、鉄滓、フイゴ羽口が出土している。東西方向に並んで建物のほぼ中央に鍛冶炉が 5 基検出されており、その周辺で多量の鉄滓やフイゴの羽口、鉄製品などが出土している。鍛冶炉の形態は 1 号炉は長軸 25 cm 短軸 18 cm の楕円形、深さは 10 cm で壁面は還元されており、その周辺は酸化されている。炉の内部より土師器片が出土している。また炉の南側 90 cm のところに25× 15 cm の石が 2 個施設されており、その配置から鍛冶炉に関連したものとみられる。 2 号炉は長軸は 32 cm、短軸は 25 cm の楕円形、深さは 8 cm で壁面は還元されており、その周辺は酸化されている。炉の内部より土器片・鉄滓・



第５図　第86次調査区ＳＢ278建物跡・ＳＡ1295一本柱列跡平断面図



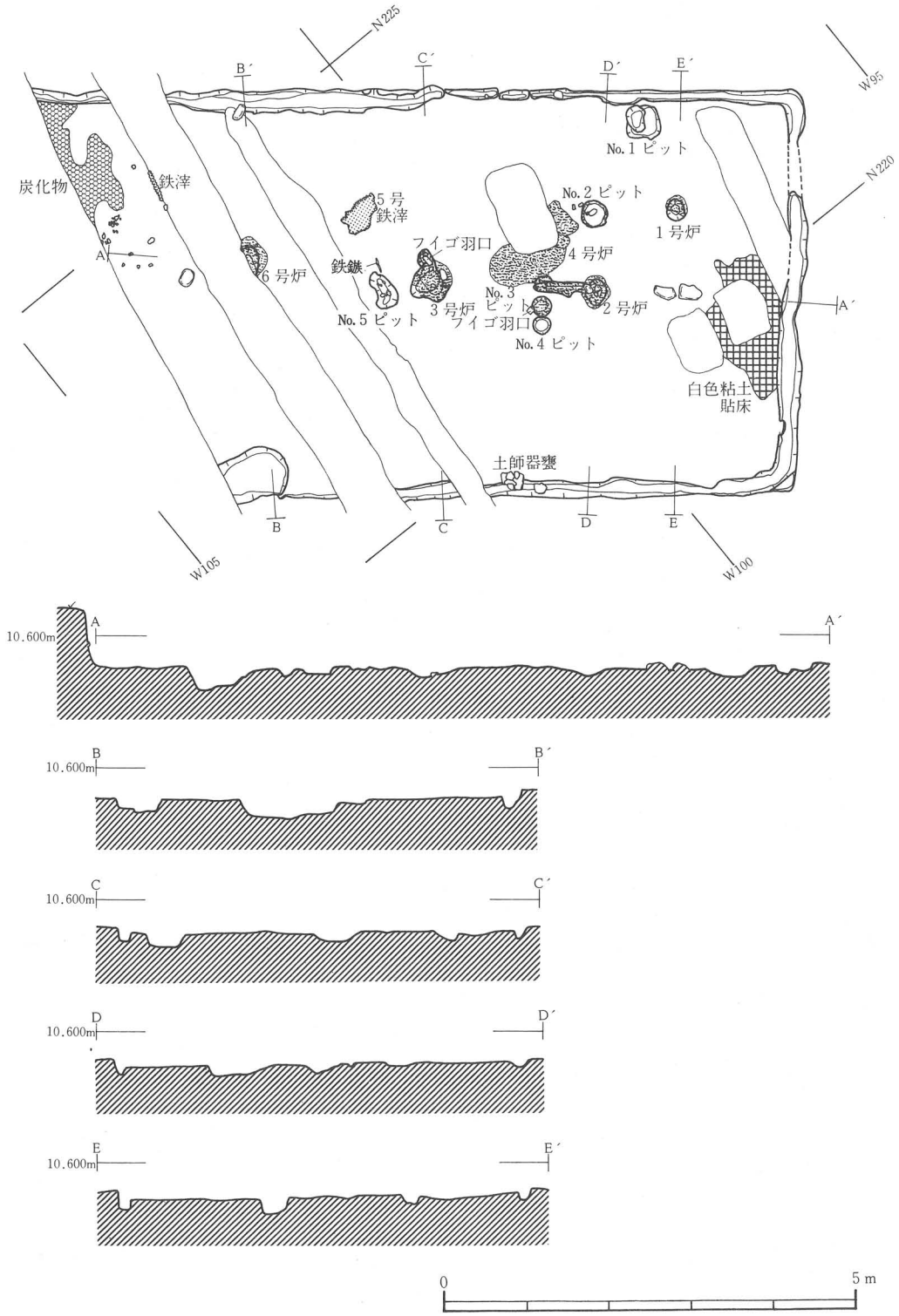
第６図　第86次調査区ＳＢ1290建物跡平断面図



第７図　第86次調査区ＳＢ302建物跡平断面図

椀形滓が出土している。炉から西に小溝状の落込みが続いており、フイゴの通風施設と思われる。またその南に隣接して直径 25 cm のピット（No. 3 ピット）が検出され、全体が熱で還元されている。３号炉は長軸 50 cm、短軸 40 cm の不整円形、深さは 10 cm で壁面は還元されており、その周辺は酸化されている。炉内部より土師器片・鉄製品・鉄滓が出土している。フイゴの送風施設と思われる小溝状の落込みが北に約 15 cm 残存しており、鉄滓の付着した羽口が出土している。炉の西に長軸 45 cm、短軸 23 cm の楕円形のピット（No. 5 ピット）が検出され、鉄滓・鉄製品が出土している。また炉の北 2 m のところで鉄滓が集中して出土している。４号炉は攪乱が著しいためその形状は不明であるが、還元及び酸化された面が確認される。また炉の西に直径 32 cm のピット（No. 2 ピット）が検出され、周辺が熱で酸化されている。６号炉は SD273 に切られ、直径 36 cm の半円状に残存する。深さは 17 cm で壁面は還元されており、その周辺は酸化されている。SD273・SD1291 に切られている。

SD273 溝跡　24次調査で検出された溝跡の南側部分である。24次調査の成果を併せれば、総長 32 m以上で南北に延びる溝跡である。上幅60～ 74 cm、下幅24～ 54 cm、深さ28～ 32 cm、底面は多少凹凸があり、断面形は逆台形、壁は角度をもって直に立ち上がる。方向は N-1°-E である。堆積土は黒褐色シルト、黄褐色シルト、明黄褐色シルトであり、堆積土中から土師器片



第８図　第86次調査区ＳＩ1294鍛冶工房跡平断面図

が出土している。SI1294を切っている。

SD1291 溝跡　総長7.5m以上の南北に延びる溝跡である。上幅30～50cm、下幅12～42cm、深さ10～14cm、底面は多少凹凸があり、断面形は偏平U字形、壁はゆるやかに立ち上がる。方向はN-0°-Eである。堆積土は暗褐色シルト、黄褐色シルトであり、堆積土中から土師器片が出土している。SI1294を切っている。

SK1292 土坑　直径150cmの円形で、深さ18cm、底面は多少凹凸があり、壁はなだらかに立ち上がる。堆積土は暗褐色シルト、灰黄褐色シルト、褐色シルトで、堆積土中から土師器片が出土している。

SK1293 土坑　短軸190cm、長軸225cmの円形で、深さ26cm、底面は多少凹凸があり、壁はなだらかに立ち上がる。堆積土は暗褐色シルト、黒褐色シルト、黄褐色シルトで、堆積土中からは多量の土師器片が出土している。

SK1297 土坑　67×113cmの隅丸長方形で、深さ28cm、底面は平坦で壁は角度をもって立ち上がる。堆積土は黒褐色シルト、暗褐色シルト、にぶい黄褐色シルトで堆積土中から土師器片が出土している。

3．出　土　遺　物

第86次調査による出土遺物は、土師器・須恵器・陶器・磁器・鉄製品・鉄滓・小玉石などである。今回の調査区内での遺物出土量は比較的少なく、破片が大部分であったため復元できるものはわずかである。以下、遺構ごとに略述する。

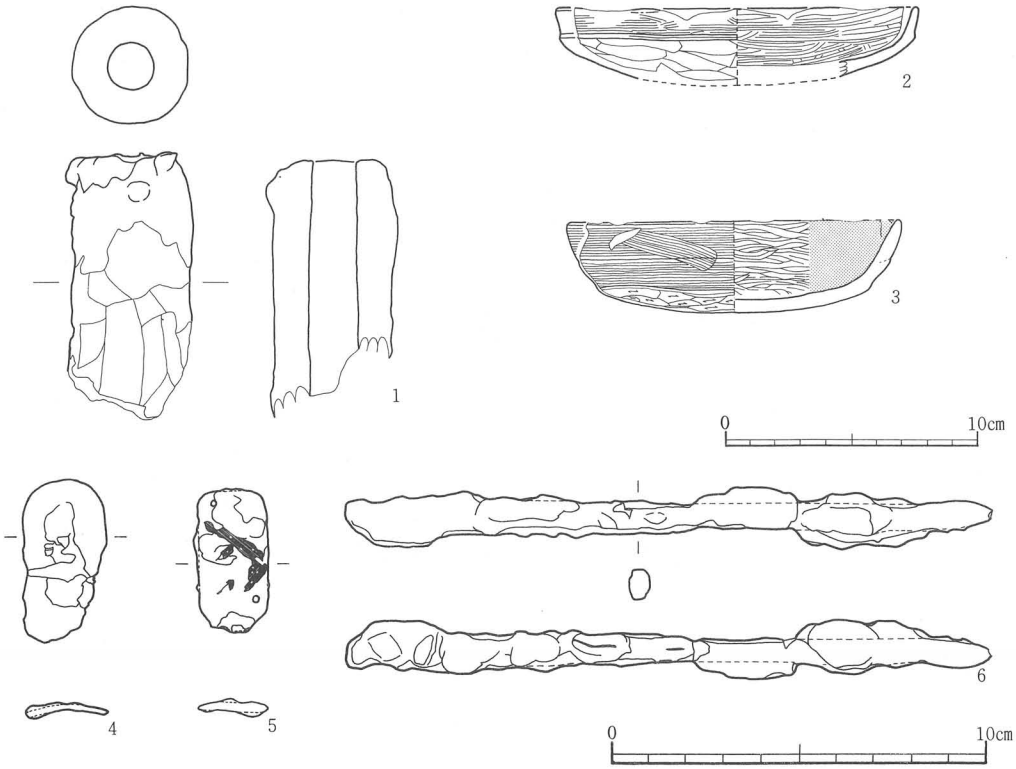
SA255 材木列　掘り方埋土から土師器C-658を含む土師器坏片・甕片、須恵器坏片が出土している。

SA1242 板塀跡　掘り方埋土から土師器C-653坏片を含む土師器片が出土している。

SB278 建物跡　北2東1柱穴の埋土から土師器片、北2東2柱穴から土師器C-657を含む土師器坏片・土師器甕片、北2東3柱穴から土師器片、北3東1柱穴から土師器片、南1東2柱穴から土師器C-654・C-655坏片、南1東3柱穴から土師器片、南1東4柱穴から土師器片、南2東1柱穴から土師器片、須恵器甕片、南2東2柱穴から土師器片、南1西3柱穴から土師器片、南2西5柱穴から土師器C-664坏片が出土している。

SB302 建物跡　南1西1柱穴の埋土から土師器C-662坏片を含む土師器片、南1西2柱穴から土師器片が出土している。

SB1290 建物跡　北1東2柱穴の埋土から土師器片、北2西1柱穴から土師器片、南1東1柱穴から土師器坏片・甕片・土師器片、須恵器片、南1東2柱穴から土師器C-660・C-661坏片を含む土師器片・土師器甕片、須恵器甕が出土している。南2東1柱穴の埋土から土師器C-665



番号	登録番号	種別	器形	出土遺構	層位	外面調整			内面調整			法量			残存	備考	写真図版
						口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底部			
1	P—19	土製品	羽口	SI1294			ケズリ		不明							鉄滓付着	54—3
2	C-665	土師器	坏	SB1290		ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ			3.3	14.2		⅛		
3	C-656	土師器	坏		攪乱	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理			3.6	15.2		¼		54—1

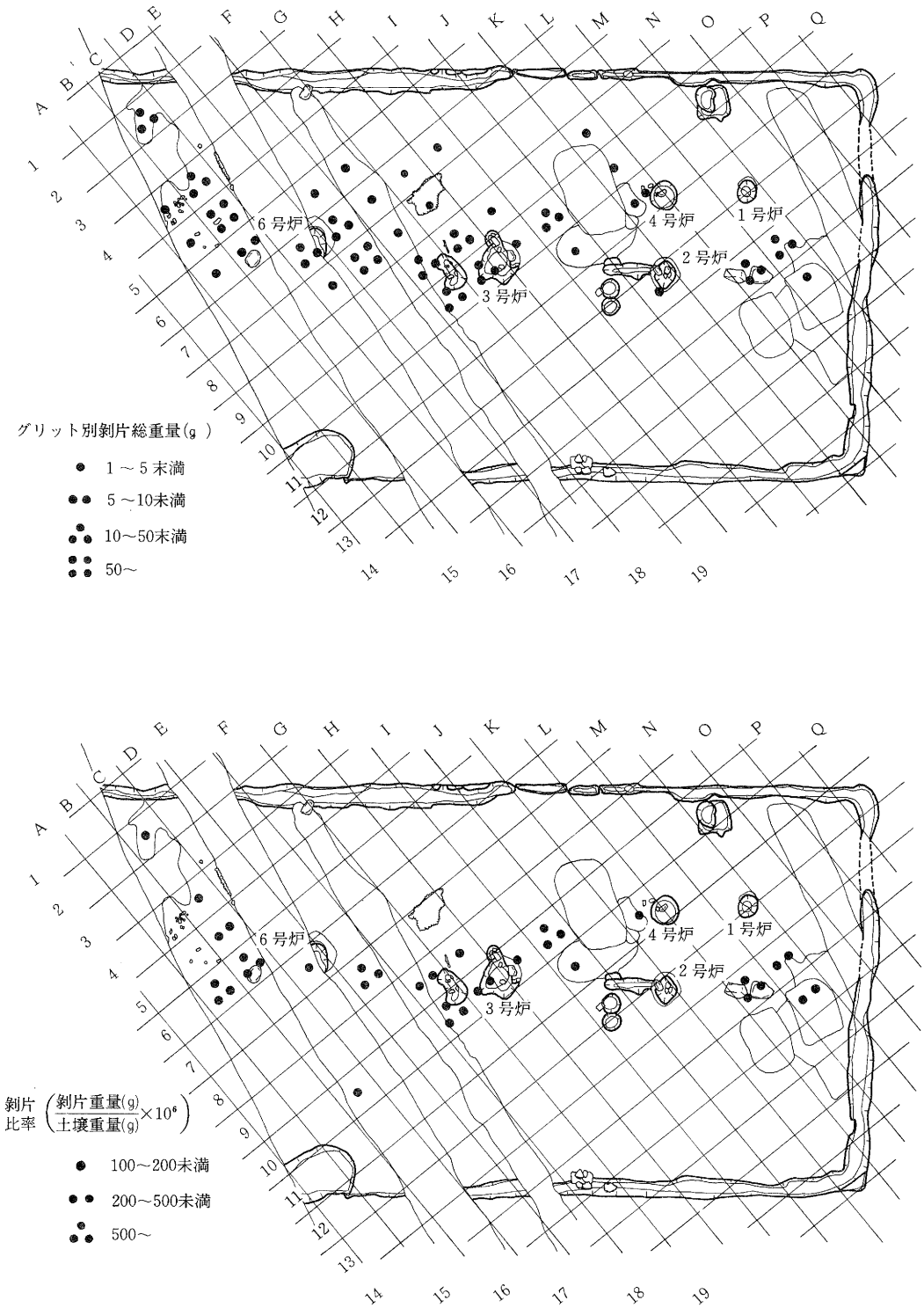
番号	登録番号	種別	器形	出土遺構	層位	法量				備考	写真図版
						全長	最大幅	厚さ	孔径		
5	N—44	鉄製品		SI1294		3.8	1.8	0.3	0.2		54—2
4	N—45	鉄製品		SI1294	検出面	4.3	2.2	0.15~0.2			

番号	登録番号	種別	器形	出土遺構	層位	法量					備考	写真図版
						全長	最大幅	厚さ	鏃身部長	頸部長		
6	N—49	鉄製品	鉄鏃	SI1294	床面	17.1~	1.35	0.55	2.6~	14.5~		54—4

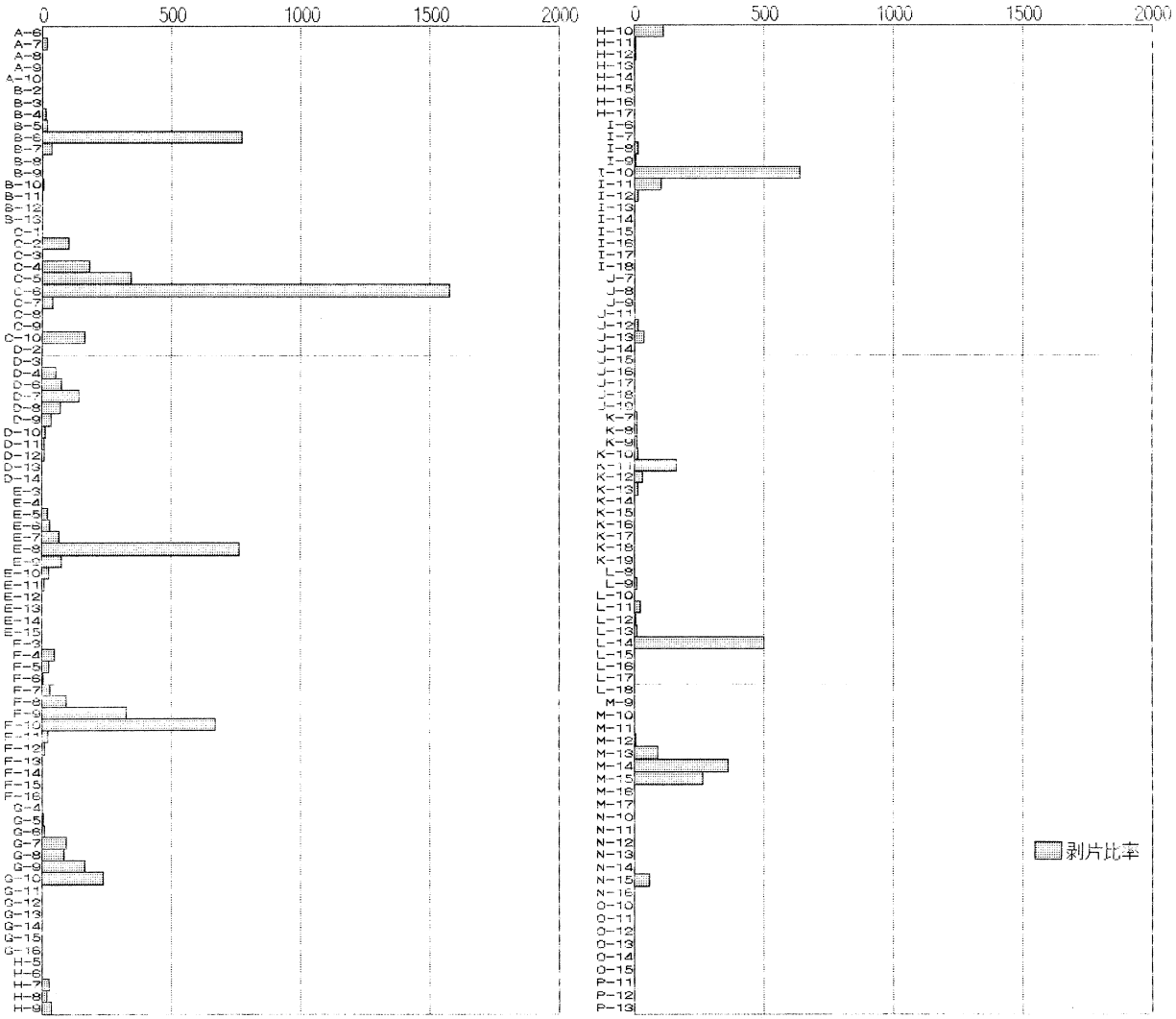
第9図　第86次調査区出土遺物実測図

坏（第9図2）を含む土師器片・甕片、須恵器甕片、柱抜取り穴から土師器片、須恵器甕片、南1西1柱穴から土師器片、南2西1柱穴から土師器片、北棟持柱穴から土師器片、南棟持柱穴から土師器C-666坏片を含む土師器片が出土している。

SI1294 竪穴建物跡　検出面から土師器片、鉄製品N-45(種別不明)、鉄滓、埋土中から鉄滓が多量に付着した土師器C-663甕•C-668坏を含む土師器片、種別不明の鉄製品、多量の鉄滓、鍛造剝片が出土している。床面から土師器片、須恵器片、先端部鉄滓付着の羽口P-20を含むフイゴ羽口片、鉄製品N-44（種別不明）（第9図5）•N-49鉄鏃（第9図6）を含む鉄製品、椀形滓、多量の鉄滓が、1号炉から土師器片、2号炉から土師器片、椀形滓を含む鉄滓が、3号



第10図　第86次調査区ＳＩ1294鍛冶工房跡鍛造剝片出土分布図



第11図　ＳＩ1294鍛冶工房跡　鍛造剥片出土比率グラフ

グリット	土壌重量(g)	剥片重量(g)	剥片比率	粒状滓重量(g)	ランク	グリット	土壌重量(g)	剥片重量(g)	剥片比率	粒状滓重量(g)	ランク
A－6	140	*	*		D	E－6	9,160	3.15	34.389	0.05	D
A－7	257	0.05	19.455		D	E－7	13,565	9.60	70.770	0.1	D
A－8	400	0.00	0.000		D	E－8	7,535	57.80	767.087	0.8	A
A－9	840	*	*		D	E－9	860	0.70	81.395	*	D
A－10	660	*	*		D	E－10	825	0.25	30.303		D
B－2	5,115	0.10	1.955		D	E－11	385	0.05	12.987		D
B－3	8,160	0.35	4.289		D	E－12	100	*	*		D
B－4	15,460	2.25	14.554	*	D	E－13	105	*	*		D
B－5	15,560	3.30	21.208	0.05	D	E－14	405	*	*		D
B－6	620	4.80	774.194	*	A	E－15	205	*	*		D
B－7	540	0.20	37.037		D	F－3	50	*	*		D
B－8	490	0.00	0.000		D	F－4	1,400	0.70	50.000		D
B－9	660	0.00	0.000		D	F－5	825	0.25	30.303	*	D
B－10	565	0.05	8.850		D	F－6	15,070	1.50	9.954	*	D
B－11	770	*	*		D	F－7	11,165	3.75	33.587	0.05	D
B－12	750	*	*		D	F－8	1,340	1.30	97.015	*	D
B－13	60	*	*		D	F－9	5,140	17.00	330.739	0.65	B
C－1	4,290	0.05	1.166		D	F－10	3,375	22.70	672.593	0.5	A
C－2	12,275	13.10	106.721	0.05	C	F－11	410	0.10	24.390		D
C－3	12,150	0.45	3.704		D	F－12	400	0.05	12.500		D
C－4	11,140	20.50	184.022	0.4	C	F－13	620	*	*		D
C－5	20,600	71.00	344.660	1.1	B	F－14	870	*	*		D
C－6	585	9.25	1,581.197	0.05	A	F－15	700	*	*		D
C－7	340	0.15	44.118		D	F－16	160	*	*		D
C－8	250	*	*		D	G－4	90	*	*		D
C－9	110	*	*		D	G－5	2,470	0.15	6.073		D
C－10	30	0.05	166.667		C	G－6	1,250	0.15	12.000		D
D－2	5,440	0.15	2.757		D	G－7	1,270	1.25	98.425	*	D
D－3	1,510	0.05	3.311		D	G－8	2,905	2.55	87.780	*	D
D－4	1,380	0.80	57.971		D	G－9	6,650	11.05	166.165	0.6	C
D－6	375	0.30	80.000	*	D	G－10	12,420	29.65	238.728	2.7	B
D－7	7,020	10.20	145.299	0.7	C	G－11	0	0.00	0.000		D
D－8	3,985	2.95	74.028	0.05	D	G－12	1,260	0.05	3.968		D
D－9	1,180	0.45	38.136		D	G－13	1,050	*	*		D
D－10	840	0.15	17.857		D	G－14	1,020	*	*		D
D－11	960	0.10	10.417		D	G－15	520	*	*		D
D－12	360	0.05	13.889		D	G－16	970	*	*		D
D－13	265	*	*		D	H－5	100	*	*		D
D－14	500	*	*		D	H－6	1,265	0.05	3.953		D
E－3	620	*	*		D	H－7	3,530	1.00	28.329	*	D
E－4	1,965	0.10	5,089		D	H－8	2,340	0.55	23.504	*	D
E－5	2,020	0.55	27.228	*	D	H－9	6,075	2.50	41.152	0.05	D

表４　第86次調査区ＳＩ1294鍛冶工房跡出土鍛造剥片計量表（1）

グリット	土壌重量(g)	剝片重量(g)	剝片比率	粒状滓重量(g)	ランク	グリット	土壌重量(g)	剝片重量(g)	剝片比率	粒状滓重量(g)	ランク
H—10	2,710	3.15	116.236	0.35	C	K—16	1,530	*	*		D
H—11	710	0.05	7.042		D	K—17	1,820	0.05	2.747		D
H—12	3,905	0.25	6.402	*	D	K—18	2,480	*	*		D
H—13	1,340	0.05	3.731		D	K—19	780	*	*		D
H—14	920	0.05	5.435		D	L—8	110	*	*		D
H—15	1,260	*	*	*	D	L—9	2,205	0.30	13.605	*	D
H—16	2,050	*	*		D	L—10	1,350	0.05	3.831		D
H—17	500	*	*		D	L—11	1,785	0.45	25.210	*	D
I—6	615	*	*		D	L—12	765	0.05	6.536	*	D
I—7	1,660	0.05	3.012		D	L—13	1,720	0.20	11.628	*	D
I—8	1,145	0.20	17.467		D	L—14	5,170	25.90	500.967	1.4	A
I—9	1,520	0.15	9.868	0.05	D	L—15	200	*	*		D
I—10	6,950	44.60	641.727	1.05	A	L—16	530	0.00	0.000		D
I—11	2,360	2.50	105.932	0.1	C	L—17	1,000	*	*		D
I—12	2,255	0.40	17.738	*	D	L—18	2,610	*	*		D
I—13	2,490	0.05	2.008		D	M—9	300	*	*		D
I—14	170	*	*		D	M—10	440	0.00	0.000		D
I—15	750	*	*		D	M—11	990	*	*		D
I—16	935	*	*		D	M—12	510	0.05	9.804		D
I—17	1,240	*	*		D	M—13	975	0.90	92.308	0.05	D
I—18	1,400	*	*		D	M—14	7,745	28.30	365.397	1.75	B
J—7	1,460	*	*		D	M—15	1,055	2.80*	265.403	0.25	B
J—8	3,715	0.05	1.346		D	M—16	390	*	*		D
J—9	5,560	0.20	3.597		D	M—17	325	*	*		D
J—11	100	*	*		D	N—10	380	*	*		D
J—12	2,590	0.40	15.444	*	D	N—11	580	*	*		D
J—13	3,060	1.20	39.216	0.05	D	N—12	570	*	*		D
J—14	570	*	*		D	N—13	640	*	*		D
J—15	70	*	*		D	N—14	865	0.05	5.780	*	D
J—16	1,700	*	*		D	N—15	320	0.20	62.500	*	D
J—17	2,720	*	*		D	N—16	90	*	*		D
J—18	980	*	*		D	O—10	20	0.00	0.000		D
J—19	350	*	*		D	O—11	250	*	*		D
K—7	410	0.05	12.195	*	D	O—12	55	*	*		D
K—8	2,890	0.40	13.841		D	O—13	150	0.00	0.000		D
K—9	9,590	1.00	10.428	*	D	O—14	255	*	*		D
K—10	7,535	1.10	14.599	*	D	O—15	30	*	*		D
K—11	4,595	7.45	162.133	0.8	C	P—11	60	*	*		D
K—12	455	0.15	32.967	*	D	P—12	265	0.00	0.000		D
K—13	2,670	0.45	16.854	0.15	D	P—13	65	0.00	0.000		D
K—14	1,675	0.10	5.970	*	D	総　計	392,137	432.70	110.344		D
K—15	130	*	*		D						

表5　第86次調査区ＳＩ1294鍛冶工房跡出土鍛造剝片計量表（2）

炉から土師器片、P-19（第９図１）を含む羽口片、鉄製品、少量の鉄滓が、５号炉から土師器片が、６号炉から鉄製品、鉄滓が、出土している。鉄製品 N-44 は全長 3.8 cm、最大幅 1.8 cm 厚さ 0.3 cm の長方形で対角線上に２ケ所直径 2 mm の孔が穿たれている。N-45 は全長 4.3 cm、最大幅 2.2 cm、厚さ0.15～ 0.2 cm で銹化が著しく、一部欠損し孔の有無は確認できないが N-44 と同種のものと思われる。N-49 鉄鏃は全長 17.1 cm 以上、最大幅は 1.35 cm、厚さ 0.55 cm で銹化が著しく、その形態は不明である。また床面上より多量の鍛造剝片と粒状滓が出土しており、 50 cm× 50 cm のグリツトごとに採取し、その分布状態は別表にまとめて表記した。

SK1292 土坑　土師器片が出土している。

SK1293 土坑　土師器 C-659 坏を含む土師器片が出土している。

SD1291 溝跡　土師器片が出土している。

その他ピット No.１から須恵器片が出土している。

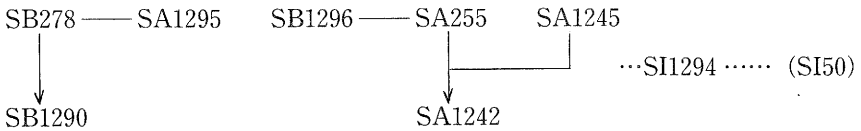
攪乱層からは土師器 C-652、外面口縁部ヨコナデ、底部へラケズリ調整、内面へラミガキ調整、内外面黒色処理の土師器 C-656 坏（第９図３）を含む土師器片、P-18 土鈴、陶磁器片、両頭金具 N-46～48・種別不明鉄製品、鉄滓、K-23・24 小玉石が出土している。

４．ま　と　め

発見された遺構は一本柱列１条、材木列１条、板塀跡１条、掘立柱建物跡４棟、竪穴建物跡１軒、溝跡２条、土坑３基、小柱穴・ピット43である。これらの遺構は重複関係・方向等から一部不明なものを除けば３つの段階に区分され、これまでの段階区分の第３段階、第４段階、第５段階に相当するものと考えられた。

〔第３段階〕　SA255 材木列、1242板塀跡、1295一本柱列、SB278・1290・1296 建物跡・SI1294 竪穴建物跡、Ⅰ期官衙段階

塀跡・建物跡は１棟を除き全て本段階に属する。重複関係から２回の変遷が認められるが配置状況から３期にわたる可能性もある。重複関係は次の通りである。



SB278 は６間× ４間の総柱建物であるが、本調査区の東南部に展開する倉庫建物群に見られる総柱建物と比較して、柱間数が多いことや柱直径が小さいことなどの相異が認められる。倉庫建物としての機能が考えられるが、大形の柱を使用した倉庫とは異なった機能を持つ倉庫と考えておきたい。この様な小形の柱を使用した総柱建物については、関連する建物等とあわせ、

その機能については今後検討を要する。SA1295は4間分総長6.5mの一本柱列による塀である。SB278の東妻から2.4m程離れ、建物梁長と合わせて造られたものとみられ、SB278の東側目隠塀と考えられる。

SB1290は棟持柱を有する3間×2間の小規模な建物である。東桁柱列の中間柱間が両脇柱間の2倍程あり、東側を正面入り口とした建物と考えられる。棟持柱を有する建物はこれまで本遺跡の調査では類例がなく、東北地方の他の城柵官衙遺跡でも発見例がないことから、通常の官衙建物とはみなし難い。建物方向は東西柱列がN-33°-Eを示し、柱穴埋土からも7世紀代のものとみられる土師器片が出土していることから、第3段階に属するⅠ期官衙期の建物とみられる。このような建物は神社建築の社殿などに類例が求められ、古式神殿の中でも桁行3間、梁行2間、棟持柱を持つ掘立構造のものは伊勢神宮正殿を代表とする「神明造」（註2）とよばれるものである。SB1290を様式・規模だけで神殿とは判定し難いが、官衙内に置かれる社や神殿等の神事に関わる施設の実態究明とあわせ、今後さらに検討してゆきたい。

SB1296は1間×1間のほぼ方形の建物で、ほぼ中央をSA255材木列が通っている。建物と材木塀との取り付き状況は不明であるが、塀は建物内部においても変化なく、構造的には塀をまたぐ、床の高い櫓状の建物かと考えられよう。SA255材木列は総長93m以上にわたって延びており、北延長は不明であるが、南はSA1242板塀と直角に接続する部分から南はSA1242に切られており、ある段階にはこの接続部分が南の端とみられるが、同一延長線上にSA1242板塀が造られていることから区画施設・遮蔽施設としての塀は、その後も南側に機能していたものと見られる。また、このSA1242板塀と同位置でSA1245一本柱列が先行してみられるがこのSA1245とSA255との新旧関係・接続状況は明らかにできなかった。

SI1294竪穴建物は、幅にくらべ、長軸が9.4m以上となる長屋風の竪穴建物で、これまで発見されてきた竪穴建物同様、主柱穴がみられない。竪穴中央にはほぼ長軸方向に並ぶように5期の炉が造られている。床面からは鉄製品、フイゴ羽口、鉄滓の他、鍛冶精錬の際に飛散する鍛造剝片や粒状滓が多量に発見されたことから、5基の炉は鍛冶炉であり、この竪穴建物跡が鍛冶工房跡であったことが判明した。年代を推定する土器類は殆どないが、方向性からみてⅠ期官衙段階のものとみて大過なかろう。このSI1294の北西9m程の地点には第6次調査（註3）でSI50竪穴住居跡の一部を検出しており、床面上の焼土、炭火物散布状況や、両竪穴の南辺が、揃っていることから、同様の長屋風工房が建ち並んでいたことも想定される。SA255・356の塀により区画されたこの一画はⅠ期官衙段階に官衙内に造られた工房施設ブロックであった可能性が高い。

鍛造剝片のサンプリングについては次のようにして実施した。

竪穴遺構内に、測量基準線にあわせ50cmメッシュを設定し、南北方向は北から南に1～19、

東西方向は西から東にA～Qまで付し、グリッド名とした。床面直上堆積土の除法により、床面検出作業に入った段階で、鉄滓、鍛造剝片が観察されたことから、床面上にわずかに残った堆積土をグリッド毎に全てサンプリングした。各グリッドは同一レベルでサンプリングを行ったが、遺構周縁部や撹乱穴・炉本体が含まれるグリッドは他にくらべ、サンプリング面積に差があり、サンプリング土壌重量にもかなりの差が生じた。これを補正するため描出した鍛造剝片量の表記には実質的な絶対重量の他に、土壌重量に対する剝片重量の割合を10^6倍して剝片比率として表記した（第10・11図）。その結果、出土量・出土比率とも遺構内での在り方は一律ではなく、扁在化傾向が看取される。すなわち鍛造剝片は炉の周辺から、工房内でも北側に多く、南半には殆どない。実際の鍛造作業を行う作業空間は工房内の北側にあったことが、この傾向から推定されよう。全ての炉が同期に使用されていたか否かは明らかにできなかったが、工房の規模からみても単一工人の工房とは考え難く、複数の組織化された工人集団による官営の工房跡とみておきたい。官衙内での鍛冶精錬の行われた規模や工人集団の実態も不明であるが、今後この周辺地区の調査を進めていく上で、課題として検討してゆきたい。

〔第4段階〕　SB302建物跡、SD1291溝跡　　II期官衙段階

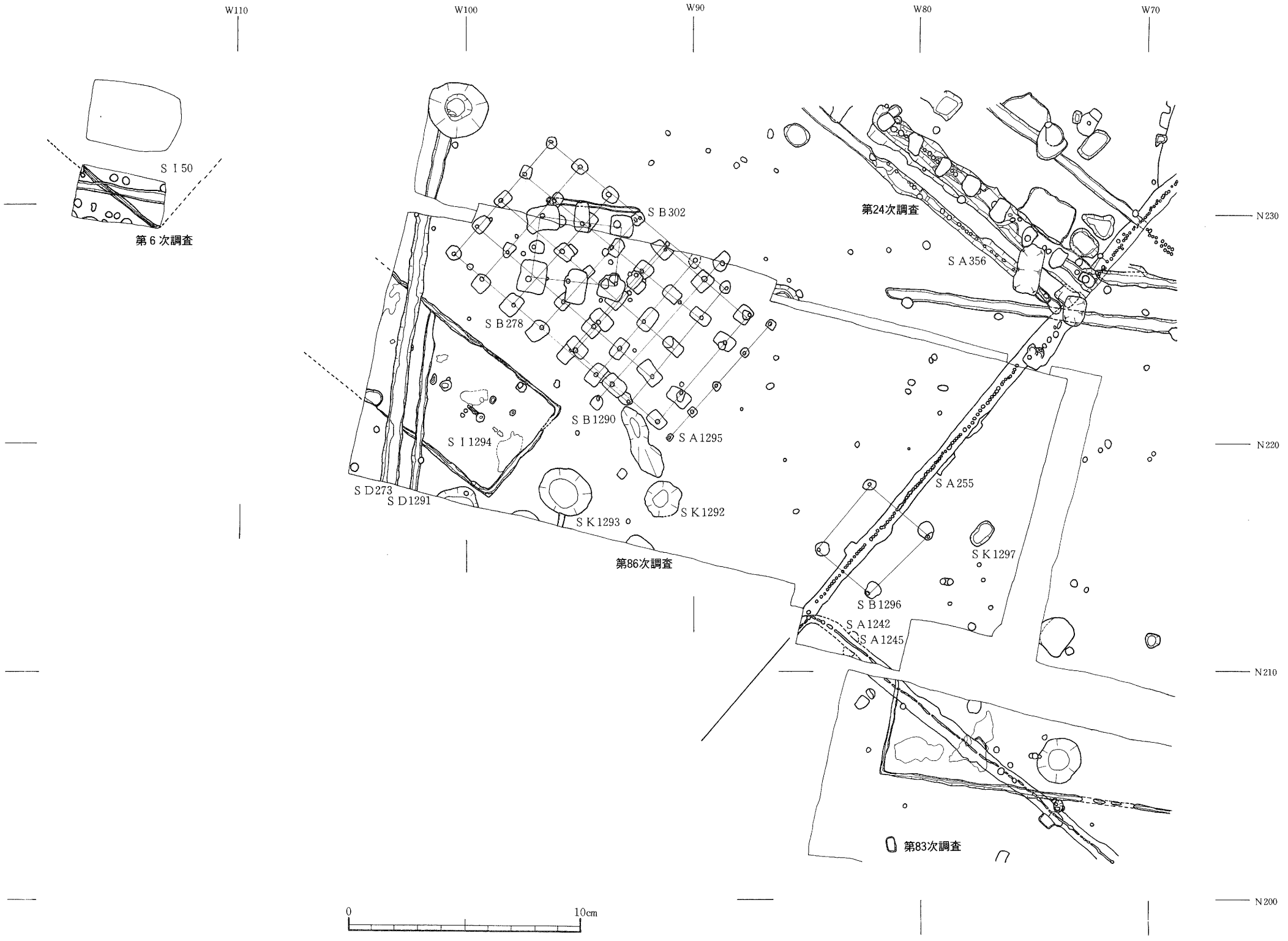
SB302は昭和57年度の第24次調査（註4）で北側の一部を検出した建物であったが、今次調査により東西2間、南北1間の大変小規模な建物であることが明らかになった。南北1間の柱間の間には柱筋がややずれるが、床束柱かとみられる小柱穴がある。このような小規模な建物はこれまで、I・II期を概観すれば内部区画施設の塀に付設される櫓状建物や門などがあるが、このSB302は一体構造をとる塀等が発見されず、建物が単体で建てられている。付近に関連する構造物もみられないことから、建物の性格も不明である。

本段階に属するII期官衙を構成した遺構群は本調査区内でも極めて希薄であり、これまでの周辺地区の調査成果と同様である。II期官衙においては政庁域北側の方四町北半分の機能をどの様に捉えるか、今後の大きな課題である。

〔第5段階〕　SD273溝跡、小柱穴・ピット群

SD273はI期官衙段階のSI1294鍛冶工房跡を切っており、ほぼ真北方向に延びている。第24次調査では、第4段階の遺構とみたが、第35次調査での検討（註5）により、第5段階と訂正された。SD1291もこれと並行していることから同期の可能性があるが、詳細は不明である。

小柱穴・ピット群が発見されたが、年代など詳細は不明である。官衙廃絶以降のものとみられることから本段階に一括しておきたい。また、いくつかの土坑についても、年代性格等は明らかにできなかった。



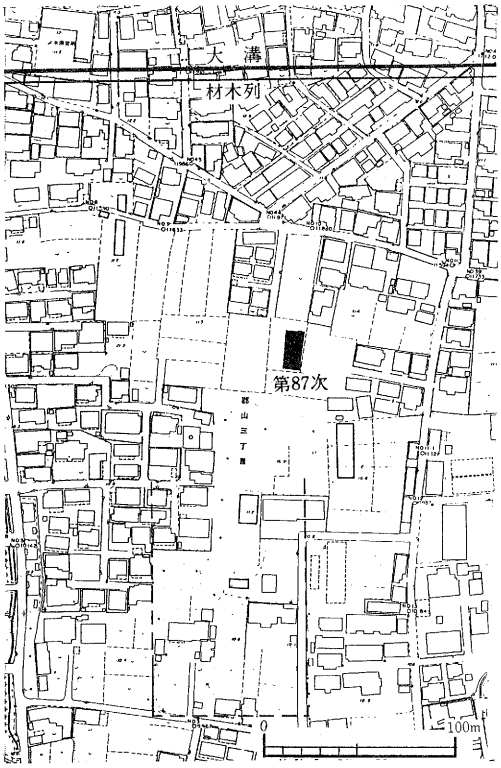
第12図　第86次調査区周辺全体図

Ⅳ　第87次発掘調査

1．調　査　経　過

第87次調査は、仙台市太白区郡山３丁目15－16赤井沢賢治氏より、郡山３丁目117-７・18において住宅新築計画の申し入れが、平成２年６月27日にあったことから、平成２年７月10日より敷地内の発掘調査を実施した。

調査対象地区は、方四町Ⅱ期官衙の中央北寄りの地区で、外郭北辺より南約150ｍの位置にあり、第24次調査区の東に隣接する。この地区一帯では第24・35・61・68・83次調査により、Ⅱ期官衙の一本柱列による塀跡や建物跡・井戸跡の他、Ⅰ期官衙の建物群およびそれらを囲む塀跡など多くの遺構、Ⅰ期官衙以前の竪穴住居跡などが検出されている。これらの調査では、今回の調査地区の西側・南側にⅠ期官衙の倉庫群が展開していることが判明している。



第13図　第87次調査区位置図

７月10日から調査を開始したが、建物配置や排土場などの関係から、敷地内の西側に第24次調査区に接して東西13.0ｍ、南北19.7ｍの調査区を設定した。調査面積は274.7ｍ²である。現状は畑地であり、耕作土の排土は重機により行った。また、遺構検出面は天地返し深耕により深くまで撹乱の及んでいるところも多かった。

検出した遺構は、第24次調査でその一部が検出されていたものを含め、当初予想された倉庫などの他、竪穴住居跡などであった。７月中旬から８月３日までは第88次調査を行い、それ以降調査を再開し、10月19日には調査を終了し、10月22日、23日に埋め戻し作業を行った。

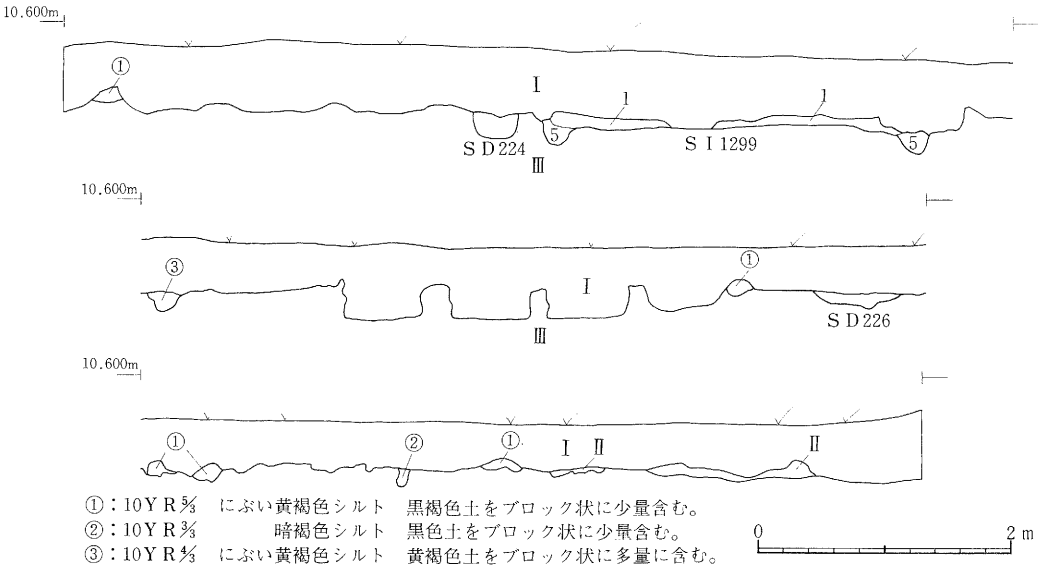
2．基　本　層　序

基本層はⅠ～Ⅲ層の３層が確認された。遺構検出面は基本層Ⅲ層上面である。

Ⅰ層：2.5Y4/2暗灰黄色シルト、現耕作土。

Ⅱ層：10YR3/2黒褐色粘土質シルト。調査区の南東コーナー付近にのみ部分的に分布する。

Ⅲ層：10YR6/4にぶい黄色シルト。調査区全域に分布する。



第14図　第87次調査区東壁セクション図

3．発見遺構・出土遺物

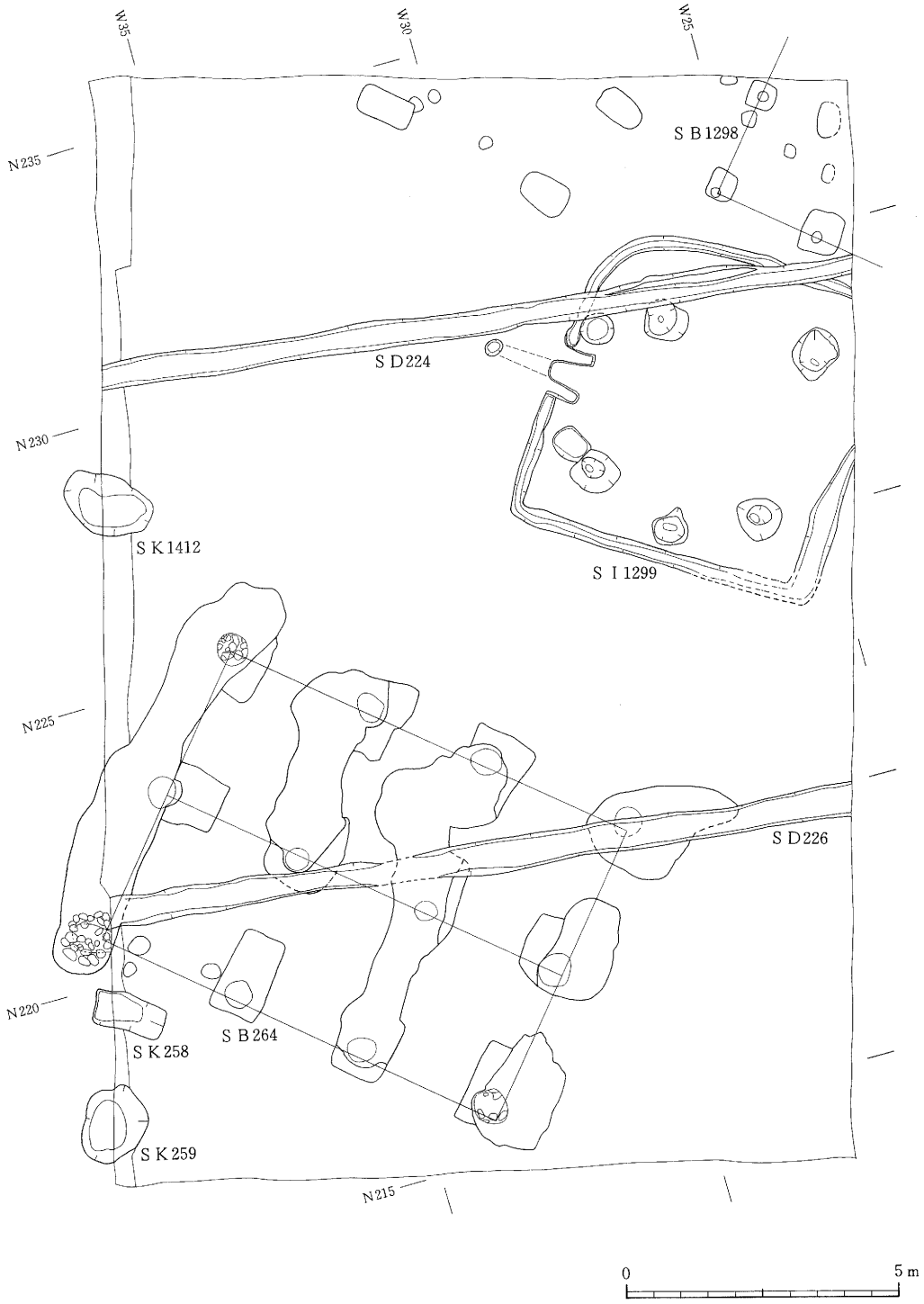
今回の調査によって発見された遺構は、掘立柱建物跡２棟、竪穴住居跡１軒、溝跡２条、土坑３基、柱穴・ピット16基である。遺構検出面は、基本層II層が分布する調査区南東コーナー付近の他は、基本層III層上面である。

SB264 建物跡　桁行３間、総長 7.95 m（柱間寸法 275 cm、 245 cm、 275 cm）、梁行２間、総長 5.8 m（190 cm 等間）の東西棟総柱建物跡で、建物方向は N-33°-E である。柱穴12個のうち南西隅の P9 は第24次調査で検出されている。柱穴は一辺70～ 160 cm の方形、不整方形で、Ｐ１、Ｐ９、P12 の柱痕跡底面及び下部周縁には直径５～ 15 cm の円礫が認められた。柱痕跡は直径47～ 67 cm、深さ105～ 120 cm で、P10 を除く全ての柱穴に抜き取り穴がみられる。また、第24次調査でＰ９を切っていた SD256 溝跡が抜き取り穴であることが判明した。SD226 に切られている。

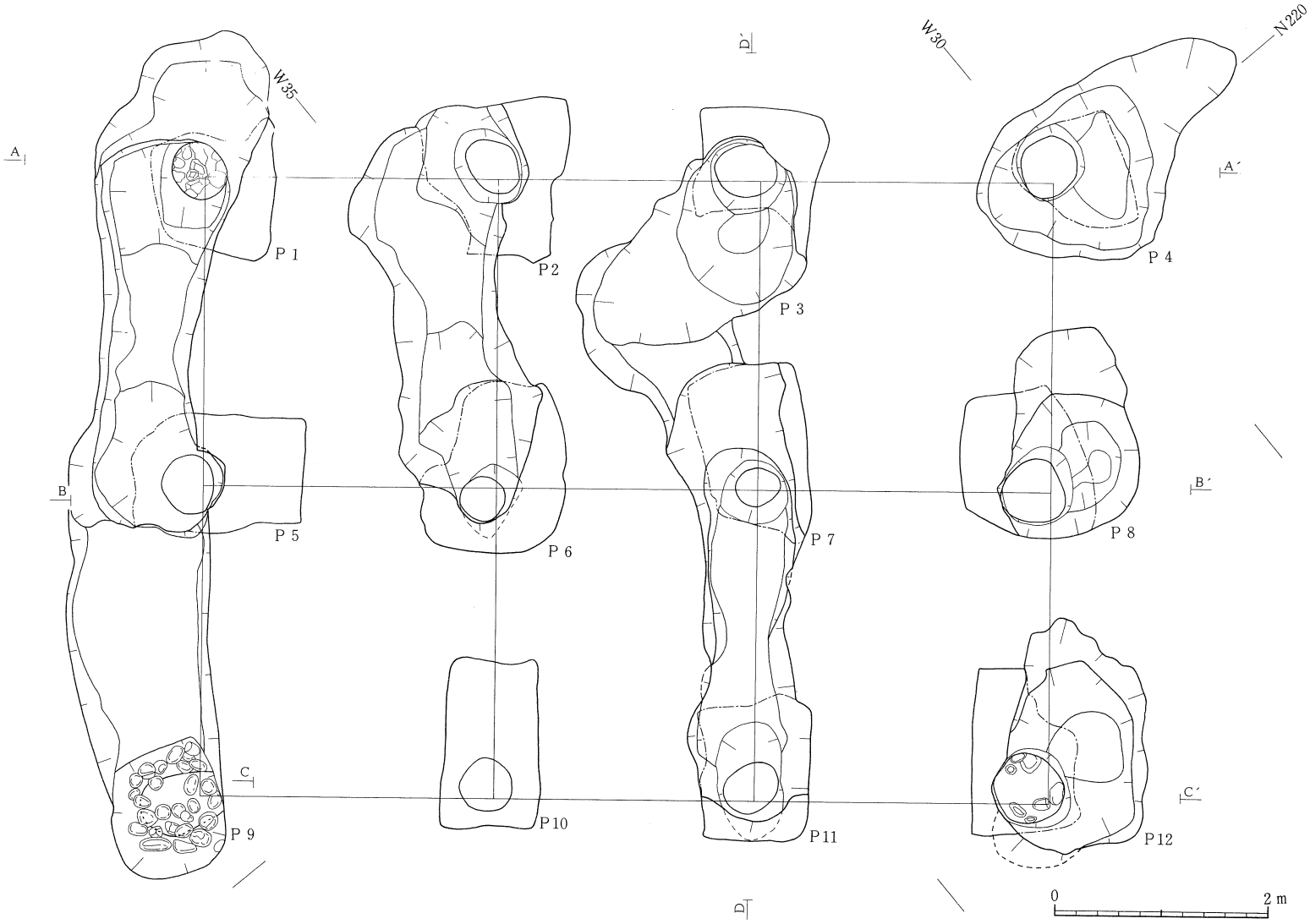
遺物は抜き取り穴から土師器破片94点、瓦破片１点、鉄製品１点、石器１点の計97点、掘り方堆積土からは土師器破片がＰ８から１点、P10 から２点の計３点が出土している。

SB1298 建物跡　東西２間以上、総長 2.75 m 以上（柱間寸法 200 cm）、南北２間以上、総長 2.30 m 以上（柱間寸法 200 cm）の掘立柱建物跡である。南北柱列の方向は N-33°-E である。柱穴は一辺50～ 80 cm の方形で、柱痕跡は直径15～ 20 cm である。遺物は出土していない。

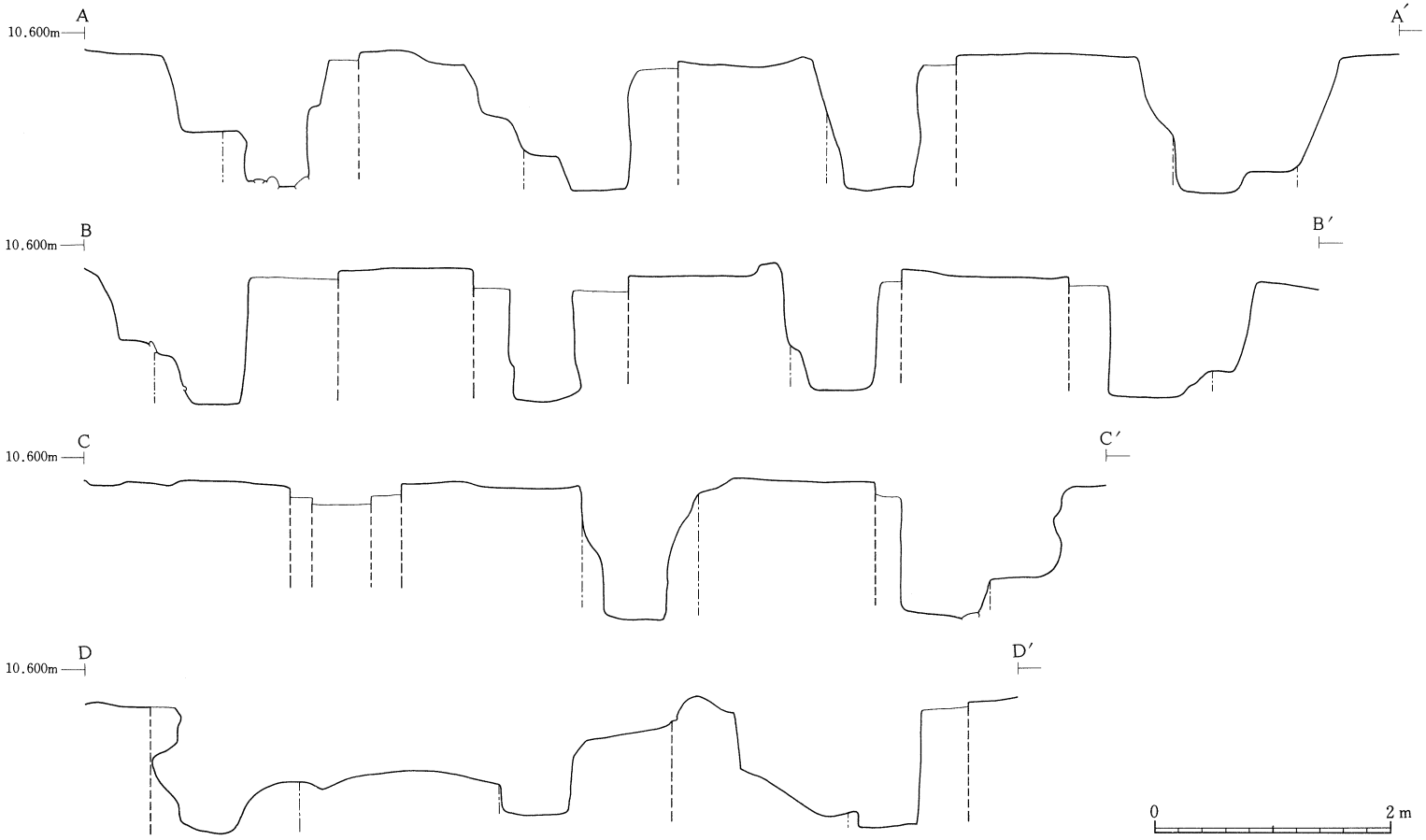
SI1299 竪穴住居跡　東西６m、南北 5.9 m のほぼ正方形を基調とするが、北西コーナーは弧状を呈する。また、北東コーナーは調査区外に位置している。西辺方向は N-25°-E である。部



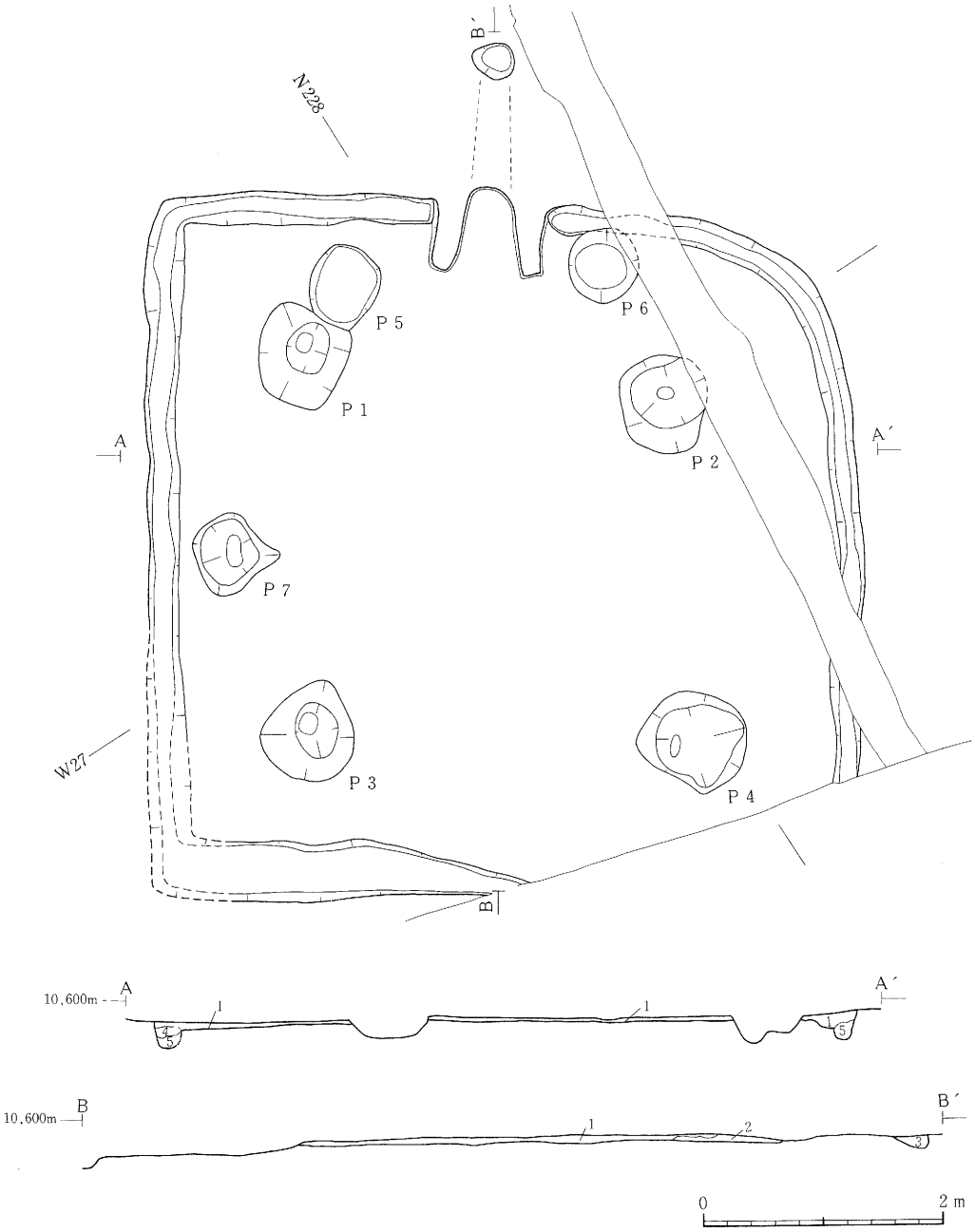
第15図　第87次調査区Ⅲ層上面平面図



第16図　第87次調査区ＳＢ264建物跡平面図



第17図　第87次調査区ＳＢ264建物跡断面図

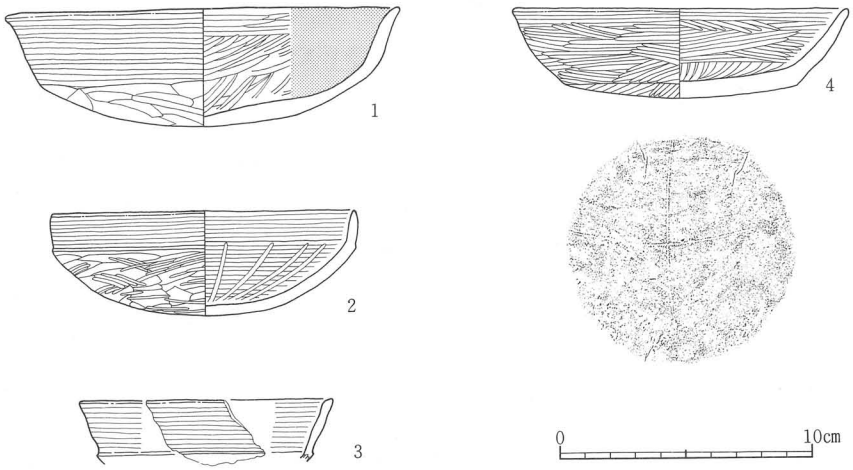


層位	土　　色	土　性	備　　考
1	10YR 5/2灰黄褐色	シルト	黄褐色土を部分的にブロック状に含む。酸化鉄を含む。
2	10YR 3/2黒褐色	シルト	焼土多量に含む。黄褐色土をブロック状に含む。
3	10YR 3/3暗褐色	シルト	黄褐色土をブロック状に含む。
4	10YR 3/3暗褐色	シルト	焼土炭を少量含む。
5	10YR 5/4にぶい黄褐色	シルト	黒褐色土をブロック状に含む。

第18図　第87次調査区SI1299平面図・土層断面図

分的に床面直上あるいは床面下まで撹乱が及んでおり、南東コーナーは検出できなかった。残存する堆積土の厚さは4～7 cmである。カマドは西壁ほぼ中央に施設されている。幅35～60 cm、奥行70 cmで、両袖が遺存し、全面に炭火物、焼土がみられる。煙道は残存していないが、西壁から1.1 mのところに先端のピットが検出されている。床面中央部にのみ貼床が認められる。住居の堆積土はカマド燃焼部に焼土を含む黒褐色のシルトがみられる他は、灰黄褐色シルトの単層である。壁際には四周する上幅25～50 cm、床面からの深さ10～15 cmの周溝がみられる。周溝の堆積土は暗褐色・にぶい黄褐色シルトである。主柱穴は4つ（P 1～P 4）あり、直径70～90 cmの不整楕円形、深さ50～60 cmである。柱痕跡は不明である。各柱穴間の心心距離は、300～310 cmである。各柱穴と壁との距離はP 1・P 3は約125 cm、P 2・P 4は約150 cmである。P 5・P 6は堆積土中に焼土、炭化物を多量に含んでいる。SD224に切られている。

遺物は、堆積土1層中から土師器破片19点、磨石1点、床面から土師器坏2点(C-669、C-670)、土師器破片6点(C-671他)、P 2検出面から須恵器破片1点、周溝堆積土中から土師器坏1点(C-674)、土師器破片2点、P 1～7堆積土中から土師器破片18点、鉄滓1点の計51点が出土している。床面出土遺物のうち、C-669・670・671の3点は、P 7西側からの出土である。写真38のように、内面を上にしたC-669の上に、C-670の2つに割れた片方が内面を上にして部分的に重なり、もう片方もすぐ近くの床面から外面を上にした出土状態を示している。また、C-671はC-669の内面に接している。第19図には、これら3点と、東側周溝堆積土中から出土したC



番号	登録番号	種別	器形	出土遺構	層位	外面調整		内面調整		法量(cm)		残存	写真図版
						口縁部	体部・底部	口縁部	体部・底部	器高	口径		
1	C-669	土師器	坏	SI—1299	床面	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラミガキ、黒色処理	4.7	15.6	見形	54—7
2	C-670	土師器	坏	SI—1299	床面	ヨコナデ	ヘラケズリ→軽いヘラミガキ	ヨコナデ	ヨコナデ→放射状のヘラミガキ	4.1	12.2	9/10	54—8
3	C-671	土師器	坏	SI—1299	床面	ヨコナデ、丹塗	—	ヨコナデ、丹塗	—	—	—	破片	54—10
4	C-674	土師器	坏	SI—1299	周溝	ヨコナデ→ヘラミガキ	ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	3.6	13.4	4/5	54—9

第19図　第87次調査区SI 1299竪穴住居跡出土遺物実測図

-674 を図示した。

土師器 C-669(第19図１)：器形は、体部下半の外面に軽い稜をもち、口縁が外反気味に立ち上がり、底部は丸底の坏である。完形に復元され、口径 15.6 cm、器高 4.7 cm、器厚3～7 mm を測る。胎土は緻密であるが砂粒を含んでいる。調整は、外面上半はヨコナデ、そののち下半をヘラケズリ、内面はヘラミガキののち黒色処理が施されている。外面下半の軽い稜はヘラケズリによって形成されたものである。外面の色調は灰白色を呈し、黒斑も認められる。

土師器 C-670(第19図２)：器形は、体部上半の外面に段をもち、口縁が直立気味に立ち上がり、底部は丸底の坏である。口縁の外面側にややふくらみをもつ。ほぼ完形に復原され、口径 12.2 cm、器高 4.1 cm、器厚4～5 mm を測る。胎土は極めて緻密であり、砂粒の混入はほとんどない。調整は、外面上半はヨコナデ、下斗はヘラケズリののち部分的なヘラミガキ、内面はヨコナデののち体下半に放射状のヘラミガキがまばらに11条暗文風に施されている。色調は内外面とも暗褐色を呈しており、内面には黒色を呈する部分もあるが、黒色処理とは異なる。

土師器 C-671(第19図３)：口縁部の破片である。口径の復元は難しいが、器形は小形の坏あるいは高坏の可能性がある。体部の内外面に段をもち、口縁は直接的に外傾して立ち上がる。器厚は3～4 mm である。胎土は極めて緻密であり、砂粒の混入はほとんどない。調整は内外面とも段より上はヨコナデ、下は不明である。内外面とも丹塗りが施されている。同一個体と考えられる口縁部破片が床面から１点 (C-672)、基本層Ⅰ層中から１点 (C-673) の計２点が出土している。

土師器 C-674(第19図４)：器形は、体部下半の外面に稜をもち、稜のすぐ上でややくびれ口縁へはわずかに内湾しながら立ち上がり、底部は丸底の坏である。内面に段はない。口縁部を一部欠損している。口径 13.4 cm、器高 3.6 cm、器厚4～8 mm を測る。胎土は緻密であるが砂粒を含んでいる。調整は、外面上半はヨコナデののちヘラミガキ、下半はヘラケズリののちヘラミガキが施されている。口縁端部にはヨコナデが残存している。内面にはヘラミガキが施されている。内外面の色調は灰白色を呈し、部分的に黒斑が認められる。底部外面にはヘラ書きにより、「＋」と記されている。本来、黒色処理が施されていたか否かについては不明である。

これら４点の遺物は、その出土状況からこの遺構に伴うものである。

この他、小破片であるため、図示しえなかったが周溝埋土中からは土師器 C-675 坏破片、堆積土１層中からは土師器 C-676 甑破片が出土している。C-675 は、口縁部から体部にかけての破片である。器形は、体部からわずかに内湾しながら立ち上がり、口縁部はやや外方へひらく。調整は、外面がヨコナデののちヘラミガキ、内面はヘラミガキののち黒色処理が施されている。C-676 は体部下半の破片であり、甕の可能性もある。調整は外面がヘラミガキ、内面はヘラケズ

りののちヘラミガキで、ヘラミガキの単位幅は3～6 mmである。

SD224 溝跡　第24次調査で検出されており、直角に屈曲し、直線的に北と東へのびる溝跡である。今回の調査では、その東方への続きを検出した。検出長13.6 m(東西総長26.3 m以上)、上幅40～55 cm、下幅15～40 cm、深さ20 cm程である。方向はW-0°-Eで、さらに東方へのびる。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は基本的に暗褐色シルトの単層であり、基本層II層を起源とする黄褐色土をブロック状に含んでいる。しかし、SI1299と重複する部分では北壁の立ち上がりが二段になっており、それに対応するように堆積土が2層に分かれている。SI1299を切っている。

遺物は堆積土中から土師器破片22点、須恵器破片1点、小玉石1点の計24点が出土している。

SD226 溝跡　第24次調査で検出されており、東西方向へのびる溝跡である。今回の調査では、その東方への続きを検出した。検出長13.2 m(総長71.2 m以上)、上幅40～60 cm、下幅30～50 cm、深さ10 cm程である。方向はW-0°-Eで、さらに東方へのびる。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は灰黄褐色シルトの単層である。SB264を切っている。

遺物は堆積土中から土師器破片1点が出土している。

SK258 土坑　第24次調査で西半部が検出されている。長軸1.27 m、短軸0.53 mの長方形で深さ50～60 cm、底面には凹凸があり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は4層に分かれ、黒褐色シルト、黄褐色・浅黄色砂質シルトである。

SK259 土坑　第24次調査で西半部が検出されている。長軸1.45 m、短軸1.13 mの不整楕円形で、深さ45 cmである。堆積土は暗褐色シルトで基本層III層をブロック状に含む。

遺物は、今回の調査で堆積土中から土師器破片1点が出土している。

SK1412 土坑　第24次調査で西半部が検出されている。長軸1.65 m、短軸1.10 mの不整楕円形で、深さ22 cmである。今回の調査での出土遺物はない。

4．ま　と　め

今回の調査では、第24次調査で検出されていたSB264、SK258、259、1412の全容と、SD224、SD226がさらに東方へのびることが判明した。また、新たにSB1298、SI1299が検出された。これらの遺構の所属時期については、以下のことが考えられる。

SB264は、その建物方向及び第24次調査で検出されていたSB236（東西棟総柱建物跡）と同規模で、東西に軒を連ねる配置関係にある。SB236はI期官衙（第3段階）に所属することが考えられており、SB264もこれと同時期に位置付けられる。またSB1298は、建物方向がSB264と同じ数値を示しており、I期官衙（第3段階）に伴う可能性がある。

SD224、226は、第24次・35次調査により第5段階以降であることが示されているが、SK258、

259、1412については所属時期は不明である。

SI1299については出土遺物の検討を行いたい。第19図に示された4点の土師器坏は、器形・法量においてそれぞれ異なり、胎土・色調・調整の点でも異なる面がある。郡山遺跡ではこうした組み合わせを示す検出例はなく、個々の遺物についても類似する例は極めて少ない。その中で、土師器C-670坏には、器形及び調整から類例を求めると、第24次調査で2点の報告例(C-182、C-176)がある(註6)。しかし、2点とも口径が14.8cmと、C-670が12.2cmなのに比べて大きく、口縁部の立ち上がりはほぼ垂直であり、最大径を体部中位の段に有するが、C-670の口縁部の立ち上がりはわずかに外へ開き、最大径が口縁部にある点で異なる。また2点のうちC-182は、I期官衙以前の第2段階に位置付けられているSI260竪穴住居跡床面から出土しており、器形は異なるが同様の胎土・色調・調整を示す土師器坏2点(C-181、C-183)と、体下端部に丹塗りの施された甑1点(C-185)を伴っている。これらの共伴する遺物はSI1299からは出土しておらず、SI260との関連性には、なお検討を要する。

次に、郡山遺跡周辺にC-670の類例を求めると、名取市清水遺跡第53号住居跡出土遺物があげられる。この住居跡からは、土師器坏4点と甕2点が出土遺物として報告されているが、そのうちの坏2点(登録番号:53住－2・4)にはC-670との器形的な類似性が認められる。C-670に比べ、器形において口径に対する器高の比率がやや小さく、法量の点では14cm前後と幾分大きいという差違はあるが、口縁の立ち上がりや、胎土、色調、調整は酷似している(註7)。他の2点(登録番号:53住－1・3)については、53住－1はC-669と口縁がわずかに外反して立ち上がる点では類似しているが、器形的にはやや異なる。53住－3はC-670と胎土、色調、調整において類似するが、むしろ器形をも含めて前述したSI260出土のC-182との強い類似性を示している。

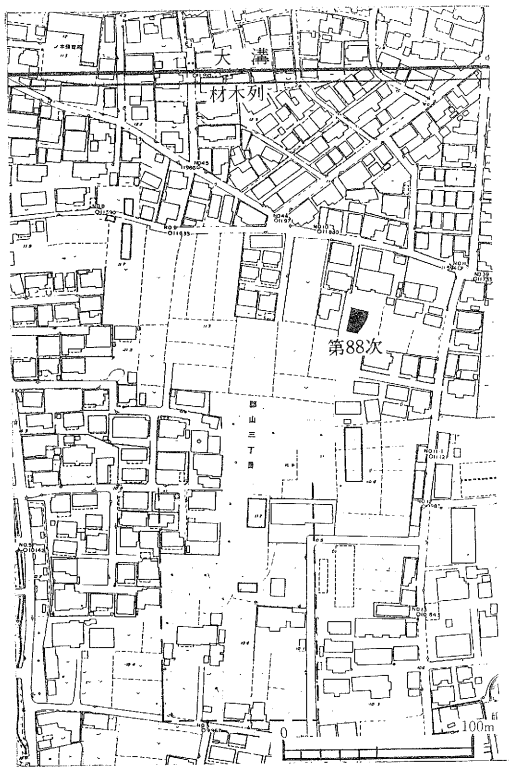
この第53号住居跡出土遺物は、第40号住居跡出土遺物などとともに清水遺跡第III群土器を構成しており、土師器型式編年では住社式に比定され、第40号住居跡出土の須恵器には6世紀中頃の年代が与えられている(註8)。また、最近では住社式を二つに分け、第1・第2段階とし、清水遺跡第III群土器を第1段階に位置付ける見解も示されている(註9)。清水遺跡第III群土器にはSI1299出土のC-669・671・674のような土器は含まれていないが、内外面丹塗りの坏(C-671)は、住社式には認められるが(註10・11・12)、栗囲式ではあまりみられず、仙台市栗遺跡からはまったく出土していない(註13)。これらのことから、SI1299の時期は、出土遺物から清水遺跡第III群土器を介して郡山遺跡では第2段階に所属する可能性が考えられる。尚、C-670には清水第III群土器の類似例と比べ口径が小さく、年代的にやや降る可能性もあること、C-674については国分寺下層式(註14)の坏との類似性もあり、またC-670とC-669・674には胎土・色調、調整に明らかな相違がみられることから、それらの出自とともに、このSI1229住居跡の年代的位置付けについては、今後、更なる検討が必要である。

V　第88次発掘調査

1．調　査　経　過

第88次調査は、仙台市若林区石名坂７番地、福仙興業代表取締役加藤文三氏より、太白区郡山３丁目120において住宅新築計画の申し入れが平成２年５月18日にあったことから、平成２年７月10日より敷地内の発掘調査を実施した。

調査対象地区は、方四町II期官衙の中央北東寄りの地区で、外部北辺より南約120ｍの位置にあり、第87次調査区の北東に接近している。今回の調査地区の西南方では第88次調査、第31次調査（Ａ区）、第24次調査（C・D区）において掘立柱建物跡、竪穴住居跡などが検出されている。



第20図　第88次調査区位置図

７月10日から調査を開始したが、建物配置や排土場などの関係から、敷地内の西側に東西7.5ｍ、南北12.1ｍの調査区を設定した。調査面積は80.5ｍ²である。 現状は畑地に盛土がなされており、耕作土、盛土の排土は重機により行った。また、遺構検出面は天地返し深耕により深くまで撹乱の及んでいるところが多かった。検出された遺構は一本柱列と土坑などであった。８月３日に調査を終了し、８月８日に埋戻し作業を行った。

2．基　本　層　序

基本層はＩ・II層の大別２層、細別３層が確認された。

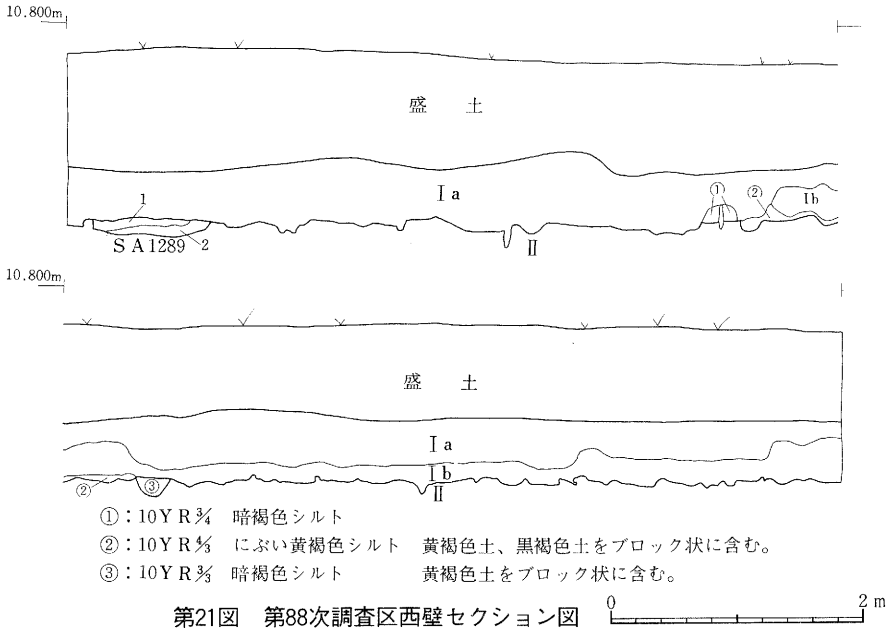
Ｉａ層：10YR3/4 暗褐色シルト。旧耕作土。

Ｉ6層：2.5Y4/1 黄灰色シルト。部分的な分布を示す。

III層：10YR5/6 黄褐色粘土質シルト。地点的に砂粒を含むところがある。

3．発見遺構・出土遺物

今回の調査によって発見された遺構は、一本柱列１条、土坑５基、柱穴・ピット20基である。遺構検出面は、基本層II層上面である。



第21図　第88次調査区西壁セクション図

SA1289 一本柱列　検出長は 13.0 m で、さらに南北へのび、方向は N-34°-E である。布掘りは上幅40～ 60 m、深さ10～ 12 cm で、底面は平坦、壁はやや斜めに立ち上がる。柱痕跡は直径15～ 25 cm の円形で、10本を確認した。間幅は60～ 80 cm である。柱痕跡はいずれも堆積土2層上面での検出であり、堆積土1層上面では確認されない。布掘りの埋土は2層に分かれ、1層は灰黄褐色シルト、2層はにぶい黄褐色粘土質シルトである。SK1285、SK1284 に切られている。

遺物は、埋土1層中から土師器破片27点が出土している。

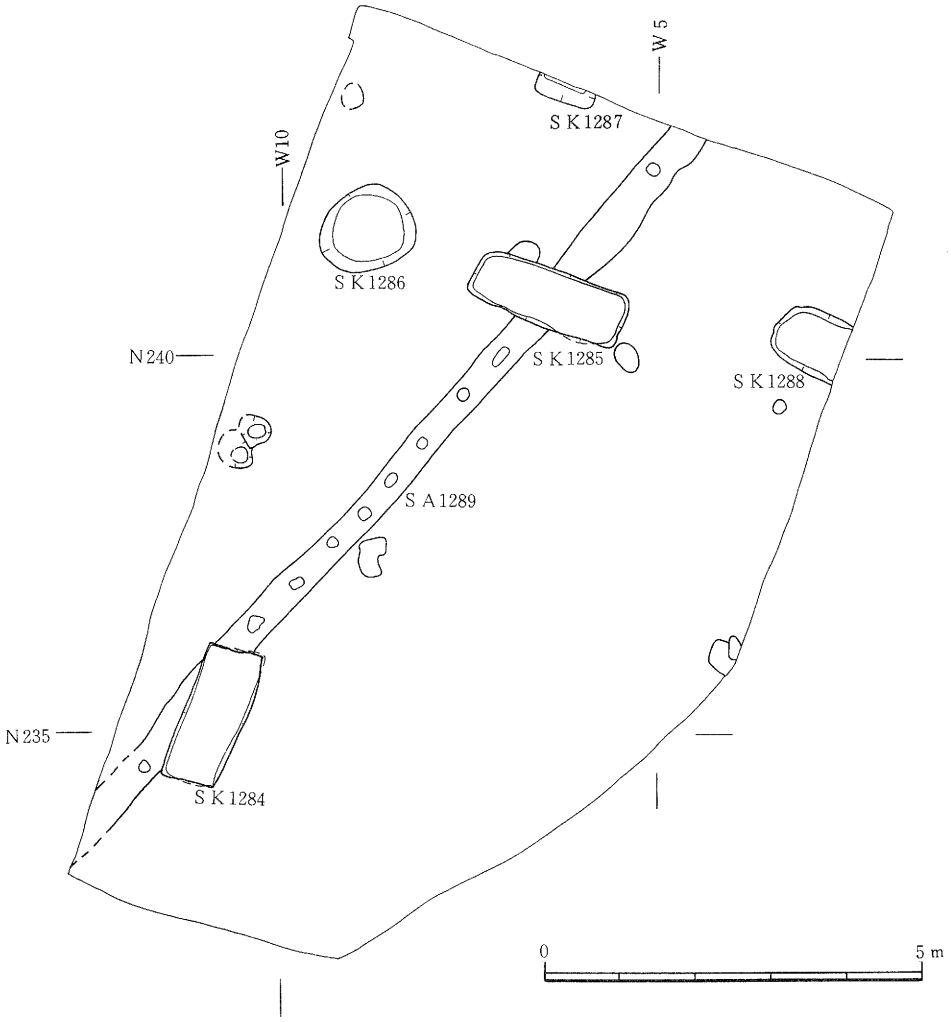
SK1284 土坑　長軸 18.5 cm、短軸 82 cm の長方形で、深さ 50 cm、底面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。長軸方向は N-13°-E である。堆積土は3層に分かれ、黒褐色、黄褐色のシルトあるいは粘土質のシルトであり、いずれも基本層II層を起源とする黄褐色土をブロック状に含んでいる。人為的な堆積土と考えられる。SA1289 を切っている。

遺物は、堆積土中から土師器破片48点、小玉石1点の計49点が出土している他、堆積土中からは炭が比較的多く出土している。製作にロクロを使用した土師器破片は確認されていない。

SK1285 土坑　長軸 210 cm、短軸 80 cm の隅丸長方形で、深さ 20 cm、底面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。長軸方向は W-12°-N である。堆積土は単層で黒褐色シルト、掘り方埋土は褐色の砂質シルトである。SA1289 を切っている。

遺物は、堆積土1層中から土師器破片16点が出土している。

SK1286 土坑　東西 130 cm、南北 115 cm のほぼ円形で、深さ 16 cm・底面はほぼ平坦で、



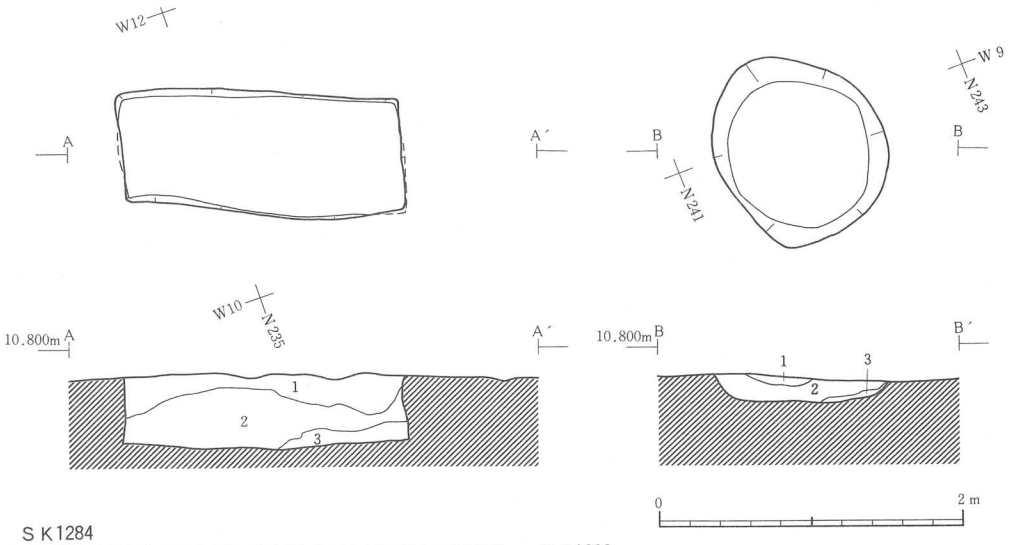
第22図　第88次調査区Ⅱ層上面平面図

壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は2層に分かれ、灰黄褐色のシルト、粘土質シルトである。

遺物は堆積土1層中から土師器破片10点、2層中から土師器甕1点（第24図、C-681）、土師器破片6点、小玉石1点の計18点が出土している。

SK1287 土坑　東西80 cm、南北25 cm以上で、方形を基調としており、深さは22 cm、底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は2層に分かれ、1層は黒褐色シルト、2層はにぶい黄褐色の粘土質シルトである。遺物は出土していない。

SK1288 土坑　長軸95 cm以上、短軸82 cmの隅丸長方形あるいは楕円形で、深さは13 cm、底面はほぼ平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。堆積土は2層に分かれ、1層は黒褐色シルト・2層はにぶい黄褐色の粘土質シルトである。遺物は出土していない。



ＳＫ1284

層位	土　色	土　性	備　考
1	10YR3/2黒褐色	シルト	黄褐色土をブロック状に多量に含みしまりがある。人為的堆積土と考えられる。
2	10YR3/1黒褐色	粘土質シルト	黄褐色土をブロック状にわずかに含む。
3	10YR5/6黄褐色	粘土質シルト	黒色土をブロック状に含む。

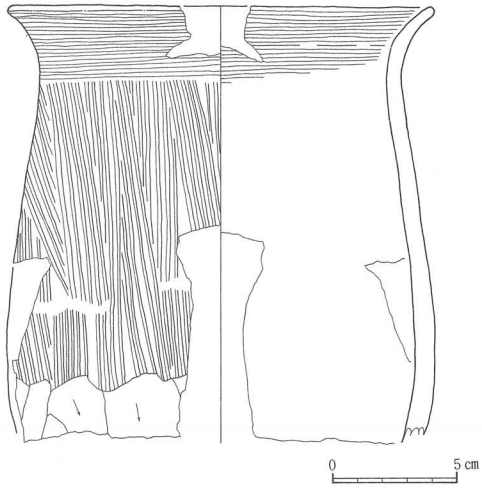
ＳＫ1286

層位	土　色	土　性	備　考
1	10YR5/3灰黄褐色	シルト	黄褐色土をブロック状に少量に含む。
2	10YR5/3灰黄褐色	粘土質シルト	マンガン斑を含む。
3	10YR5/3灰黄褐色	粘土質シルト	黄褐色土をブロック状に少量に含む。

第23図　第88次調査区ＳＫ1284・ＳＫ1286平断面図

4．ま　と　め

第88次調査では、一本柱列１条、土坑５基が検出されたが、第88次調査などで検出されている掘立柱建物跡、竪穴住居跡は検出されなかった。このうちSA1289一本柱列は、Ｉ期官衙の建物群、柵木列などの方向とほぼ同じであり、第３段階に所属する可能性が考えられる。またSK1286は、出土した土師器甕（C-681）から、第２～４段階に所属するものと考えられるが他の土坑については、SK1284、1285が第３段階以降、SK1287、1288については所属時期は不明である。



登録番号	種　別	器形	出土遺構	層　位	外　面　調　整		
C-681	土師器	甕	ＳＫ1286	2　層	口縁：ヨコナデ、体部：ヘラケズリ、刷毛目		
内　面　調　整				器　高	口　径	残　存	写真図版
口縁：ヨコナデ、体部：ナデ				17.5cm以上	17.3cm	1/6	54—13

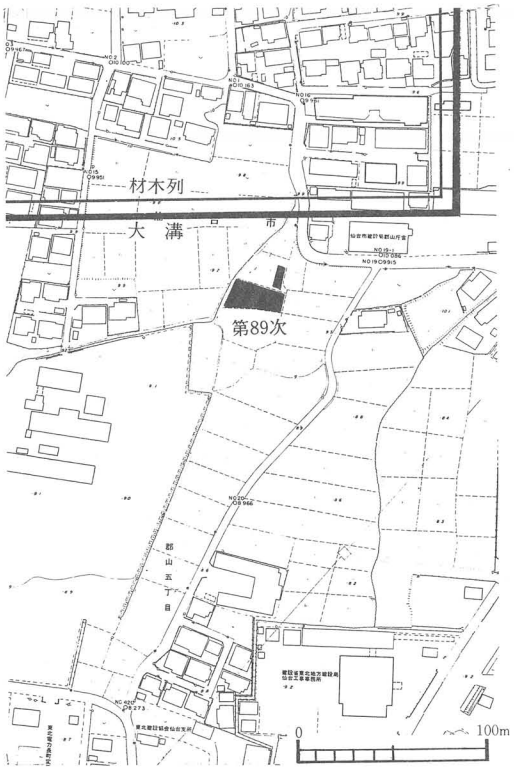
第24図　第88次調査区ＳＫ1286出土遺物実測図

Ⅵ　第89次発掘調査

1．調　査　経　過

第89次調査は、郡山５丁目50他の約 800 m²を対象として、平成２年10月23日より発掘調査を実施した。

調査対象地区は、方四町Ⅱ期官衙の南辺、東端と南門の中点から南へ約 50 m に位置し、第65次調査区の北に近接する。第65次調査では、真北方向を基準とする掘立柱建物群、住居跡などが検出されており、今回の調査はこれらの遺構の北方への広がりの確認を主たる目的とした。



第25図　第89次調査区位置図

10月23日から調査を開始したが、敷地、排土場の関係から、北側に東西４m、南北 23.5 m の調査区(北区)、南側に東西 30 m、南北15～９m の調査区（南区）を設け、６m×６m のグリットを設定した。調査面積は 429.1 m²である。現状は水田であり、現耕作土を重機により排土した。基本層Ⅲ上面と、Ⅳ層上面の２面で遺構を検出したが、Ⅳ層上面で検出した遺構の掘り込みは行わなかった。12月４日に調査を終了し、12月10日・11日に埋め戻し作業を行った。

2．基　本　層　序

基本層はⅠ～Ⅳ層の大別４層、細別７層が確認された。南区北壁セクションラインは現畦畔直下に近い位置にある。また北区ではⅠ及びⅣ層を除く他の層は層厚も薄く、安定した分布を示していない。そのため、各基本層の層厚、分布などは南区を中心として述べることにする。

Ⅰ層：7.5Y5/1 灰色粘土質シルト。現水田耕作土。

Ⅱａ上層：5Y6/1 灰色シルト。南区全域に分布する。層厚は５～13 cm。南区西端では層厚を増し（15～20 cm)、下面となるⅡａ下層とⅢ層上面には細かな凹凸が認められる。

Ⅲａ下層：2.5Y6/2 灰黄色シルト。南区西端部、東端部には分布しない。層厚は３～10 cm。下面には細かな凹凸が認められる。

Ⅱｂ層：2.5Y5/1 黄灰色粘土質シルト。南区全域に分布する。層厚は5～10 cm。下面には細か

な凹凸が認められる。中性の水田土壌。下面は遺構検出面。

III層：10YR4/1 褐灰色シルト質粘土。南区全域に分布する。層厚は 5 ～ 15 cm。下面には細かな凹凸が顕著に認められる。基本層IV b 層を起源とする黄褐色土をブロック状に含む。水田土壌の可能性が考えられる。

IV a 層：10YR3/1 黒褐色粘土質シルト。南区東端部、北区に認められる。層厚は 5 ～ 15 cm。基本層IV b 層を起源とする黄褐色土をブロック状に含む。

IV b 層：2.5Y7/4 浅黄褐色粘土質シルト。南区、北区全域に分布する。遺構検出面。

3．発見遺構・出土遺物

今回の調査では、II b 層下面とIV層上面で遺構が検出された。また基本層 I ～III層中及びIV層上面から遺物が出土している。

(1)II b 層下面の調査：II b 層下面には基本層III層、IV a 層、IV b 層が分布する。南区中央部ではIII層上面で畦畔状の高まりが 1 条、南区東端部ではIII～IV b 層の各層が分布する範囲で、段差及び、水口状の落ち込みが検出された。この段差の延長は、北区南端で確認されている。東端部での状況は、段差及び水口状の遺構がII b 層を耕作土とする水田跡に伴うものであることを示しており、南区中央部の畦畔状の高まりは擬似畦畔 B（註15）として理解することが可能である。

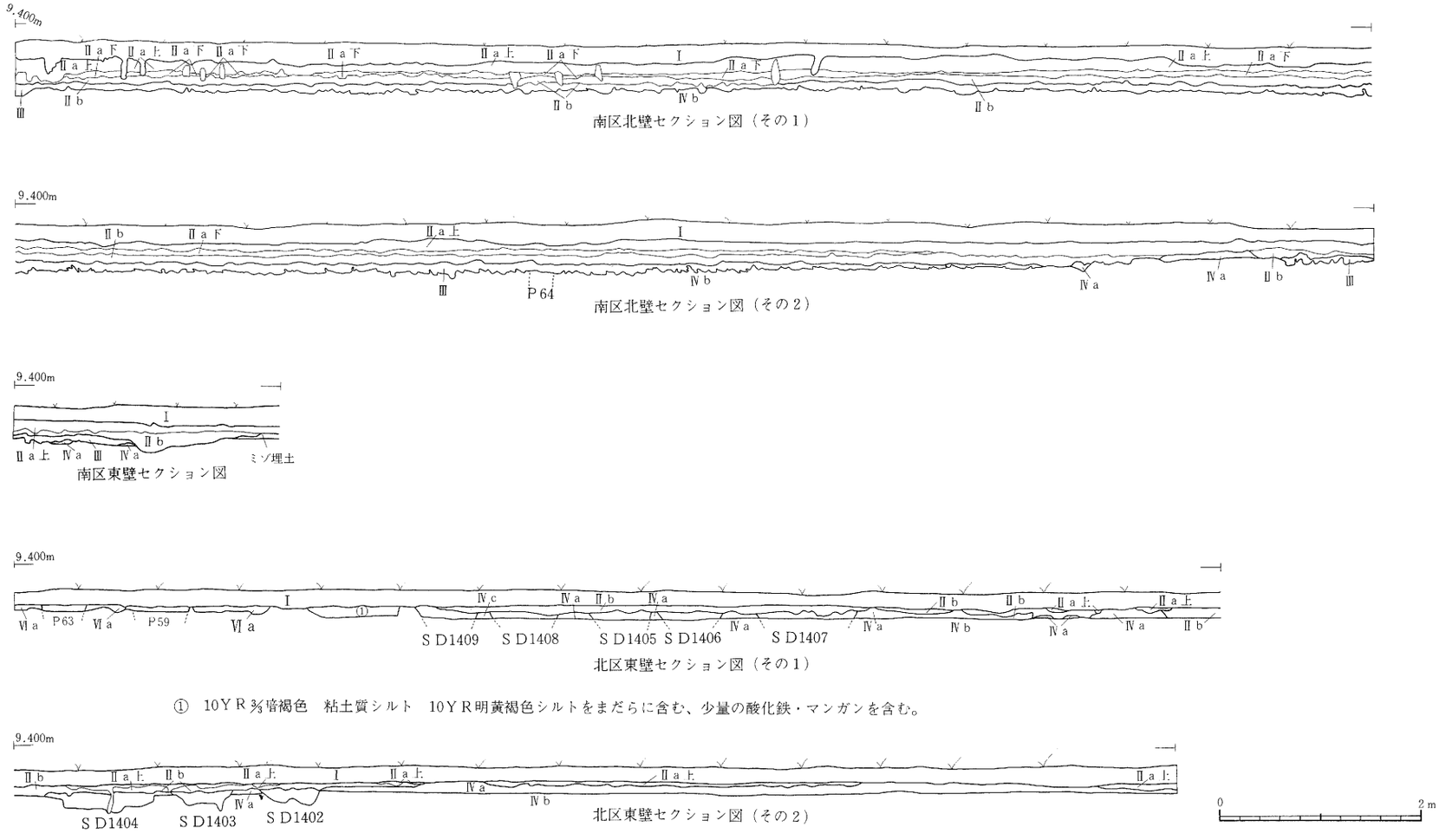
II b 層からは総数116点の遺物が出土しているが、土器・瓦はすべて破片であり、特に集中する分布は示していない。それらの種別と点数は、土師器68点、須恵器16点、磁器 2 点、陶器 1 点、土器小破片25点、瓦 2 点、石製品 1 点、鉄滓 1 点である。出土した陶器・磁器は、中世、近世のものであり、III層中出土遺物の年代をふまえると、この水田跡（II b 層水田跡）は、15世紀以降の中世から近世の間に位置付けられる。

(2)IV層上面の調査：III層下面には基本層IV a 層、IV b 層が分布する。南区東端部、北区南端部ではII b 層水田跡と同様の位置に段差が検出されており、III層を耕作土とする水田跡が存在していた可能性もある。南区西半部のIV b 層上面で検出されている小溝状の遺構は、埋土が基本層IIIであることから、水田耕作に伴うものであることも考えられる。

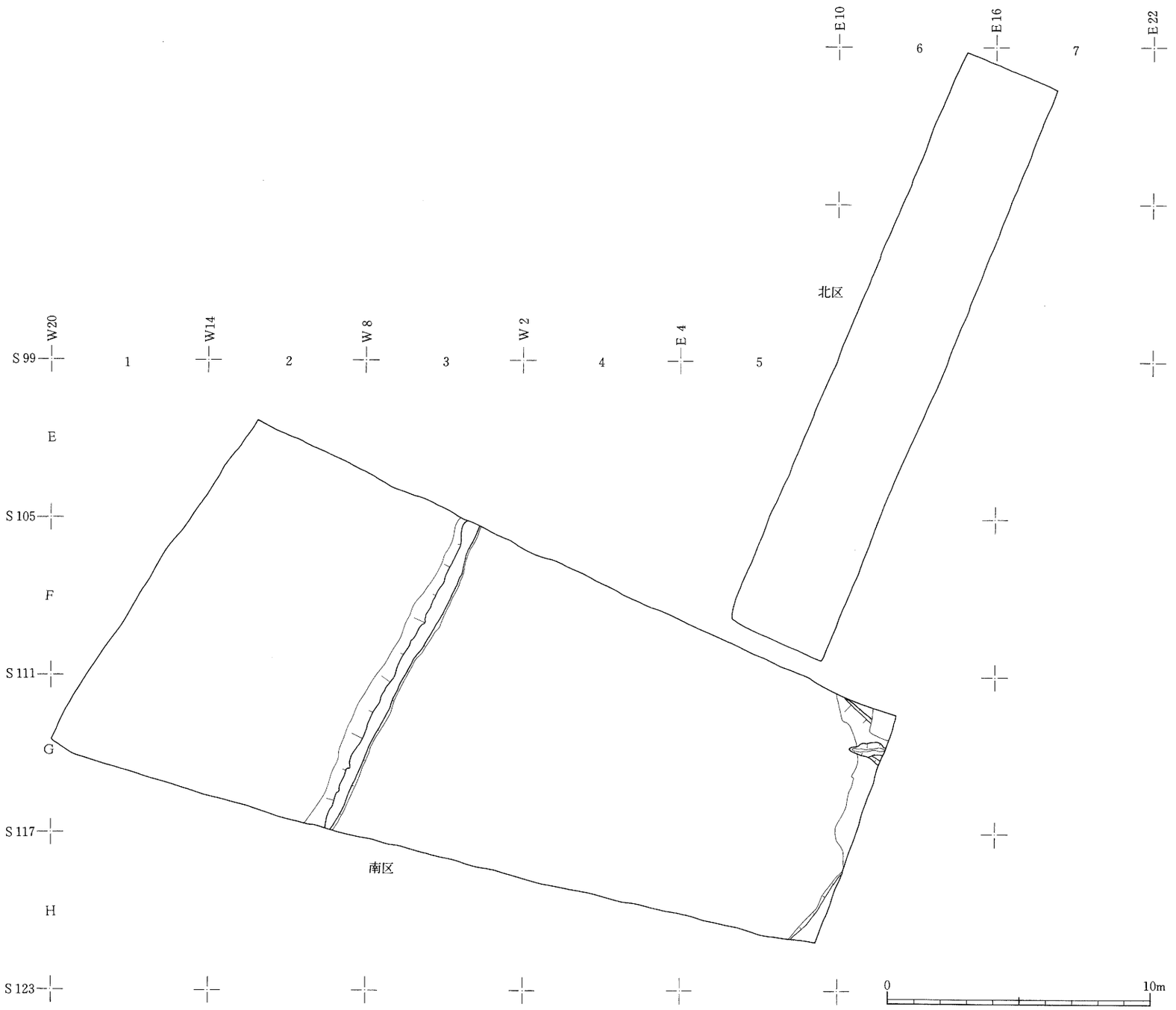
III層中からは総数358点の遺物が出土しており、陶器、磁器、古銭などから、その下限は中世(14～15世紀)と考えられる。また、土師器や須恵器の破片も比較的多く出土しているほか、円筒埴輪の破片も 1 点認められた。

次に、IV層上面では溝跡11条、性格不明遺構 2 基、ピット67基が検出されている。

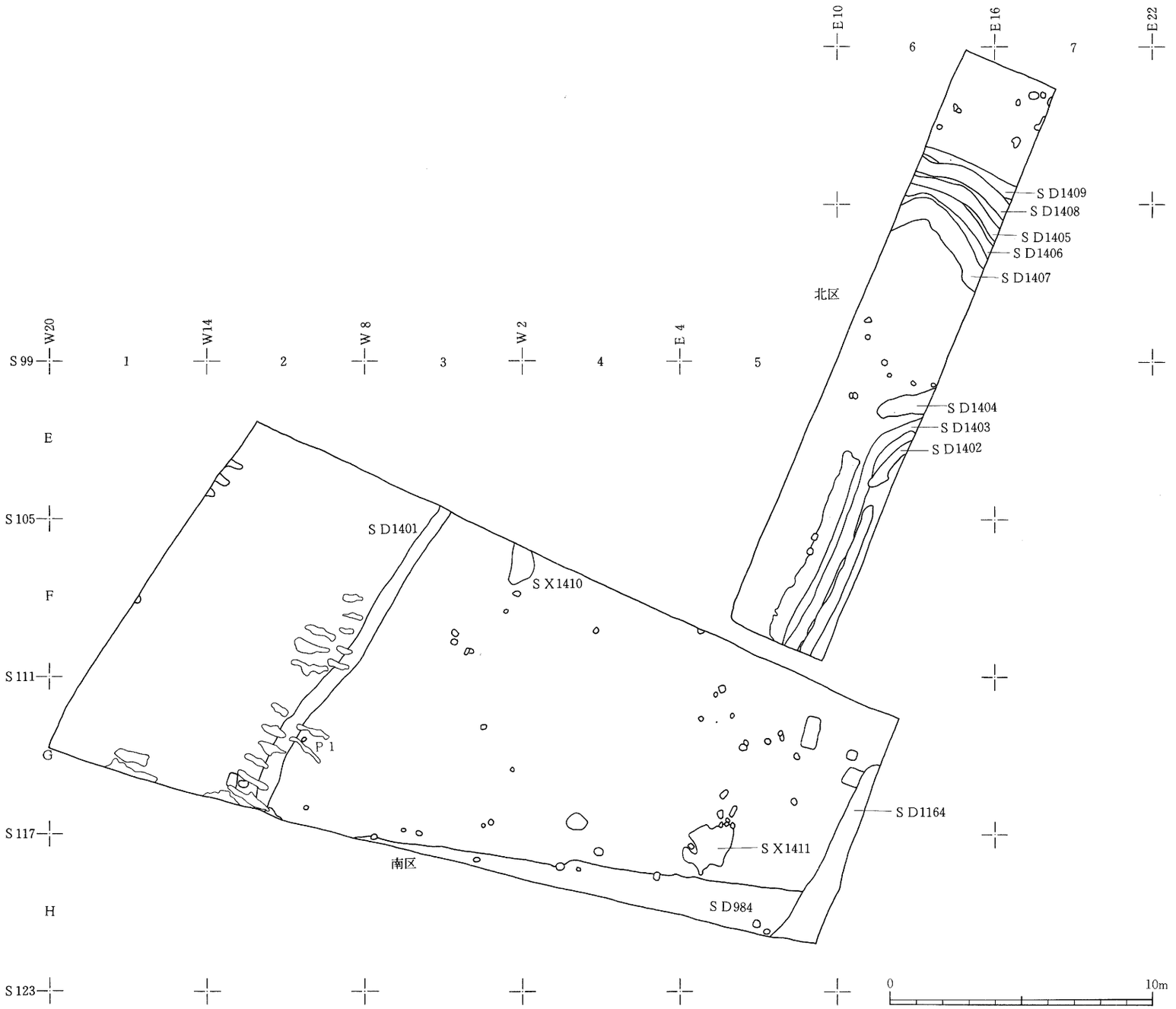
SD984 溝跡　第65次調査で検出されており、東西方向へのびる溝跡である。検出長 17.2 m、上幅 1.8 m 以上である。方向は E-1°-S である。確認面の堆積土は黄灰色粘土質シルトである。



第26図　第89次調査区土層断面図



第27図　第89次調査区Ⅲ層上面平面図



第28図　第89次調査区Ⅳ層上面平面図

SD1164 に切られている。遺物は確認面から土師器破片 2 点、須恵器破片 1 点、土器小破片 1 点の計 4 点が出土している。

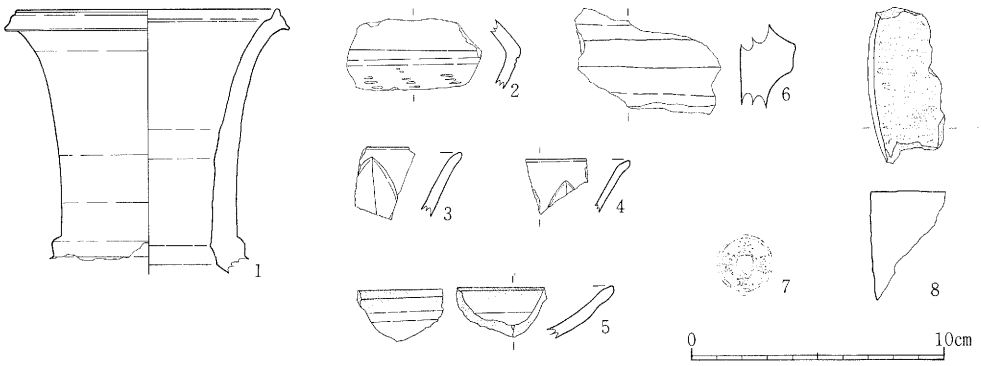
SD1164 溝跡　第65次調査で検出されており、南北方向へのびる溝跡である。検出長 7.7 m、上幅 1.5 m 以上である。調査区内で西側の上端は途切れている。方向は N-19°-E である。確認面の堆積土は黄灰色粘土質シルトである。SD984 を切っている。

遺物は確認面から鉄滓 1 点が出土している他、円礫が比較的多くみられる。

SD1401 溝跡　南区西半部 E～G－ 2・3 グリットで検出されており、南北方向へのびる溝跡である。検出長 13.5 m、上幅50～ 70 cm である。方向は N-26°-E である。確認面の堆積土は暗灰黄色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

SD1402～SD1407 溝跡　北区においてⅣ a 層上面で検出されている。この 6 条の溝跡は、堆積土の類似性、方向性などから、SD1402 と SD1405、SD1403 と SD1406、SD1404 と SD1407 が、それぞれ同一の溝跡と推定される。これらは小溝状遺構群(註16)として理解される。SD1402 と SD1405 は、それぞれ SD1403、SD1406 を切っている。上幅40～ 80 cm、堆積土中にはいずれも基本層Ⅳ b 層を起源とする黄褐色土をブロック状に含んでおり、一部掘り込みを行った東壁の断面では、SD1402～1404 の底面に凹凸のあることが認められた。プラント・オパール分析の結果をも考えると、畑跡の可能性が考えられる。遺物はいずれの溝跡からも出土していない。

SD1408 溝跡　北区 C・D－ 6・7 グリットで検出されている。やや弧状を呈して東西方向に



	登録番号	種別	器形	出土遺構・地区	層　位	備　　考	写真図版
1	E-324	須恵器	壺	P 1		口径11.3cm、口縁～頸部の⅙	54—15
2	E-320	須恵器	壺	G－4－b	Ⅲ層	破片	54—14
3	J－8	磁　器	碗	G－3	Ⅱ b 層	龍泉窯系、口縁部破片	54—20
4	J－9	磁　器	碗	F－2－a	Ⅲ層	龍泉窯系、口縁部破片	54—19
5	I－29	陶　器	皿	G－3	Ⅱ a 層	瀬戸灰釉、口縁～体部破片	54—18
6	P－21	円筒埴輪		G－3－b	Ⅲ層	凸帯上幅:11cm、下幅2.7cm、高さ:1.0cm	54—16
7	N－51	銅　銭		G－4－c	Ⅲ層	洪武通宝（明：1368年）	
8	K－27	石　臼		G－4－a	Ⅲ層		54—17

第29図　第89次調査区出土遺物実測図

のびる溝跡である。検出長 3.8 m、上幅 55 cm である。確認面の堆積土は褐灰色粘土質シルトである。SD1409 を切っている。遺物は出土していない。

SD1409 溝跡　北区 C-6・7 グリットで検出されており、東西方向にのびる溝跡である。検出長 3.8 m、上幅 50 cm、方向は N-73°-W である。SD1408 に切られている。遺物は出土していない。

P 1 ピット　南区西半部 G－2 グリットで検出されている。径18× 16 cm である。堆積土は黄灰色シルト質粘土である。須恵器壷 (E-324) の頸部が体部の方を下にして出土している。口縁部から頸部の破片が、その周辺のIII層中から出土している。

4．ま　と　め

今回の調査では、II b 層を耕作土とする中世から近代にかけての水田跡、IV層上面で溝跡 5 条、小溝状遺構群などを検出したが、第65次調査で検出されたような官衙に直接関連する真北方向を基準とした掘立柱建物跡などは検出されなかった。しかし、出土遺物は古墳時代から近世に及んでおり、中世から近世にかけては生産域として利用されていたことが明らかとなった。

仙台市郡山遺跡（第89次調査区）における
プラント・オパール分析

古環境研究所

1．は　じ　め　に

この調査は、プラント・オパール分析を用いて、郡山遺跡（第89次調査）における稲作跡の検証と探査およびイネ科栽培植物の検討を行ったものである。

2．試　　料

調査地点は、南区北壁と北区東壁および南区の3箇所である。調査区の土層はⅠ層～Ⅳb層に分層され、このうちⅠ層～Ⅲ層では発掘調査によって水田層の可能性が認められていた。また、北区東壁では小溝状遺構が検出され、畠跡の可能性が考えられていた。試料は、容量50 cm³の採土管を用いて、各層ごとに5～10 cm間隔で採取された。試料数は計11点である。

3．分　析　法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）」をもとに、次の手順で行った。

(1)試料土の絶乾（105°C・24時間）、仮比重測定

(2)試料土約1gを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40 μm、約0.02 g）

※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量

(3)電気炉灰化法による脱有機物処理

(4)超音波による分散（300 W・ 42 KHZ・10分間）

(5)沈底方による微粒子（20 μm以下）除去、乾燥

(6)封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成

(7)検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプ

ラント・オパール個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重単位・10^{-5} g）をかけて、単位面積で層厚１cm あたりの植物体生産量を算出した。換算計数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケ亜科はゴキダケの値を用いた。その値は、それぞれ2.94（種実重は1.03）、6.31、0.48である。（杉山・藤原、1987）。

4．分　析　結　果

プラント・オパール分析の結果を表１と図１に示す。なお、稲作跡の検証が主目的であるため、定量はイネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族（ススキやチガヤなどが含まれる）、キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な５分類群に限定した。

5．考　　察

(1)稲作の可能性について

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料 1g あたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて稲作の可能性について検討を行った。

南区北壁では、Ⅰ層～Ⅳb 層について分析を行った。その結果、Ⅳb 層を除く各層でイネのプラント・オパールが検出された。このうち、Ⅰ層、Ⅱa 層上部、Ⅱb 層では密度が20,000個/g 以上と非常に高い値であり、明瞭なピークが認められた。したがって、これらの層で稲作が行われていた可能性は極めて高いと考えられる。また、Ⅱa 層下部, Ⅲ層, Ⅳa 層でも密度が10,000個/g 前後と高いことから、稲作の可能性は高いと考えられる。これらのことから、同地点ではⅣa 層の時期から現在まで、ほぼ継続して稲作が営まれたものと推定される。

北区東壁では、小溝状遺構の埋土（SD1402 ～ SD1404）について分析を行った。その結果、これらのすべてからイネのプラント・オパールが4,900～9,800個/g と高い値で検出された。したがって、同遺構で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。

南区では、溝状遺構の埋土（No. 1）について分析を行った。その結果、イネのプラント・オパールが7,500個/g と高い値で検出された。したがって、同遺構で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。

(2)イネ科栽培植物の検討

プラント・オパール分析で同定される分類群のうち、栽培植物が含まれるものには、イネ以

外にもキビ族（ヒエやアワなどが含まれる）やムギ類などがあるが、これらのプラント・オパールはいずれの試料からも検出されなかった。

なお、プラント・オパール分析で復元できる植生はイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畠作物は対象外となっていることに留意されたい。

＜参考文献＞

杉山真二・藤原宏志、1987、川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析、赤山－古環境編－、川口市遺跡調査会報告、第10集、281-298。

藤原宏志、1976、プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－、考古学と自然科学、9：15－29。

藤原宏志、1979、プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)－福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（O. sativa L.）生産総量の推定－、考古学と自然科学、12：29－41。

藤原宏志・杉山真二、1984、プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラントーオパール分析による水田址の探査－、考古学と自然科学、17：73－85。

表１　プラント・オパール分析結果

（仙台市、郡山89次）

南区北壁- 1

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比量	イネ 個／g	(籾総量) t／10a	ヨシ量 個／g	タケ亜科 個／g	ウシクサ族 個／g	キビ族 個／g
1	0	18	0.92	24,400	41.72	0	14,500	900	0
2a-1	18	8	1.03	20,100	17.06	800	12,900	4,800	0
2a-2	26	4	0.95	9,200	3.58	900	14,800	2,700	0
2b	30	6	1.05	22,700	14.77	800	15,100	5,800	0
3	36	10	1.01	12,800	13.18	0	9,300	1,700	0
4b	46	-	0.98	0	-	0	6,900	0	0

南区北壁- 2

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比量	イネ 個／g	(籾総量) t／10a	ヨシ量 個／g	タケ亜科 個／g	ウシクサ族 個／g	キビ族 個／g
4a	28	7	0.91	11,800	7.64	0	26,100	2,500	0

北区東壁-小溝

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比量	イネ 個／g	(籾総量) t／10a	ヨシ量 個／g	タケ亜科 個／g	ウシクサ族 個／g	キビ族 個／g
SD1402	21	15	0.86	9,800	12.98	1,600	16,400	800	0
SD1403	25	9	0.90	5,800	4.73	1,600	21,700	7,500	0
SD1404	23	12	0.82	4,900	4.94	800	18,800	2,400	0

南区-小溝

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比量	イネ 個／g	(籾総量) t／10a	ヨシ量 個／g	タケ亜科 個／g	ウシクサ族 個／g	キビ族 個／g
No.1	0	10	1.03	7,500	7.83	0	17,300	1,500	0

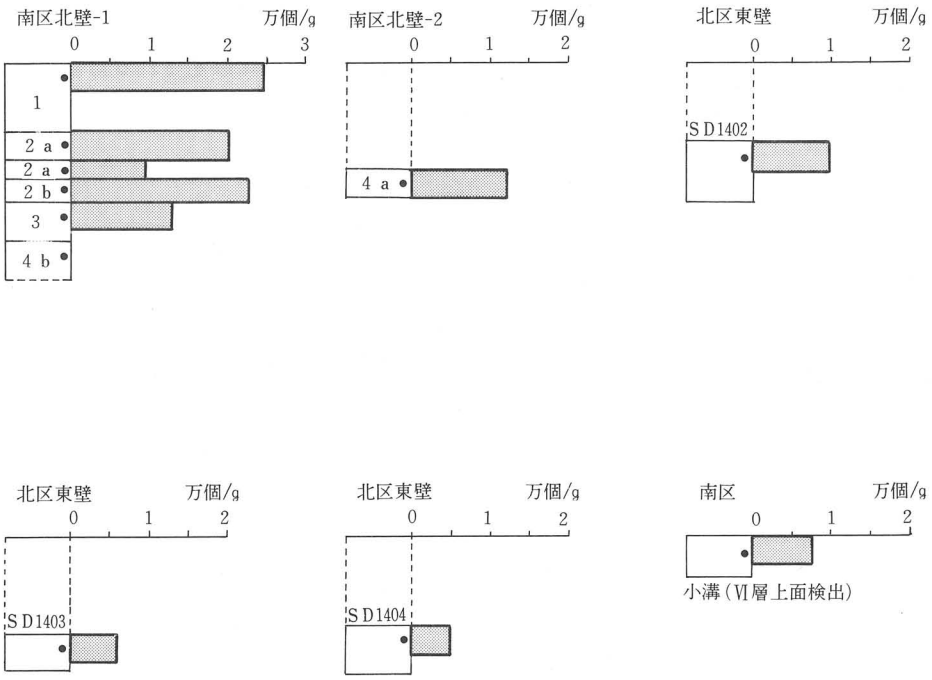


図1　イネのプラント・オパールの検出状況

（注）◀印は50cmのスケール、●印は分析試料の採取箇所

Ⅶ 総　　括

今年度は、昭和60年以降実施してきた第２次５ヶ年の調査に引き続き策定された「郡山遺跡緊急確認調査」第３次５ヶ年計画の初年次にあたり、Ⅰ期官衙の中枢遺構の確認を目的としてⅡ期官衙内中央地区での調査を予定していた。また、その他に住宅建築等に伴う発掘届が提出され、同地区での小規模な事前調査を２件予定していた。第83次調査は昨年度調査の第83次調査区および昭和57年度調査の第24次調査区に隣接しており、塀で区画されたⅠ期の官衙ブロックの確認に主眼をおいた。調査の結果、官衙内部を区画した材木列・板塀の変遷が認められ、大形の柱を持つ倉庫建物が軒を揃えて建ち並んでいることや、竪穴建物による鍛冶工房跡等が発見され、Ⅰ期官衙内部の様相が次第に明らかになりつつある。また、Ⅱ期官衙外郭南辺外での調査は、第65次調査（註17）で大形の掘立柱建物跡が発見されたことから、この北側地区の遺構確認を目的として実施した。

１．Ⅰ期官衙の調査

Ⅰ期官衙を構成する遺構は第86・87・88次調査において発見された。

第24・83次調査で発見されていたSA255材木列とSA1242板塀は第86次調査区内で直交する推定位置関係にあったが、調査の結果、先行して造られた材木列の後に板塀が造られており、板塀は材木列との接続位置で直角に屈曲して、南に伸びる材木列位置に重複している。また、板塀に先行して同位置にSA1245一本柱列があり、材木列との新旧関係・接続状況は不明であるが、当初はこの一本柱列と材木列が同時に機能していた可能性が考えられる。さらに材木列・板塀とも抜き取りの跡が見られないことから、一時期、両者は同時に機能していたものとみておきたい。先行するSA255の段階では、西側に官衙ブロックや今回明らかになった工房ブロック等の院が連なり、東側には倉庫群が形成されたものとみられる。次にSA255に接続するSA1245・1242が東側に造られ、それまで倉庫群が置かれていた地区は塀によって区画され、倉庫群とは異なった機能を持つ官衙の一画となったものとみておきたい（註18）。

第86次調査で発見された鍛冶工房跡は、これまでの調査で知られていた竪穴建物跡（註19）としてきた遺構と同様の形態を呈している。竪穴建物は主にⅠ期官衙段階の遺構群の中に見られたが、上屋構造・性格等が明らかでなく、一部のものについては厨・竈屋等の雑舎の可能性を指摘（註20）したが、官衙内での機能的位置づけは検討課題としてきた。今回発見したSI1294は遺構内の炉の状況や出土遺物の状況等から鍛冶工房跡とみられ、竪穴建物の具体的機能が初めて明らかとなった。しかし、これまで調査してきた竪穴建物跡とは内部の状況が異なっていることから、竪穴建物の機能が単一限定のものでないことも明らかである。

第86次調査で鍛冶工房跡に隣接して発見された掘立建物跡は新旧2棟が重複しているが、いづれも他の官衙・倉庫ブロックの中では殆どみられない建物である。とくに棟持柱を持つ建物はこれまで例がなく、神殿建物との類似性が考えられたが、地方官衙内における神事に関わる施設の在り方、鍛冶工房施設と神事に関わる施設との関連、の2点についての可能性を今後の検討課題として指摘しておきたい。

第87次調査で発見されたSB264はその西側に位置するSB236とほぼ同規模で並立しており、さらに東側に位置するSB344とも一列を成し、3棟の倉庫建物が軒を揃えて建つことが確認された。SB236との間隔は4.8m（16尺）、SB344との間隔は12m（40尺）である。

第86・87次調査で、Ⅰ期官衙あるいはそれ以前と考えられる遺構から出土した土師器は、官衙の造営・存続期と考えられる7～8世紀の在地の土師器にはこれまで殆ど認められない特徴を持っているものである。小破片が殆どで、全てを網羅的に集約できないが、大別すれば次の特徴が抽出されよう。1．全てに共通する点は(1)胎土が橙色系で粒子が密である。(2)胎土に赤褐色粒子を含む。(3)いわゆる内面黒色処理を施さない。2．器形からみれば(1)口縁部と底部の境に強い段を持つもの。(2)口縁部と底部の境に稜を持つもの。(3)丸底から口縁部へ緩やかに立ち上がるもの。3．調整技法からみれば、外面はヨコナデ・ヘラケズリを行ない(1)内面ナデ調整のもの。(2)外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキのもの。(3)内面ナデ調整後ヘラミガキのもの。4．その他色調からみれば、(1)無処理のもの。(2)暗赤褐色を呈するもの。(3)黒色の樹脂状塗布がみられるもの。等がある。

これらの特徴を持ち土師器坏は、7世紀の在地の土器群とは明らかに異なっていたことから在地外土器との比較検討を行ったところ、鬼高式後葉の土器との類似性が見られたことから「鬼高系」と考えられた（註21）。しかし、これを6世紀代の在地の土器との比較検討により、東北南半の土師器編年第Ⅳ型式（住社式）の土師器坏との類似性が指摘され、6世紀代の在地の土器とする見方も提示されている（註22）。これら土器群の出自・年代等については、Ⅰ期官衙の開始年代及びⅠ期官衙以前の第2段階遺構群の年代と併せ、今後の検討課題としておきたい。

2．Ⅱ期官衙の調査

第86次調査で小規模な建物が1棟発見されたのみで、Ⅱ期官衙段階の遺構は殆ど見るべき物がなかった。今年度の調査区を含む、政庁推定域の北側、南辺から北三町位置の東西塀跡までの間には竪穴住居跡・竪穴建物が散見される程度で、官衙の重要な施設はなかったものとみられる。

第30図　Ⅰ期官衙遺構全体図

註・参考文献

度々、引用される郡山遺跡調査概報については次のとおりである。

「郡山報Ⅰ」　仙台市文化財調査報告書第23集「年報１」『郡山遺跡発掘調査概報』1980

「郡山Ⅰ」　〃 第29集「郡山遺跡Ⅰ」1981　「郡山Ⅱ」　〃 第38集「郡山遺跡Ⅱ」1982

「郡山報２」　〃 第42集「郡山遺跡－宅地造成に伴う緊急調査」1982

「郡山Ⅲ」　〃 第46集「郡山遺跡Ⅲ」1983　「郡山Ⅳ」　〃 第64集「郡山遺跡Ⅳ」1984

「郡山Ⅴ」　〃 第74集「郡山遺跡Ⅴ」1985　「郡山Ⅵ」　〃 第86集「郡山遺跡Ⅵ」1986

「郡山Ⅶ」　〃 第96集「郡山遺跡Ⅶ」1987　「郡山Ⅷ」　〃第110集「郡山遺跡Ⅷ」1988

「郡山Ⅸ」　〃第124集「郡山遺跡Ⅸ」1989　「郡山Ⅹ」　〃第133集「郡山遺跡Ⅹ」1990

註１　「郡山Ⅶ」Ⅸ章１（P.77）

註２　伊藤延男「古建築のみかた」（P.125～146）　1967　第一法規出版
　　稲垣栄三編　№81「古代の神社建築」『日本の美術２』1973　至文堂

註３　「郡山Ⅰ」Ⅳ章３（P.16）

註４　「郡山Ⅲ」Ⅳ章（P.9～53）SB302 については P.15 および第８図（P.16）

註５　「郡山Ⅳ」Ⅲ章（P.7～56）SD273 については P.24・56

註６　「郡山Ⅲ」Ⅳ章３（P.38・39）

註７　清水遺跡第Ⅲ群土器については、多賀城跡調査研究所の丹羽茂氏に実見させていただくとともに、文献や貴重なご教示もいただいた。また、東北歴史資料館の加藤道男氏には有意義なご教示をいただいた。記して感謝したい。

註８　丹羽　茂他「清水遺跡」宮城県文化財調査報告書第77集『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ』P.3～540 第Ⅲ群土器については、Ⅳ章の P.306～314　1981

註９　加藤道男「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』1989

註10　志間泰治「宮城県角田市住社発見の竪穴住居跡とその考察」『考古学雑誌』第43巻第４号　1958

註11　多賀城関連遺跡発掘調査報告書第11冊「名生館遺跡Ⅵ」宮城県多賀城調査研究所　1986

註12　住社遺跡出土土器については志間泰治氏の御好意により実見させていただいた。また、宮城県教育委員会文化財保護課の真山悟氏・岩見和泰氏には貴重な御教示をいただいた。記して感謝したい。

註13　仙台市文化財調査報告書第43集「栗遺跡」1982

註14　氏家和典「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって」『柏倉亮吉教授還暦記念論集』1967

註15　仙台市文化財調査報告書第98集「富沢遺跡－第15次発掘調査報告書」1987

註16　仙台市文化財調査報告書第34集「六反田遺跡発掘調査報告書」1981

註17　「郡山遺跡第65・86・87次調査現地説明会資料」　1990.9
　　「第18回古代城柵官衙遺跡検討会資料－郡山遺跡－」　1991.2

註18　「郡山Ⅸ」Ⅴ章４（P.33～40）第３段階Ⅰ期官衙の古い順から A・B・C の３小期にわたって変遷するものとみた。A 期は倉庫群が建つ時期、B・C 期は板塀が造られる時期である。

註19　「郡山Ⅵ」Ⅷ章４（P.64）それまで竪穴住居跡としてきたもののうち、明らかに官衙を構成する建物で、長屋状を呈する竪穴遺構については「竪穴建物跡」と呼称することとした。

註20　「郡山Ⅳ」Ⅲ章４（P.52）

註21　註20と同　Ⅲ章４（P.53）

註22　註８と同

調査成果の普及と関連活動

1．広報・普及・協力活動

月日	行　事　名　称	担当職員	主　　催
5.12～13	第56回総会研究発表	木　村	日本考古学協会
8.24～26	第18回サマーセミナー発表	木　村	古代史サマーセミナー
8.29	見　学　研　修	木　村	国学院大学古代史研究室
9.6	第65・86・87次調査報道発表	佐藤(隆)他	
9.8	〃　現地説明会	早　坂 他	
12.8～9	宮城県内発掘調査成果発表会	長　島	宮城県教育委員会

第13回文化財展「名取川と遺跡」　11月30日～12月5日　フジサキデパート

仙台市博物館　常設展「原始・古代・中世」

八本松市民センター　「郡山遺跡資料展示」

山田市民センター　「郡山遺跡資料展示」

2．共 催 事 業

「第17回古代城柵官衙遺跡検討会」

期　　日　2月9日（土）～10日（日）

会　　場　仙台市科学館

参加者数　305名

内　　容　平成2年度に実施された城柵官衙遺跡21件の発表（資料発表6件）をスライド映写を中心に行った。また特集「郡山遺跡をめぐる諸問題－陸奥国初期官衙の成立－」では基調報告5件の発表後、1時間40分の全体討論を行った。

3．調査成果執筆

『日本考古学年報42　1989年度版』「宮城県郡山遺跡」　木村

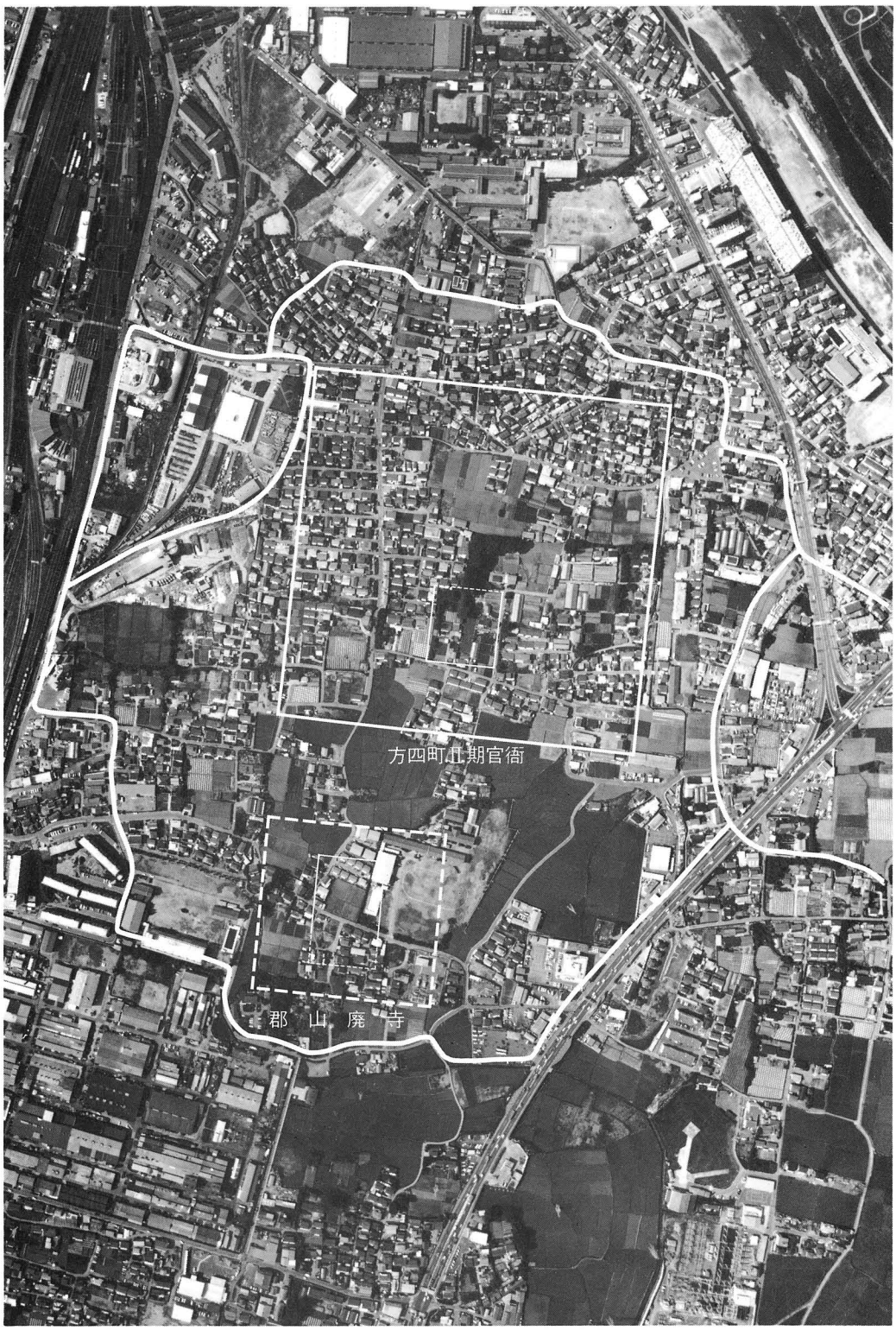
4．調査指導委員会の開催

第18回　郡山遺跡調査指導委員会　9月6日　東二番丁分庁舎7F会議室

○平成元年度の事業報告について

○第3次5ヶ年計画および平成2年度調査について

写　真　図　版



図版1　郡山遺跡航空写真

図版 2　第86次調査区
全景（西より）

図版 3　第86次調査区
全景（東より）

図版 4　第86次調査区
西側全景（東より）

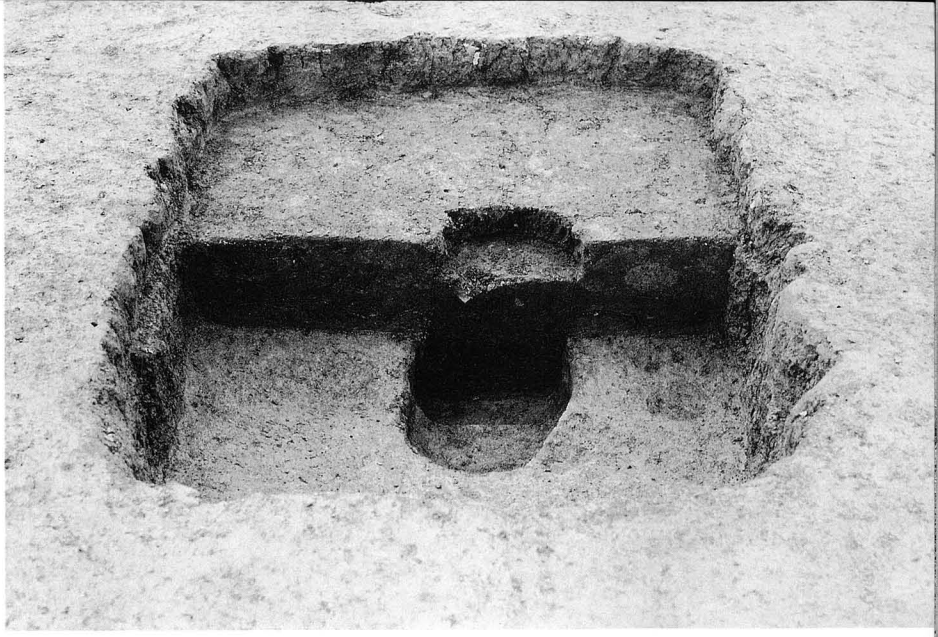
図版 5　第86次調査区
全景（西より）

図版 6　第86次調査区
建物群（東より）

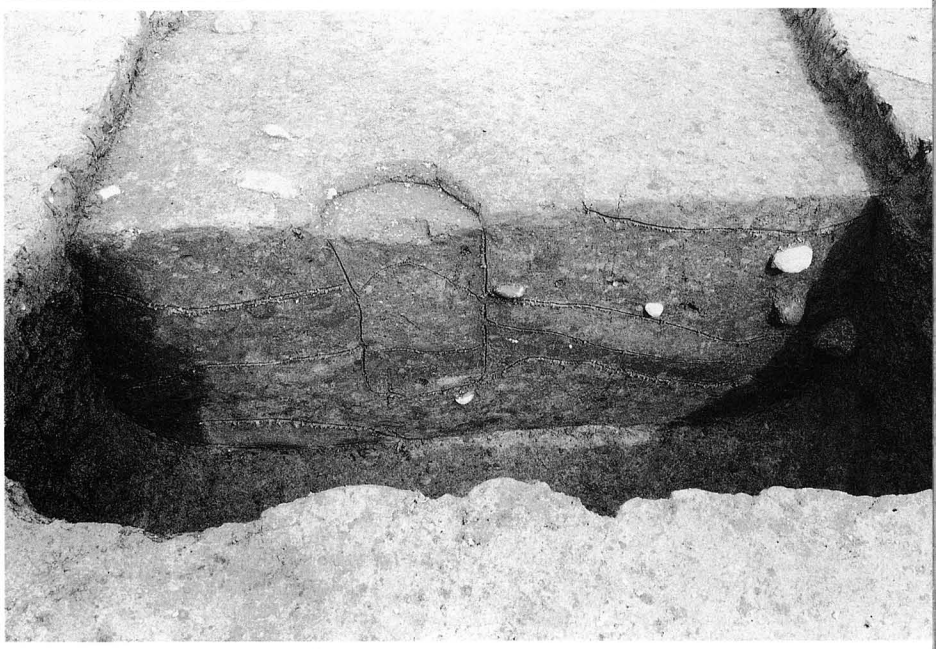
図版 7　第86次調査区
ＳＩ1294・建物群
（西より）

図版 8　第86次調査区
ＳＩ1294・建物群
（南より）

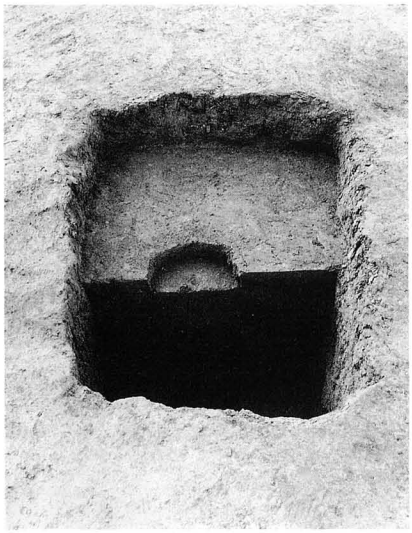
図版 9　第86次調査区
ＳＩ1294・建物群
（北より）



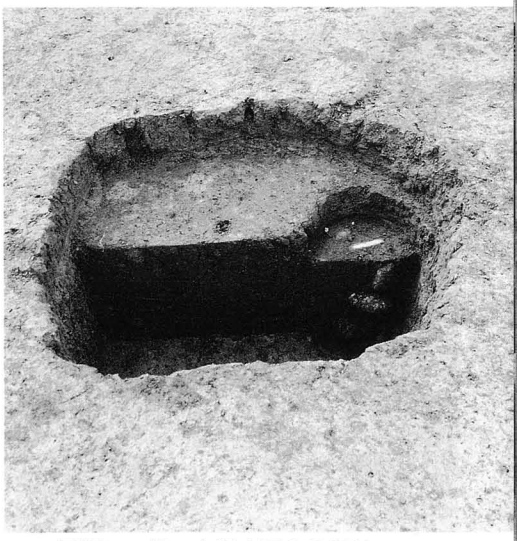
図版10　第86次調査区
ＳＢ278南１西３
柱穴土層断面
（南より）



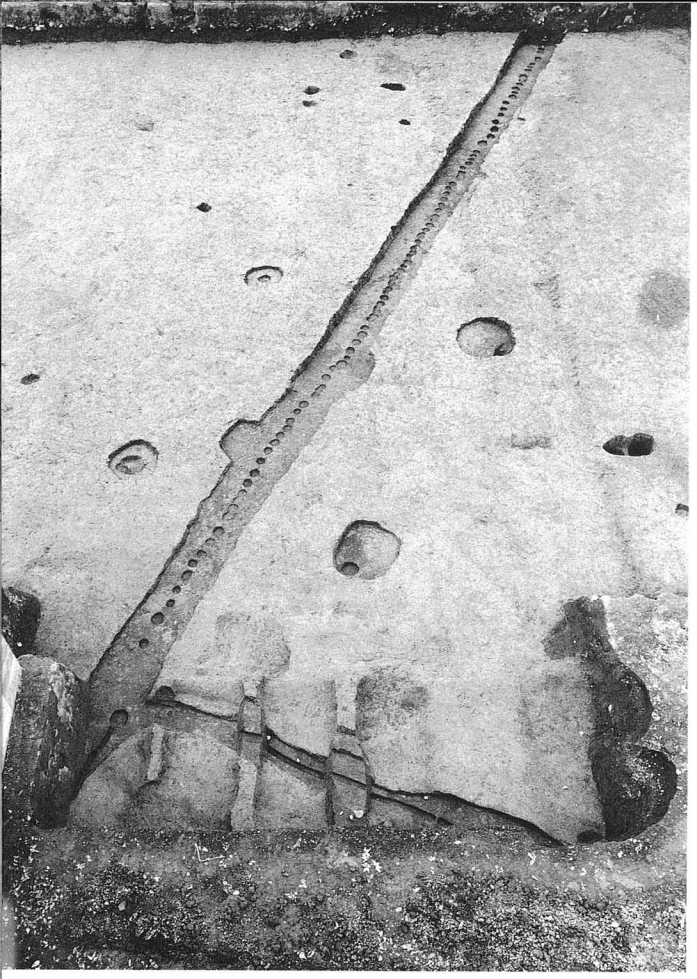
図版11　第86次調査区
ＳＢ302南１東１
柱穴土層断面
（南より）



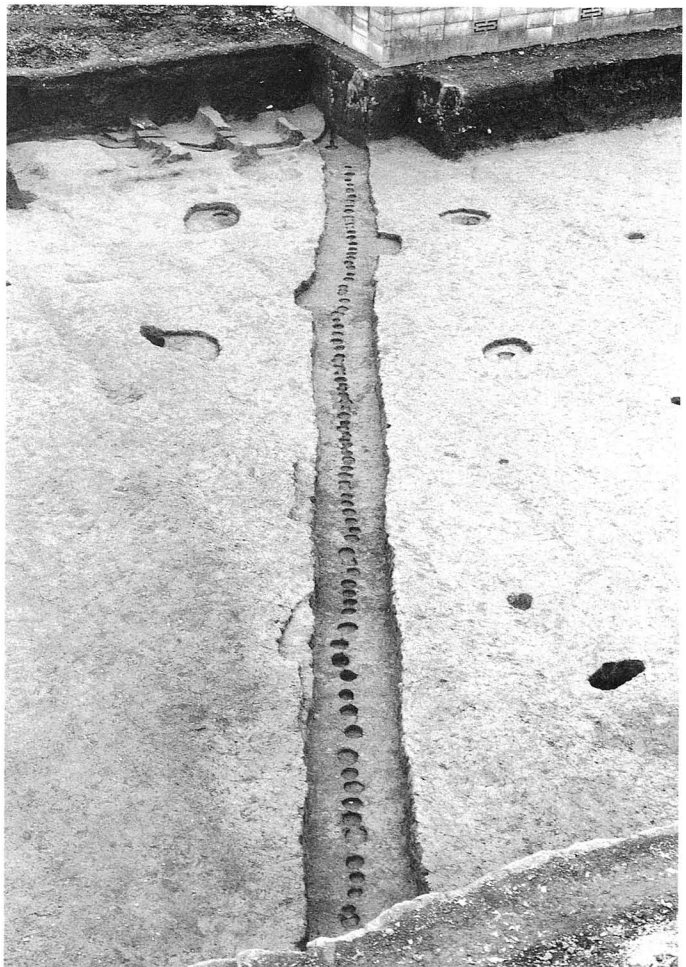
図版12　第86次調査区ＳＢ1290
南１東１柱穴土層断面（南より）



図版13　第86次調査区ＳＢ1290
南棟持柱土層断面（東より）

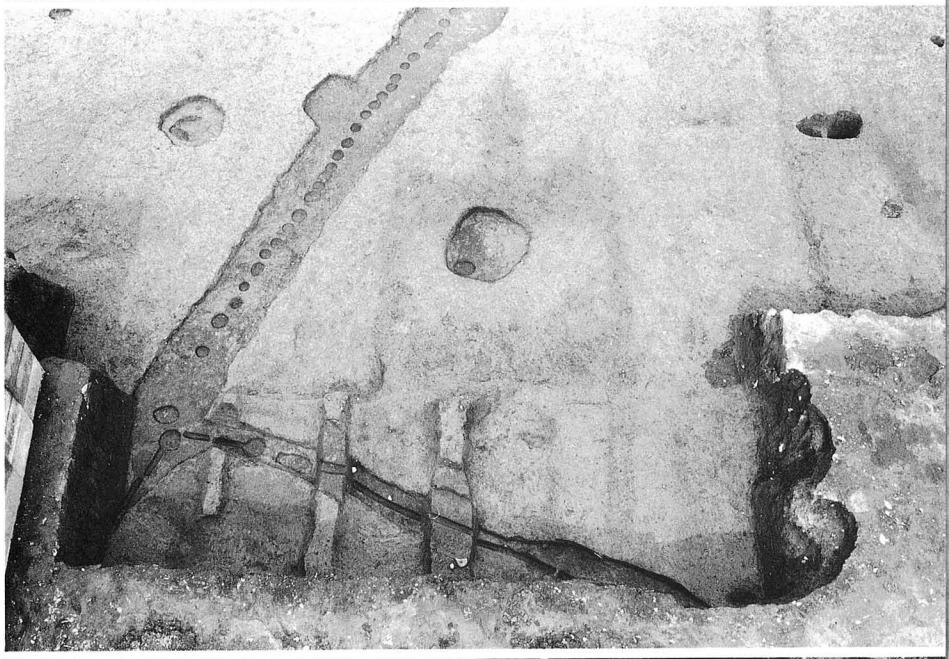


図版14　第86次調査区
ＳＡ255・ＳＡ1242
（南より）

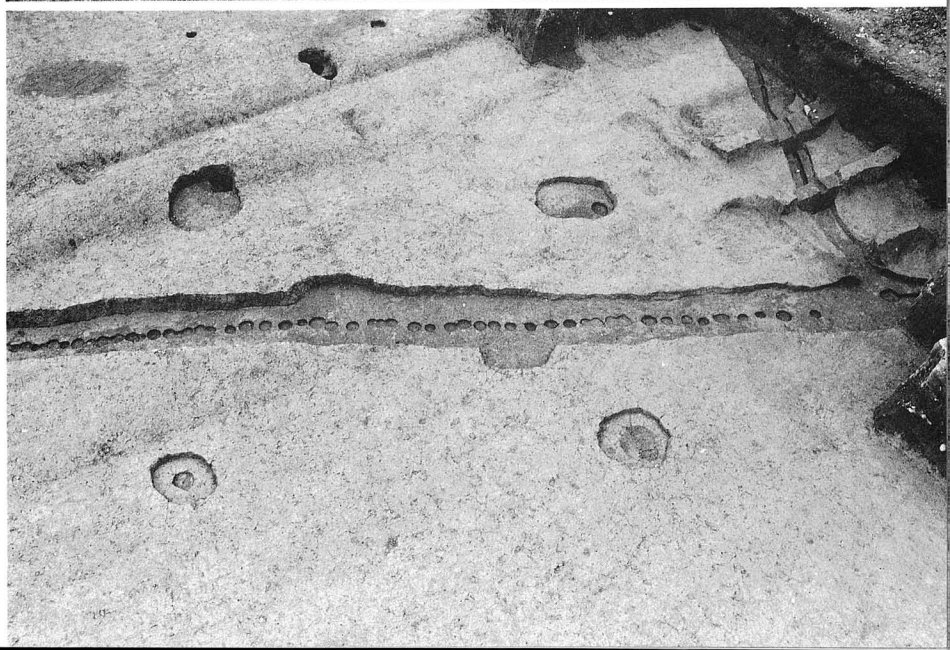


図版15　第86次調査区
ＳＡ255材木列
（北東より）

図版16　第86次調査区
ＳＡ255材木列
（北東より）



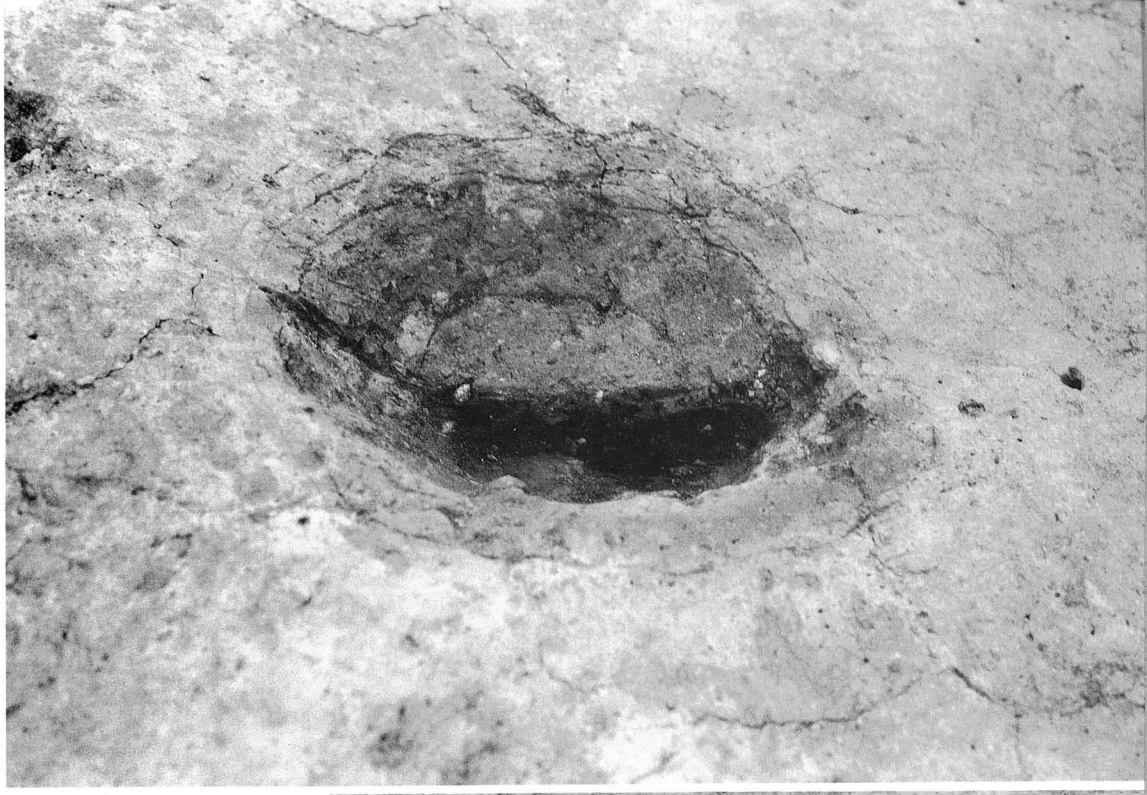
図版17　第86次調査区
ＳＡ255・ＳＡ1242
接続部（南より）



図版18　第86次調査区
ＳＢ1296（西より）

図版19　第86次調査区
ＳＩ1294完掘全景
（西より）

図版20　第86次調査区
ＳＩ1294（北より）



図版21　第86次調査区
ＳＩ1294　１号炉土層断面
（東より）

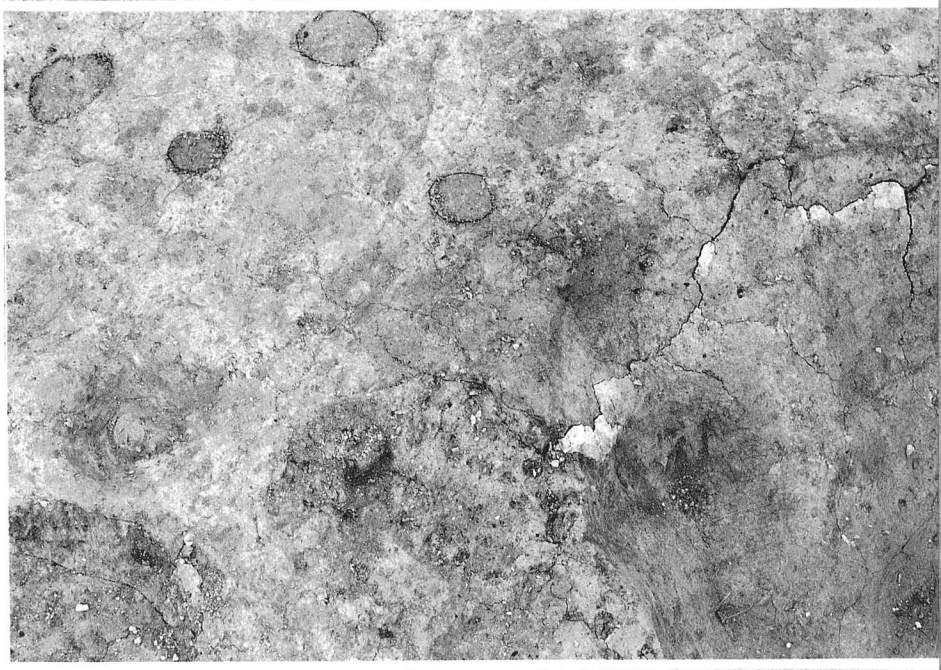
図版22　第86次調査区
ＳＩ1294　１号炉完掘全景
（南より）

図版23　第86次調査区
ＳＩ1294　２号炉
土層断面
（南より）

図版24　第86次調査区
ＳＩ1294　２号炉
完掘全景
（南より）

図版25　第86次調査区
ＳＩ1294　３号炉
土層断面（西より）

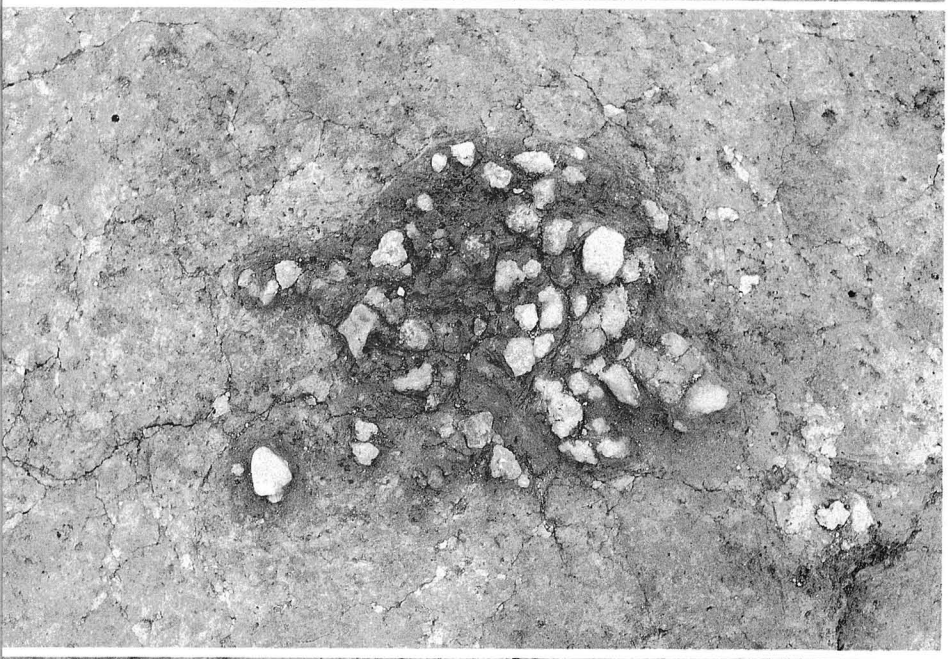
図版26　第86次調査区
ＳＩ1294　３号炉
完掘全景（南より）



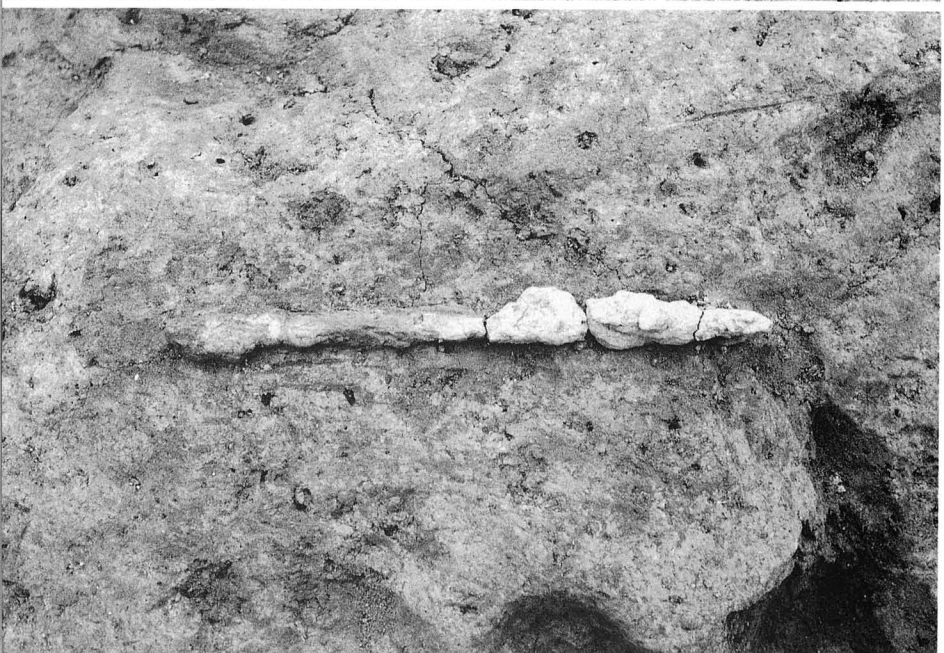
図版27　第86次調査区
ＳＩ1294　４号炉
完掘全景（北より）

図版28　第86次調査区
ＳＩ1294　６号炉
土層断面（西より）

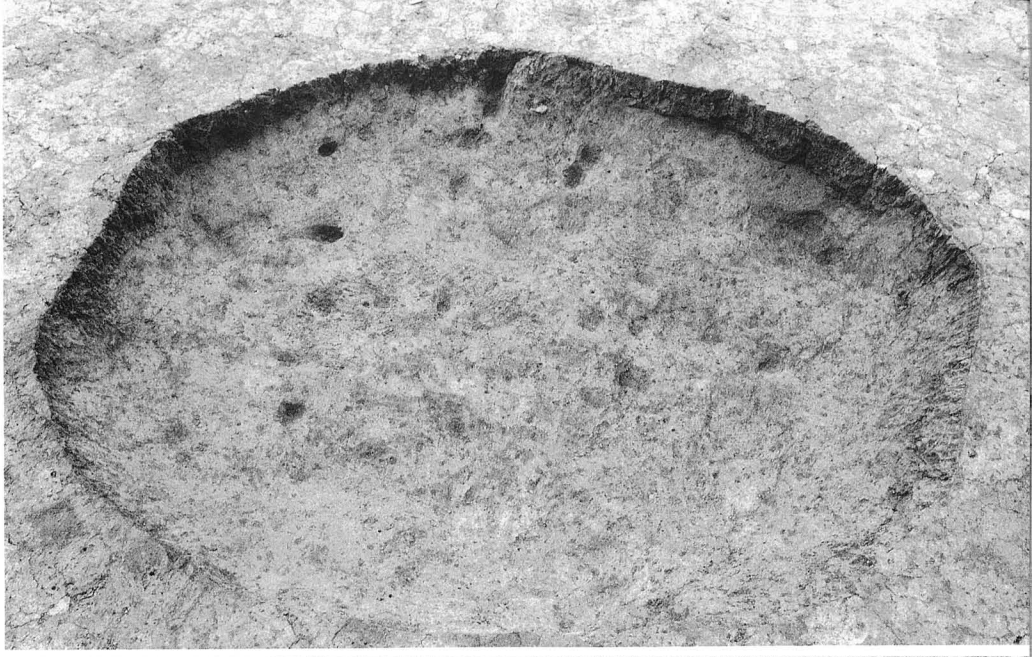
図版29　第86次調査区
ＳＩ1294　6号炉
完掘全景（西より）



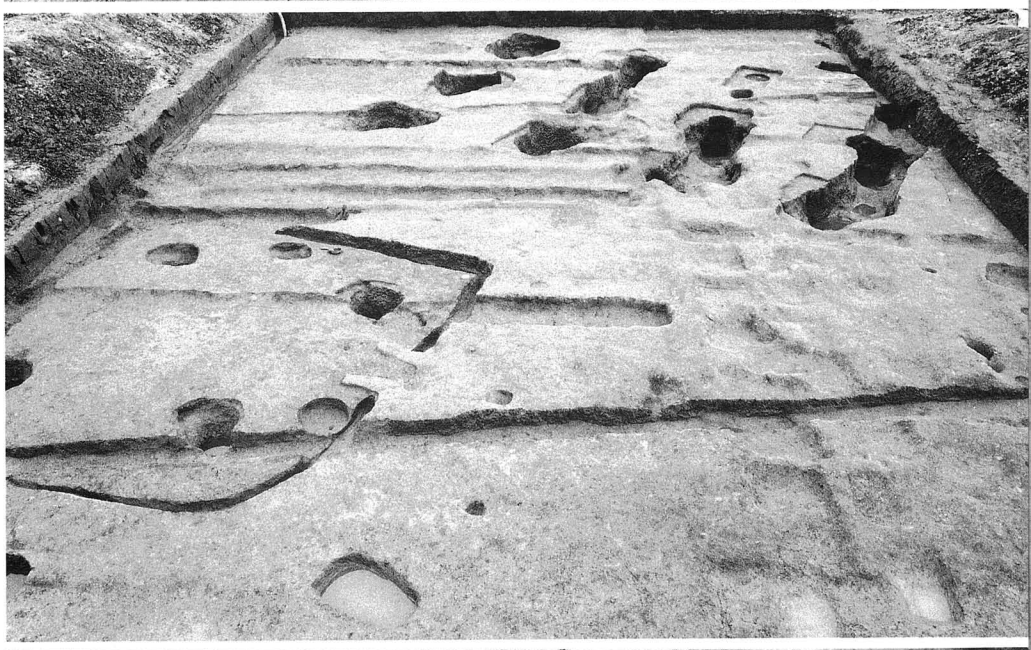
図版30　第86次調査区
ＳＩ1294　5号鉄滓
（北より）



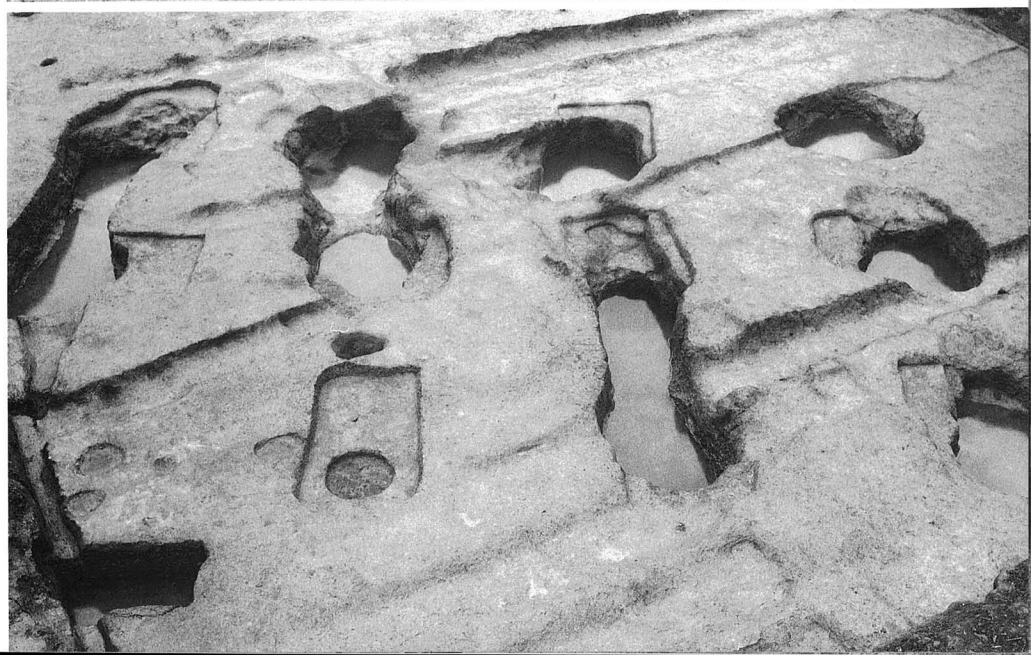
図版31　第86次調査区
ＳＩ1294出土鉄鏃
（東より）



版32　第86次調査区
ＳＫ1293完掘
全景（南より）



版33　第87次調査区
全景（北より）



版34　第87次調査区
ＳＢ264全景
（南西より）

図版35　第87次調査区
ＳＢ264　Ｐ３
抜き取り穴完
（南西より

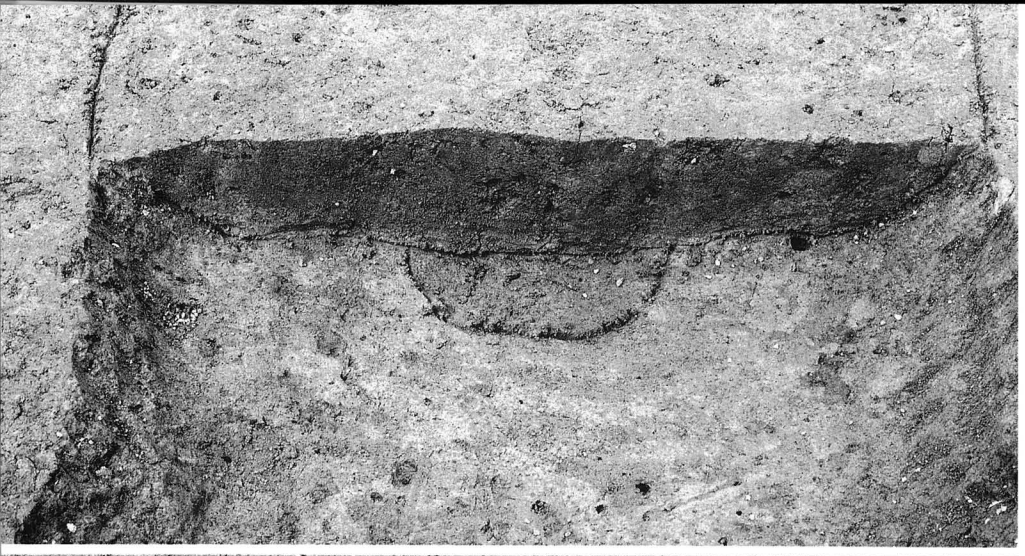
図版36　第87次調査区
ＳＢ264　Ｐ12
抜き取り穴完
（東より）

図版37　第87次調査区
ＳＩ1299全景
（東より）

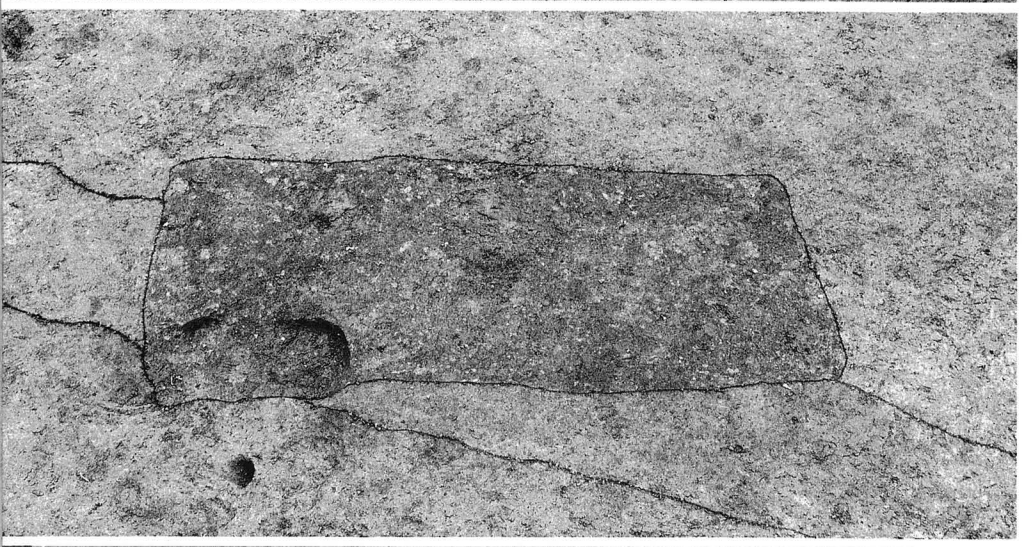
図版38　第87次調査区
ＳＩ1299
遺物出土状況
（北より）

図版39　第88次調査区
Ⅱ層上面
（北より）

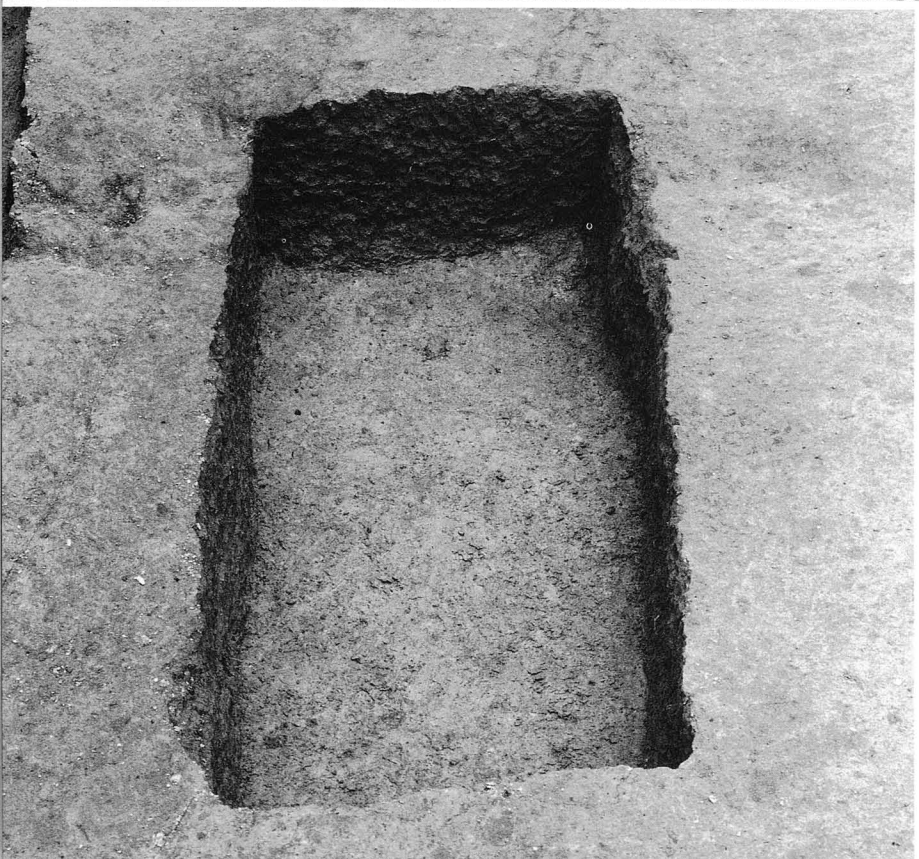
図版40　第88次調査区
全景（北より）



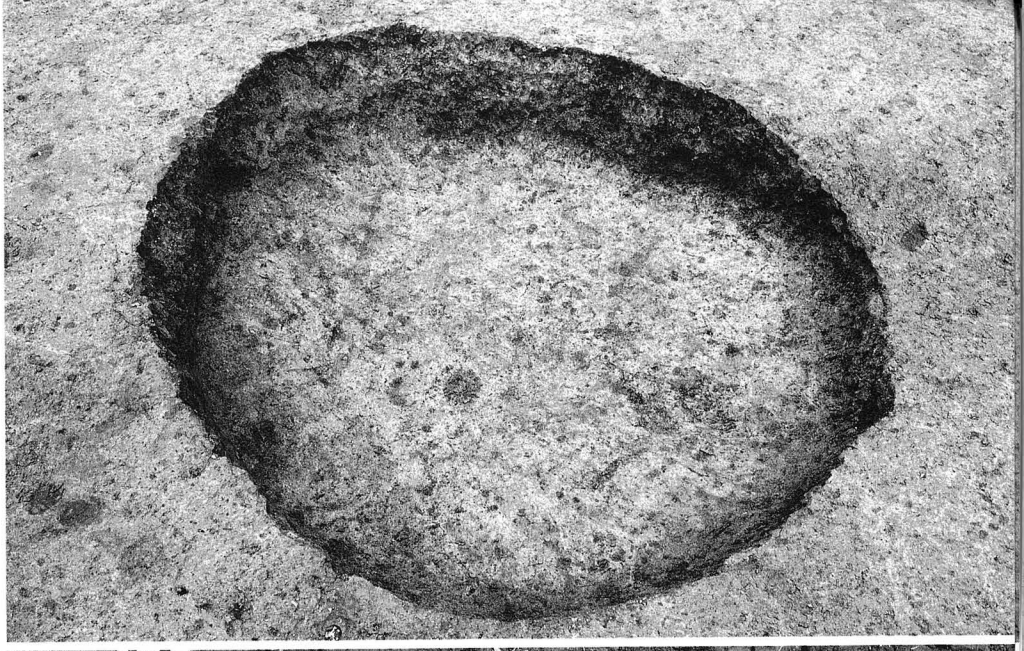
図版41　第88次調査区
ＳＡ1289
土層断面
（南より）



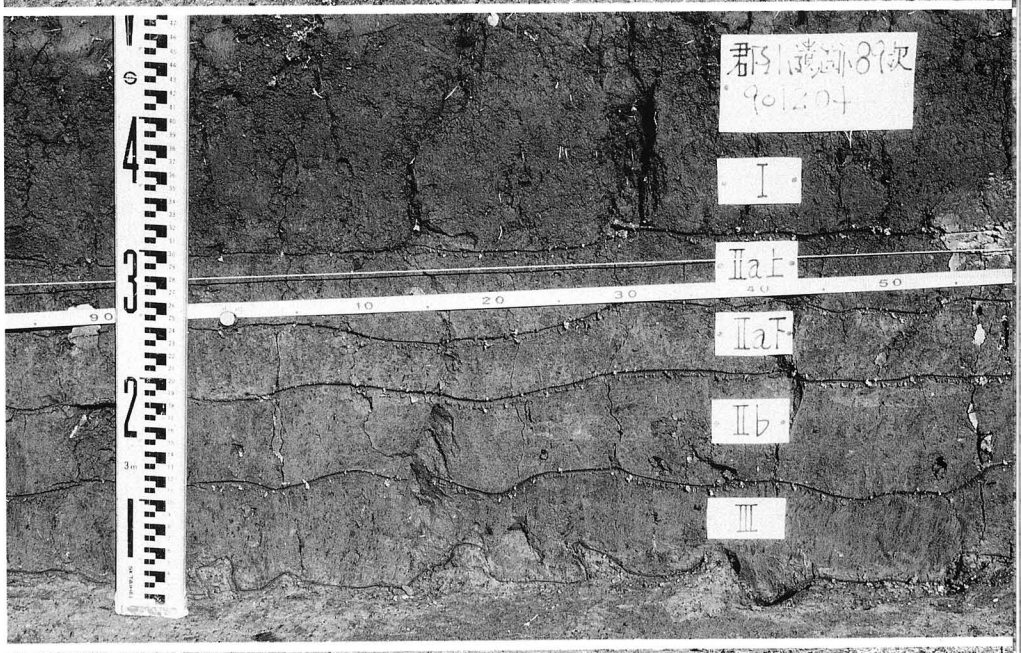
図版42　第88次調査区
ＳＫ1284
検出状況
（西より）



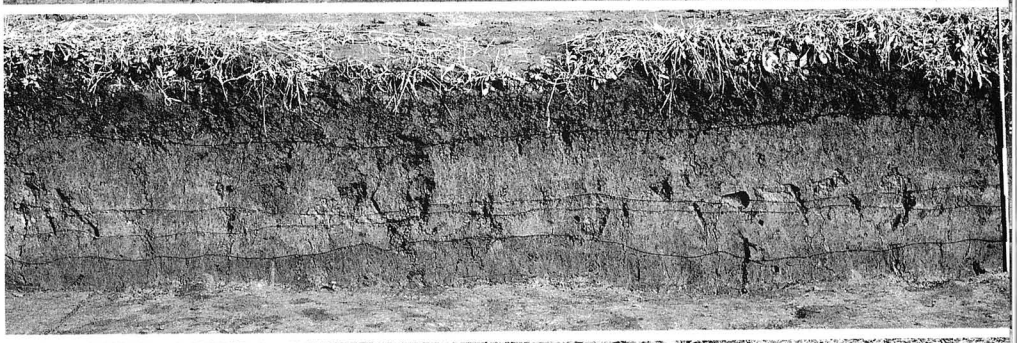
図版43　第88次調査区
ＳＫ1284全景
（南より）



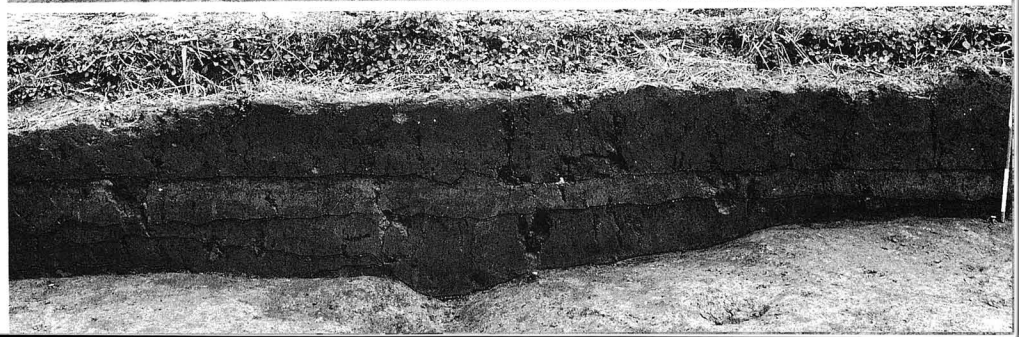
図版44　第88次調査区
ＳＫ1286全景
（東より）



図版45
第86次調査区北壁
プラント・オパール
サンプル土層断面
（南より）



図版46　第89次調査区
北壁畦畔
土層断面
（南より）



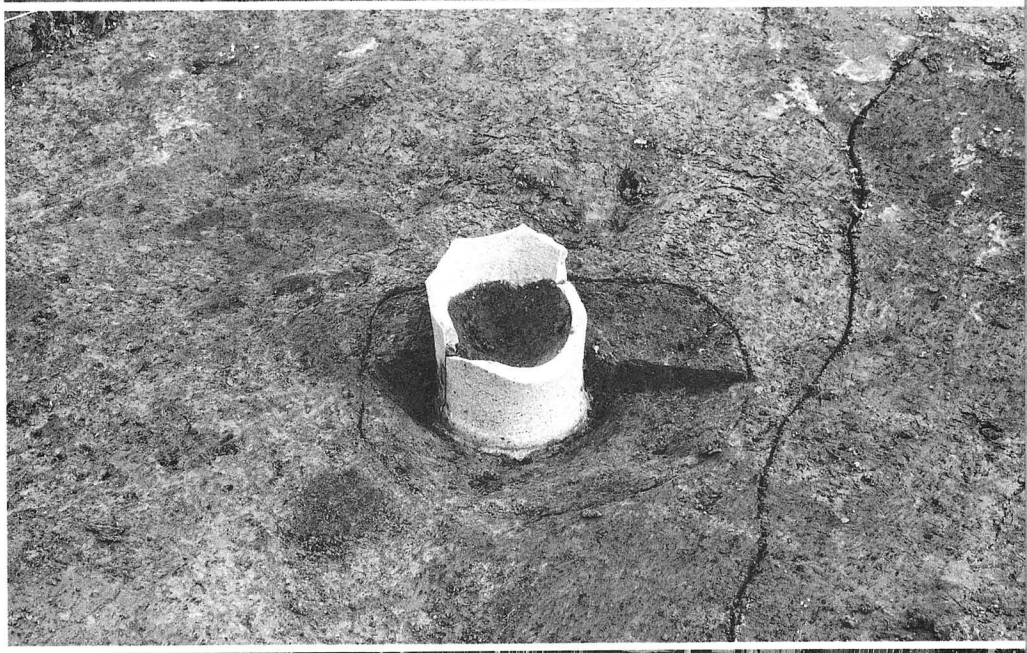
図版47
第89次調査区東壁
北端土層断面
（西より）

図版48　第89次調査区
北区西壁南端
土層断面
（東から）

図版49　第89次調査区
Ⅲ層上面畦畔
完掘（西より）

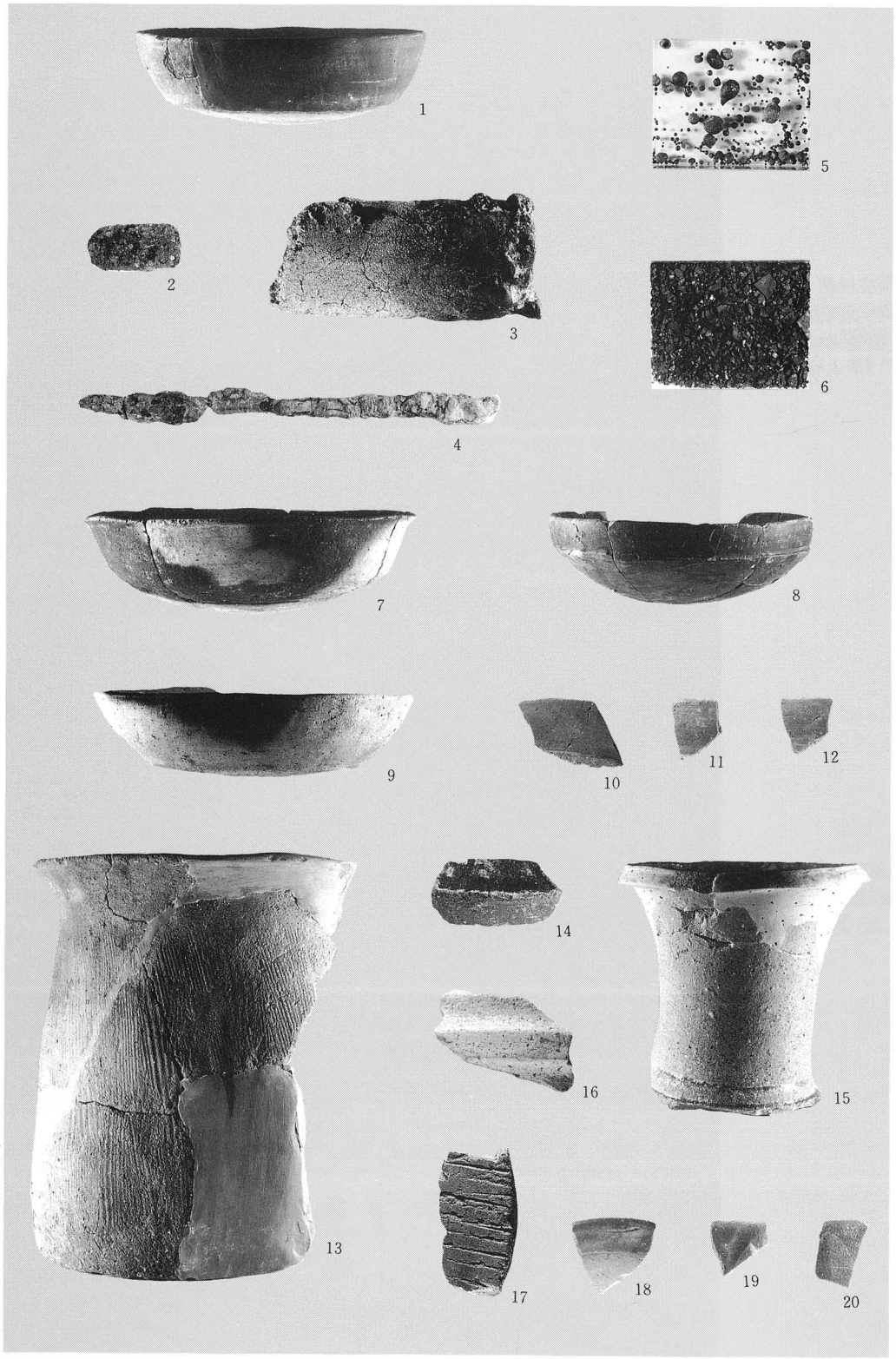
図版50　第89次調査区
上面遺構検出
（東より）

版51　第89次調査区Ⅳ層
上面遺構検出状況
（南より）



図版52　第89次調査区
須恵器出土状況
（西より）

図版53　現地説明会



1．土師器坏　C-656
2．鉄製品　N—44
3．フイゴ羽口　P—19
4．鉄鏃　N—49
5．粒状滓
6．鍛造剝片
7．土師器坏　C-669
8．土師器坏　C-670
9．土師器坏　C-674
10．土師器坏　C-671
11．土師器坏　C-672
12．土師器坏　C-673
13．土師器甕　C-681
14．須恵器壺　E-320
15．須恵器壺　E-324
16．円筒埴輪　P—21
17．石臼　K—27
18．陶器皿　I—29
19．磁器碗　J—9
20．磁器碗　J—8

図版54　出土遺物

文 化 財 課 職 員 録

課　長　　早坂春一

管理係		調査第一係			
係　長	鴇田義幸	係　長	佐藤　隆	教　諭	佐藤好一
主　事	白幡靖子	主　任	田中則和	主　事	佐藤　洋
〃	佐藤良文	教　諭	太田昭夫	〃	金森安孝
〃	高橋三也	主　任	篠原信彦	教　諭	小川淳一
〃	庄司　厚	〃	木村浩二	主　事	渡部弘美
		主　事	吉岡恭平	〃	工藤哲司
		〃	斎野裕彦	〃	主浜光朗
		教　諭	五十嵐康洋	〃	長島榮一
		〃	渡辺雄二	〃	工藤信一郎
		主　事	大江美智代	〃	荒井　格
				〃	中富　洋
		調査第二係		〃	平間亮輔
		係　長	加藤正範	教　諭	高倉祐一
		主　任	熊谷幹男	主　事	佐藤　淳
				〃	渡部　紀

「郡山遺跡」発掘調査報告書刊行目録

第23集　年　　報1 ―昭和54年度発掘調査略報―(昭和55年3月)

第29集　郡山遺跡Ⅰ ―昭和55年度発掘調査概報―(昭和56年3月)

第38集　郡山遺跡Ⅱ ―昭和56年度発掘調査概報―(昭和57年3月)

第42集　郡山遺跡 ―宅地造成に伴う緊急調査―(昭和57年3月)

第46集　郡山遺跡Ⅲ ―昭和57年度発掘調査概報―(昭和58年3月)

第64集　郡山遺跡Ⅳ ―昭和58年度発掘調査概報―(昭和59年3月)

第74集　郡山遺跡Ⅴ ―昭和59年度発掘調査概報―(昭和60年3月)

第86集　郡山遺跡Ⅵ ―昭和60年度発掘調査概報―(昭和61年3月)

第96集　郡山遺跡Ⅶ ―昭和61年度発掘調査概報―(昭和62年3月)

第110集　郡山遺跡Ⅷ ―昭和62年度発掘調査概報―(昭和63年3月)

第124集　郡山遺跡Ⅸ ―昭和63年度発掘調査概報―(平成元年3月)

第133集　郡山遺跡Ⅹ ―平成元年度発掘調査概報―(平成2年3月)

第146集　郡山遺跡Ⅺ ―平成2年度発掘調査概報―(平成3年3月)

仙台市文化財調査報告書第146集

平 成 2 年 度

郡 山 遺 跡 XI

――平成2年度発掘調査概報――

平 成 3 年 3 月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会
仙台市青葉区国分町3－7－1

印刷 ㈱東 北 プ リ ン ト
仙台市青葉区立町24－24 TEL 263－1166